

資料

尾崎八束「修学旅行日記摘要」（明治三十二年）・

神宮皇學館「本科探究録」（明治三十三年）

― 神宮皇學館修学旅行日記・満鮮旅行記（四） ―

尾崎八束「修学旅行日記摘要」(明治三十二年)・

神宮皇學館「^本科探究録」(明治三十三年)

― 神宮皇學館修学旅行日記・満鮮旅行記(四) ―

皇學館大学研究開発推進センター

・本科第六回修学旅行

期 間 明治三十二年十一月五日～十二日

目 的 地 大和

引率教員 二名(黒木千尋教授・尾崎八束教授)

参加学生 十名(四年：小串重威・斎藤伝左衛門、三年：長谷外余男、二年：小野壽彦・河村政吉・額賀大直 ほか四名)

掲載資料 「修学旅行日記摘要」(『館友会雑誌』第一号、皇學館々友会発行、明治三十三年十月、附録)

・本科第七回修学旅行

期 間 明治三十三年十一月五日～十六日

目 的 地 大阪湾周

引率教員 二名(尾崎八束教授・清水保臣教授)

参加学生 十二名(三年：伊東増衛・額賀大直、二年：葦津洗造、一年：秋山鼎造・伊藤千可良・大林完・奥村奥右衛門・神吉道治・関谷猪助・樋口長次・平部直・薮重吉)

掲載資料 「^本科探究録」(『館友会雑誌』第二号、皇學館々友会発行、明治三十四年四月、附録)

「探究余瀝」(『館友会雑誌』第三号、皇學館々友会発行、明治三十四年十月、附録)

翻刻にあたっては、仮名遣いは原文のままとしたが、漢字は常用漢字に改めた。誤植であることが明らかなものについてはこれを訂したが、当て字などは原文を尊重した。通読の便を図り、句読点・濁点の無い文章にはこれを補い、行頭を一字下げ、長文の史料引用は改行の上で二字下げにするなど、体裁を改めた箇所がある。文中に、今日的に不適切な用語が使用されている場合にあっても、歴史資料としての性格を鑑み原文のままとしたことをお断りしておく。

なお本稿の翻刻・編集は旧館史編集室にて行ったものである。

修学旅行日記摘要（明治三十二年十一月五日～十二日）

修学旅行日記摘要

監督員 尾崎 八束 稿

天下は到る処吾人史書を繙く者のために実験室を給供し、吾人が是等実験室を出入する傍はら、勢ひ感得する所の興味快樂は、しかく実地を踏渉歴見するもの、外は何人も領会享受し能はざるものに属す。されば吾が學館に於ても毎歳一回を下らず必ず修学旅行の命出で、年穀方に黄熟するの秋之が途に上るを以て其例期となす。去秋卅二年には本科生十名、監督員二名に率られて大和地方に向へり。正に好個の実験室、最上の跋涉場裡なり。別に専科生三十余名、三名の教師指導の下に県内を歴巡す。是亦露蹤忠墳等著明なる史蹟に關係を有するもの歴として存在し実地踏査の要優に之あるが故なり。前者は行程一週日を期とし、後者は三日を限とす。予や大和方面の一行に監督の一員として加列し、親しく旅行の状況を看知し且つ責の一半を分たざる可からざる関あり。乃ち秃筆を揮て其概要を摘記し、併せて他一行の状況一斑に就て少しく聞く所の者を載録する左の如し。

此旅行素より二途なるべきものながら出発当初には両者暫らく其進路を全じうし得べし。因て旅行本来の期に先つこと一日、献桜会行事を兼ねて一仝山室山に向ふことに定め、備装完く終はりて、十一月五日の昧曉行員悉く館の前庭に集まり、しばしの別を見馴れし流水峯嶽に告げて第六回修学旅行の途に上れり。列車一番、玻窓の滴露秋冷々たるを覚えしめ、曉霧車外戴里の登を鎖して旅愁寧ろ旅愁の好愛すべきを知らしむるに似たり。徳和に至て汽車を離れ徐ろに山室に向ふ。途上の快樂さらに得言ふ可からず。半眠の野色外一面より映じ来て眼目を喜ばしめ、朝旦感襟の清爽なる自ら歩速をして常度外に走らしむるなり。七時遂に達し、妙楽寺に一休後一仝本居翁墳塋の高邱に登り親しく桜花を植うるもの十五

本、尋で質実なる祭儀を墓前に挙行し畢てこ、を下り寺に還りて喫飯後仝寺所蔵にかゝる翁の遺什を一覧す。或は云ふ是等の幅帖は真個その者にあらず、実物は松坂町内翁の裔孫なる健亭氏の許にありと。又如聞く翁の妙楽寺来遊は常のことにして多くの編著は実に伊勢海の滄浪に臨むこの境より出でしものなりと。この最後の言や少しく疑ふべきふしあり、又別に徴証の具備するをきかずと雖、妙楽寺後園の眺め遙にしてその地無上清閑の幽域なるを見るに蓋し少しく歩を進めて可否孰れかを決するに足る一伝と言ふべきか。尚ほ翁の奥墓の西面せるは吉野水分神との契縁に出づといひ、この地の土豪山室氏のこと、云ひ、考説に事績に、多少該地方人士の採て完明するに足る問題この地に存ぜりと雖、一行のこ、に來旨や主るこの点に存せず、故に久しからずして意を他方に転じ、十一時の頃この地を辭して松坂に向へり。この間隊伍を解さしかば松坂城趾・本居翁の旧宅等に往訪するもあり、然らざるもあり。午後一時の期に近く一仝停車場に集まるを見たり。恨むらくは去歲脚氣病の勢館内に猖獗を極め当時猶之を患ふるもの、数頗る多かりしことなり。このことありしかば、生徒中数名前途全行に堪へずして暇をこ、に取り、一・二名の疾較輕きは之を冒して同進するに決せり。程なく往くもの留まる者に送られて乗車し、三時余龜山駅に着するや始めて二途に分る。即ち専科生は直に跋涉の端緒につき、本科生は猶汽車の送るにまかせて目的地に向ひぬ。廻転幾百万回、突兀たる山岳、低谷に散在せる家々、奇巖絶壁、飛禽走狗、悉皆一瞥の間に謝し去り來り映じ、秋晩の天日いつしか西山に没し畢るや、薄暮寂寥をかざして時毎に愈凍陰に赴き、伊賀の高邱・笠置の名山など、或は見或は見ざるに經過して、奈良三条駅に着したるは時已に七時余なりしなるべく、やがて猿沢池畔の一旅舎に投じたる。之を此方面旅行隊がふみたる初日課程の終とす。奈良七御代の皇都に入れる今、八十四年間異彩を放ちたる文物技芸、其外前後の事変風俗等髣髴として眼前に現じ來り、率川の溪響夜もすがら一行の枕をた、けり此挙他人事の総てと全じく時間の制來あるは固よりのことなり。該地方見逃す

可からざる実験室の多き、各室宝什に富みて数日を費やすも猶興味津津たるを覺ゆべき類許多なる、是皆期して疑はざる處、之を肆にせば行程の延長も極めて大に、彼是一行が時間の短少なるを感ずるや切にして、而もこの牽束や之を弛うするも必しも一定の際限を算出し得べきにあらざるを知る。是に於てか一行は大和地方といふ大題目に基づき、一局拘泥を避くることに覺悟し、概略区域別をなし日時を配当し、其範圍内に於て出来得る限り精を致さんことに決しぬ。之と同時に当日の記事主任を籤定したり。この日の担任は本科四年生小串重威にして明六日は全三年生長谷外余男・二年生河村政吉なり。

六日朝来晴天の模様しるし、起床後早々群鹿と共に春日野近く追ひ出づ。采女の投入せりといふ獼猴池の周囲、是れ一行が探究の目的とするに足らずと雖、盆杯然たる小湖畔の暁色また何等多趣なる、烟霧疎に鎖して鯉魚未だ全く起きず、柳条枯槁するに似て個中猶生氣をとゞむるが如し。旅清真に輕快となり先づ暫し興福寺域内に入る。春日と興福寺と藤原氏と、吾人はこの間離る可からざる關係あるに於て嘗て得たる印象を失ふことなく、一条の御宇をいはず、其以前以来戦国に到る数百年間、僧兵を飼畜して台嶺に對立し、以て暴威を旧新兩京の間に振ひたる法相宗の本山、鎌倉の武威すら之が寺領に對して爪牙たる將吏入部せしむる能はず、変乱の時世に際しては常に勇猛の円顚を産出したりし奈良七大寺の一。是等の央的觀念は、幾度か祝融の難に罹りし後の今、残存せる所の堂宇塔樓何れも皆高市飛鳥にありし当時のものにあらざるは固よりなり。災余再三建立の後報賽当に乏しかるべきの際僅に建築せるもの多きに居るべしと雖、其如何に拘はらず眼前映ずる所の感見と一致契縁して、興福寺の構へ如何に莊嚴雄大に又そが寺中の繁栄如何斗なりしかを想はしめざるを得ず。一行はこゝに新能の式場なりてふ樓門の遺礎をはじめとし、南円北円二堂、金堂東金堂、三重五重の両塔、及西金講堂鼓鐘樓山門趾等を一瞥し、南円金堂は其内陣に入て仏鉢の名作建築彩漆の

概様を閲目する所あり。之を此行中数多く遭遇せし伽藍配置の式態堂塔像画の宝物接見のはじめとなす。こゝに現見せる整然たる地区に、堂舎図牆の土木に、固より皆最古のまゝ、を伝へずと雖、寛治康治降ては応永以後に係はる建築、是よりも旧古なる仏像又は古鐘金燈籠に、何れか史門に入らんとするもの、ため何等の資助を供せずと言はんや。明治至代の今日、旧物保存の途聞け、其重珍は国宝となり、官手を下して修繕を加へ其余は私設保存会の設けありて燃余の柱材も空しく捨てず、傾危せる屋宇も猶支へらるゝに至れり。是れ後進将来の世の並びに当代に向て謝せざる可からざる所にして、このこと興福寺より寧ろ他に多く見るべしと雖、其一端……に現はれざるにあらず。乃ち再三飛説の煩を避けこゝに前言す。已にして屢々至尊の駐駕ありし、又義昭の故に人の知る一乗院を知らんとして、今彼処に裁判所たりとの益を得し如きは興福寺境内の壮大を思為する吾人の意をして頗る満足の域におかしめしものありき。由来奈良の現町坊は大興福寺・東大寺・元興寺其他諸寺の境内なりしものにて戦国以後始て現市街の漸を作せしものなり。寧樂の皇都は今多桑田と化し去り、曩昔寺域又は田園なりしもの後一県 of 官衙町民の住地となりたるなり。興福寺に就て言へば食堂の趾は原庁、東円堂の場所は師範校にて構内に八重桜あり、以下歴々徴沁すべきが如し。是亦こゝに括言しておくのみ。一乗院に對する大乘院及朝香山の成身院趾等は迂回の恐あり且つ甚要なければ往て尋ねず。一行が興福寺を出で、より只一見せしは玄奘創立の菩提院天正修繕の堂宇次に新薬師寺なり。この間春日野社道右側をたどりぬ。是れ明七日若宮祭たるの故にや大路は競馬の習練場(マヅ)たる部分あり。觀者通路を梗塞すればなり。而して踏む所の邱園は所謂浅茅原飛火野等平安新京の才子歌人等が好んで来り遊び若くは詠歌の名題とせし所ならざるはなし。望む所亦之に垂ぐ。野守鏡雪消沢其名の雅にして今見る所杯水も啻ならざるには我れ人一驚を喫すべし。新薬師寺の古刹は右折して林間を行くこと数町、更に敗頽せる土牆柴垣に沿ひ数町の行程をへし後之に接せり。寺は一旧堂を存する外昔時の壯觀

全く興見すべからず。是れ旧蹟の多くは其現境以外の田園中に潜在するが故なり。織田有楽の棲蹟を就て訪ひしが要領を得ず去て春日山の緑林中に入り、先づ若宮を拝して尚ほ新古石燈金銅釣燈籠に曝目しつゝ、二、三町を行て大宮に出づ。一行中禰宜大東氏を知るものあり、春日の文書宝器に富むは嘗て聞く所なるが故に一全之を閲覧せんとするに意ありされど祭日前軼掌多端なるべきを思ひ、試みに旨を大東氏に通ぜしに、氏亦事の急なると繁忙なるとを以て之を辞したりしが猶一行の幸なりしは難なく内庭に入て四社に拝するを得、又神前に陳列せる甲冑文具釣燈籠一二筆蹟を閲覧し、春日特色の建築祭儀の一端を其処に窺ひ得しことはなり。藤原氏の氏神として又国運武運の長久を冥護し給ふ大社として王公貴人の尊信厚きを致し其御実体のことなれば、之に奉仕せる家々又は興福寺等とは盛衰の勢を異にして威靈今尚高く、社殿の構造色彩、廊舎階段橋道の敷設等大方旧に拠て伝は棲門の類は今に古へありといふるが如し。但於て固より闕けたり。蓋社殿は清浄をよしとし伝を失はざれば改造を厭はず寺塔の大建築を創めて遂に衰敗を招くものと大に趣を異にすといふべきなり。しかれども一行猶俗信にいふ左甚五郎の「ねぢり廊」なるものを見ることを妄れず。又七種の寄生木に奇異の旨を宣言して、能ふ可くんば帰路奈良に宿するの朝再拝詣せんことを望みて境外に退出す。是より御手洗の細流に沿ひ棘路を分けて水谷河上流旧紅葉の谿に入る。紅葉真に紅於二月花、何時何人の作為ぞ。日月両象刻銘の石あり、こは氷室旧跡なりといふ。近傍に無人亭あり。溪流に臨み楓樹をかざし、俯仰によろし。乃ち休憩弁備、畢て若草山麓に出づ。武蔵野の名あり。山姿野粧誠に愛翫すべく、蓋是れ平安の東山、南都の最上遊園なり。手向八幡之に隣接す。処として史中の宮人搔客を懷想せしめざるはあらずと雖、此行素より之に倣ひて優遊閑雅に一時を費やすを許さず。故に目送するばかりかく過ぎ去り、やがて奈良朝仏法興隆の第一標目なる総国分寺都京の鎮護ある東大寺境内に入れり。二月三月四月の堂宇、是等の開基良弁実忠及本殿第二の建立者俊乗坊重源、第三の勸進僧公慶等に関す

る紀念物、而して鐘樓大仏殿回廊諸門僧房戒壇院及寺内の諸祠諸建造物、凡そ人口に膾炙せる所、順に従つて閲覧を遂げ、而して俗人の驚歎する如く吾人亦或者に就て驚歎を新にせり。大仏殿二度の兵燹并に三度の建立は載て史伝記録に詳なり。吾人が驚く所のものは金銅毘盧舍那仏坐像其者の大なるより、延て殿堂の結構に境内の諸鑄塑に全体凡て是れ大なる点にあると全時に、宝永には薩摩より、建久には周防より伐採運搬せる柱梁木材又は人夫労役の大なる、前後陸奥より貢獻せる金額其他鑄像に必要なる鐵銀銅炭炭銀の料並に京都より鎌倉より全国より人の来聚する数の巨多なるにあり。曰く、定朝、曰く運慶湛慶曰く順慶等の名ある彫刻師、天平の鑄塑術、鎌倉時代和漢の工芸及享保時代の建築術を多くの本尊はじめ仁王像大鐘燈籠石獅子及現見殿堂の間に見得たると全時に其時代々々の崇仏念の深篤なりしを愕かざるを得ざりしなり。かゝる間時は駸々として進み去り午を過ぐることに已に一刻、乃ち爾余の研究を卓前に譲ること、し、所謂転害門を出つ。中途勅封正倉院宝庫の前を通過したりしが入覧するよしなければ言はん様もなし。是に至て一行二隊に分る。こは予期のまゝ、一全市外に赴くこと、却て市内有名旧蹟を漏さんこと、なるべければなり。乃ち黒木氏・河村生以下半数は歩を緩めて留まり、予及西部主任・長谷生以下半数は長途の踏査にかゝりぬ。この一隊は先づ京都街道に由り暫くにして左折迂曲小逕の到り窮する処荒圃発棘の中に御陵を拝すを得て再本道に還り、佐保川を渡りてやがて般若寺の門に入るに、狭少なる四至内秋草深くして一大輪塔の周囲に二十余の小塔列座するを見るの外は只荒敗せる本堂と観音の小宇とあるのみなりき。宿坊を索めて、問ふに大塔宮御潜隠のきこえある辛櫃、当時の殿堂并に寺伝縁起等を以てせしが、今本住を失ひ本山兼監の寺となりて、問に答へるものは只番守の妻たるに過ぎざりしかば詳細をきく能はず。乃ち辞し去れり。但所謂経櫃の博物館にあることは、聞き得て兎に角一覽せんずべき希望を一行の脳裡に起さしめしが如し。是より奈良阪を過ぎ、源平二氏争乱の世を追懷しつゝ、奈保山東西の御陵道に入り、漸くにして索

め拝す東西相去ること数町余、鉄道其間を通ず。東陵は函石のこと、今陵政挙がるの日となりては最早其物を見る可からずと雖以前にありては然らず、又旧き沿革は詳にのせて古記中にあり。且つ之を實見せる奈良市人某にきけるに其石質は極めて珍らしきものなり。これより、邱を攀ち道を求めて僅に小祠の傍に出で御陵を望んで進めば聖武太子基王陵にして嘗て史界に紹介せられたる奇獸の刻銘ある標石を有せるものはなり。再險阪を下り鉄道を横ぎり、荊棘を分け池畔を伝ひて更に一山を上下す。是れ多聞山一帯の峯嶺にして、松永久秀の躰趾^{（遺跡）}今認むるに容易ならず。下て田畑に出で、道路始めて正に帰せんとし、佐保村民屋眼前に牆を接するとき、聖武天皇佐保山の御陵を拝す。其東には光明仁正皇后の陵墓あり。^{（時已に三三時過なり。暫し店に入り喉を湿し休憩して西す。）}暫し店に三三時過なり。て西す、時已に入り喉を湿し休憩大仏停車場を過ぎ一直線一条大路を行くこと一里程、法華寺門前に達す。其間右方山麓に興福尼院不退寺等を見るべく、他は一面皆耕野稻田の秋獲を告ぐるあるのみにして、延暦七年の遷都実に其始を作れるものとす。法華寺は添上添下郡界に近き法華寺村にありて、由来東大寺に対す護国尼寺の頭梁なるもの、光明皇后創建の伽藍なり。今伯爵近衛義尊氏の所在に帰し、保存会の設けありて、稍旧觀を保有す。寺伝に拠れば往古創立の後感華年あり、後衰亡敗壞して唯礎石を余すのみとなりしに、慶長の頃淀君の祈願に由て始めて修補の功成了し以て今日に至ると。往て訪ふに其跡を伺ふべし。宿尼本堂に出で、備さに仏軀の名作、太子御幼少の像、紙製横笛尼の肖像、及全寺の貴重となす舍利厨子等に就て一々説明する所あり。尚ほ其博物館にあるものを陳述するをき、得て謝して門外に出で、所謂横笛堂なるものを一見す。こは旧建の觀なし、更に進んで佐紀村に赴く。牛尾列をなして帰り来り、生駒連山の一峯將に日を隠没せんとせしかど、再来の期暇なかる可きを思ひて勇奮自ら持し平城宮址を左にして行くこと少許、先づ仁徳后磐ノ媛御陵をはじめとし、平城天皇揚梅御陵、次に日葉酸媛成務天皇御陵、次に孝謙天皇、最後に神功皇后狭城の御陵を歴問順拝す。周囲多くは田家茅屋に近接し、汚具鼻を撲つの感

ぜらるゝは是れ吾人巡拝するものゝ、為めに敢て言をす為にあらず、吾人が衷心他に對して畏しと信ずる所あればなりけり。この行近ふ人毎に所在地を問ひ方向道程を慥むるを常とす。この時前路漸く闊ふして行人甚稀に、田間僅に歩を進めて秋篠の里に達しぬ。寂寞の名郷更に寂寞を加ふるかの感あり。邑中の大刹秋篠寺亦其聞え高しとなす。乃ち聞索し得て境内に入りたりしが、啻に修繕の際輪奐の外蔽物に包まるゝのみならず、模糊たる初夜殆んど弁別し難くして僅に堂舎の輪劃を天の一方に認め得しのみなりき。是より直路南下すること八町許にして西大寺に達す。闇黒中天猶ほ星宿の微光を放つて一行の為さんと欲する所を助けしかば依て以て觀音金堂愛染殿塔礎等の存在を認むることを得、南都鎮護の一なる残影たるを感想せしめたり。尚寺伝を得んと欲して奥まれる僧坊に闖入し案内を請ひ、其一斑をきくを得て、始めて帰途に就けり。三条通路を踏まんとせしかど得ず。再法華寺村に出で条大路に由て市内に入れり。凡そ諸寺の大なるもの其重宝の一部若くは大半を以て博物館の保護に委したること、是れ予の嘗て平安京に遭遇したる所にして今亦之を南都附近の諸寺に見たり。此の如きは学界の為めに喜ふべき現象にして吾人は全じ現象の普く見られんことを切望するものなり。されど彫刻物什器文書等の運輸移動し易きものを除くの外、實蹟に殿舎樓舎に伝説の詳細なるもの等は往くにあらざれば接し難く叩くにあらざれば洩すものなきこと明白の尤明白なるものなり。一行が諸陵歴拝後夜に入て猶寸影だも見んと力めたるは実にこの所以あるに依る。而して博物館は他一隊が佐保山東南御陵参拝を畢へ路を還へして到り向ふ所なり。館内歴史部工芸部等の区分あり、一行大に力むと雖、如何せん入て後四時の縦覧期限迄半時を余せるのみなりしが故に一々審閲すること能はず乃ち他日を期して還り、再び出で、開化天皇牽川の御陵を拝し、転じて悲田院及元興寺の二旧跡を尋索す。前者は今慈恵院と化して業務をとり其性質に於て稍相似の觀を示し、元興寺の古大利は悉皆廢亡、一の見るべきものを存せず、四至全く町坊の間に沈淪せりといふ。安政年間大塔もまた回祿に遭

遇して現存の仮堂其時を以て建てられ、辛うじて其旧跡たるを来すのみとなれり。此寺の往昔盛大なりしは興福寺の条に其一端を洩せり。当時の状又旧記に見ゆ。若夫れ遡て飛鳥の法興寺を回想する時読史者ならん以上は誰か至大の關係あるを忘却し得べけんや。

翌七日快晴（晴）猶昨日の如し。七時出發、一齊に輕装の身となりしは今日以後遠距離中踏査に奔走せざる可からざればなり。奈良市外に出で、三条を西すること里余、都跡村を経て尚直行すること十余町、菅原伏見の里に於ける現景望見すべく、較大の建物の如きは太抵道路人に就てきくことを得たり。近く進んで拝せしを安康天皇垂仁天皇兩御陵となす。後者匝池の中に田道間守の塚墓あり。誰れかこの処に來つて二千年經過の故に彼が哀情を酌まざらんとするものぞ。是より唐招提寺に向て南下し、棟薨を村閭に望み進で寺門を過ぐ。境内の伽藍稍完し、金堂講堂鼓樓礼堂開山堂、經寶藏、僧坊あり。金堂時に修繕中に屬し、以て内部を窺ふ可く、朝集殿の建築亦こゝに來て見るを得たり。是等の西方に戒壇あり。過海の律宗唐僧を開基となす以上は少なくともこの跡を存せざればある可からず。東門を排して入て步測す。寺の靈像寶物記に見るに仏鉢には木像銅像并に乾漆旃檀紙張漆像等七十余軀、画像図譜の類亦幅數を全じうし、經論式典記錄一切の卷軸以下袈裟落鉢其他の器具置物に至るまで其數竭す可からざるに似たり。時代は天平以前より近世に跨り、和漢の作に係はり、上は御宸筆の類より下は高僧大家名工の刀痕筆蹟等瀕々算ふべし。されど一行は寺毎に是等細微の寶物に接して一々閱覽するの余暇なければ之等に就て何等の質する所なく全く不問に附して去れり。思ふに唐洪伝來のもの多きは開山鑑真の故に因るべく、而も其過多なるには其中幾何の史料を含有し又は寶物閱覽の価値何品に存するかを知るによしなし。旧くは勅額ありたりといふ表門を出でし後また南して西の京闕内に入る。奈良市の周囲と全じく旧都の觀あり。美術家の法隆寺に比して貴重視する、從て遺存のもの

概ね国宝となれりし藥師寺の中にあり。寺伝に所謂ゆる天武天皇御願御鑄造の丈六藥師如來左右の菩薩、而して美術家中少しく説を異にして賞歎するもの等仏軀に關しては一も見る所なし現見の金講堂、東院堂及六階異様の古落を瞥見し、人の知る仏足石に視力を費やして出づ。此地奈良朝時代に於ける右京の六条二坊にして、孝謙天皇本寺を以て御在所とせさせ玉ひしことあり。凡て国史載する所ありて以來、九州に大和諸地方に摂津に近江に、絶へず遷都のことあり、那羅の地京城となりて以來、始めて一定の首都起る。乃ち規模大ならずんばある可からず而して今其地を踏み其遺名遺趾に遭遇するや知らずく之を會得するに難からざるを覚えぬ。是より郡山に向ふ。先人の考証往々旧京羅城門の跡をその地に帰するものあり。一行その地に至らんとせしかど地理上不便なれば止みたり。前來の記事主任長谷生こゝに到て二年小野籌彦生と交代す。時正午に近く町内に入る程中学生の続々歸來するに遭えり。路叢林の邸宅を囲ふが如く環らずに溝池を以てしたるを見しかば之を彼等に問ふに柳沢氏の旧舎なりといふ。若夫れ柳里恭其人の舎とせんか或は然らざるにや。彼等其詳しきを知らず而して當時一行も強て究めんとせずして過ぎ去り、郡山城内高処に登て一睨睥し、程なく某旅店に休憩して糧囊を披きぬ。小串生素より脚氣の患ありしに是に至て前途全行すべからざるの状あり。乃ち奈良に還り靜養の傍殘蹟を多究するに決して群を離る。一行の向ふ処は法隆寺なり。其間二里に近し。予及小野生等三人迂回して小南に出で試みに俗聞伝説を得んとせしかど訪ふ所の杜家何事をも弁ずる能はず。この時一行は三隊に小分せられ或は前或は後にあり、二隊大略に由り、予等一隊は富の小川を渡り小泉町の一端に入る程、再右折して片桐且元の塋域を訪ふ。寺坊あり、之と離れて躰趾（躰カ）あり、所謂塋域といふは其真なるものにあらざるを知て去り、再街道に由りて程なく法隆寺に達す。前隊既にあり、後陣猶おくれて到らず。先づ其蹤の聞え高き夢殿より視はじめぬ。法隆寺は仏法興隆に大關係ある厩戸皇子の草創する処なり。推古天皇即位六年におこり、今を去ること千三百年天平に改造し

元禄年間に一度大修繕ありと云ふ。されど嘗て旧態を改めしことなく推古式建築の最秀美なる模範たること、学説既に一定し徴証具さに備はる所なり。況んや火災稀にして宝物重珍多く保存せられ、或は本邦印本の始めたる陀羅尼といひ、或は太子王子の真形といひは類の堆積他の及ぶ所にあらず。吾人の此行既に旧京幾多の伽藍に接し、天平時代以降隋唐文物の加味せる又は直写の裝飾模様等を閲したりと雖、未だ百済美術の輸入時代に於ける建築絵画彫刻等を見しことある鮮し。今最終に当て是等の一端に接するに至れるのに於て尤宜しきを得たるものと謂ふべく、況んや見聞を積む所宗教方面にのみ偏して最早仏閣経像に倦むあるの当時、この千古完備の大刹に臨むを得たる、稍以て氣力を恢復するに足るなり。法隆寺境内全景は自ら其図あり、堂落殿閣寺院の名数配置の状、及境内の区劃等以て窺ふ可く、太子の御事蹟宮殿の沿革及寺院の盛衰等はまた史籍伝記文書に詳なり。今之を詳言するは却て旅行摘要の当を失ふに近ければ言はず、只一行がこゝに至て踏みし所は太子の御遺跡たる東院の構内を、是より仏堂本門に至る通路と本構内とにあるをいはゞ則ち足れり。而して其実見せし所を略言すれば所謂東院構内中夢殿の南に礼堂あり、是れ勅額門を入れて太子の入定所たる夢殿を拝するもの、拝礼所にして、是より近く進むこと能はずとせしものなり。今はこの事なし。夢殿は八角の堂宇にして其北に舍利殿絵殿仏法堂等前後に棟を接せり。皆太子の御遺跡なり。一行のこゝに入るや、時に技術士某氏あり、職務時限已に畢りたる様なるに拘はらず、一行のため特に役夫に命じて鍵を齎らしめ格子を開き扉障を開きて順次室中の絵画木像其余のものに就て一応の説明を付せられたるは一行の甚感謝する所なりとす。太子絵伝の真画は宮中に奉獻せられ後世摸写品を以てここに藏し了れりと雖其物猶名画たるを失はず。仏師の祖鞍作氏の筆蹟はこの旧院なるが故に始めて存在すとの言を主張し得べし。諸の建物皆雄偉壯渾なる後世の様を離れ優柔の風あり。後れし一隊亦尋でこゝに至り全じく某氏を煩はして一覽を遂げ、やがて遙に西して殿楼造りなる聖異院前に会集す。こゝに臨地の小亭あ

り。遊覽者宝物拝觀の挙に及びしが一行は暇なければ其群に入らず。休憩後仁王門を過ぎて本堂構内に入れり。左方五重塔内に後方講堂内に悉く視力を注ぎ、右方大金堂を廻りて其建築の外様礎材の体質等に特著の点あるを看得して、はて境外に出づ。顧みれば門墻傾き塀墻崩れんとす。将来幾万年の維持保存法果して如何ぞや。時漸く日没に近く、信貴の高峯右に聳えて、うた、一行の急馳を促がすに似たり。行く八町にして龍田の新宮に達す。映眼始めて趣を易へ之に従ふ感想まで一新す。乃また進行力を増しぬ。町の西端に至るに一流あり。こは言はずして人其何川なるを知る所、兩岸の紅葉已に盛時を過ごせしかど全然見る可からざるにあらず、樹梢猶色を誇るの姿あり。之を幸として其実行歩の疲を治せんとにや或は一片雅情のこゝに来て勃然たるにや。一仝唱応の間もなく期せずして西岸の斜堤に赴き芝生を坐として休す。水浅けれど底泥人目を傷はず。架橋中を断じて紅彩上空と下流とに映ずる景尤佳なり。暫し経て出立し本宮に向ふ。道程路行く人の我等が間に答ふるは一里半程なりと云ふにあり。而るに刻已に落暉後となりたれば期せずして亦速力を倍して進むに或は阪路に会し、多くは坦々たる曩昔来の通路をへて勢野に至り、とある家に就て、前程を問へば僅に八町なり、乃ち畢生の勇を出して進む。而も休笑一仝の到り着くや異口全音優に一里ありたりとの言を漏らしたることを。龍田本宮は古来廿一社の一に座して今官幣大社なり。殿舎清華なるが如しと雖黄昏其実彩を弁視する能はず。思ふに仏寺の楼閣大建築を看來つて神社祠宇に移るや誰人も後者が徒に名位の高きに居て其構の小なるを知得するならん。謹んで拝詣し畢り、各一葉の由緒略を得て華表の外に出でたり。この時何等逡巡踟躕に暇を仮さず、たゞに進行するのみなり。悠焉にして広瀬川、忽にして田畝、遂に臚上を道として王子駅に突入し、汽笛將に孔蓋を開かんとするに会して乗車す。乍にて高田を経過し、乍にして畝火駅に着下す。駅は八木町の一端にあり、旅店を距離数丁の処に求め、到り着いて当日の旅行を終へしとき殆八時半。

八日、当日を今回の旅行中日とす。天色殊に快朗なり。例刻前行中の一人馳せて曾我村に到り少く得る所ありて還りぬ。七時少余の頃出発、畝火山に向ふ。二年生額賀大直附近踏査の主任たり。途上睥視を転ずれば二上の奇嶂葛城峻嶺は蜿蜒たる西山の上に拔んで、旭陽の方に直射するあり。顧みれば耕田幾万頃を隔て、望遙に春日生駒の諸山に及び東方には談山の高嶽遠く裾を洩て雄姿を示めすあり、南には則ち畝火山突として平野に起り側に邱地を控ふるを見る。四国山を繞らすの状是に於てか知得すべく、暫くにして曉霧消散し尽せば、耳無香山の二山低く東方の野に立てるを見るなり。所謂三山の周囲は建国太祖の時より天武天皇の御宇に至る史的事実の存する処にして、一行の畝火に向ひこの風土に接したるは、謂ふべし愈進んで愈史を遡るものなりと。已にして飛鳥川を渡りて南進十町許にして先づ綏靖天皇御陵に到り拝し、尋で右方畝火山東北なる太祖天皇の御陵を拝し奉れり。暫くにして畝火の東山麓を経過し東南檀原神宮に詣つ。御陵地并に神宮附近に某々教会なるもの二、三あり。一、二是等に就て問ふに、何れも土器瓦片を陳列し請ふものあれば之を譲与するもの、如し。曰く文久三年二月御陵修理の際に当て周囲に隠池の限を置かんとして採掘せる所なりと。このこと御埋碑文なるものありて之を伝ふ。土器の形質種々にして完全なるものは叡覧に供して後當時之を陵右に埋めたり。かく陳列せらるゝもの、その残余破片ありといふにあり。余儕は其総てが少くとも此附近に発見せられしものなるを希望して止まず。是より神宮の背後に出で間道に着く懿德天皇安寧天皇の両御陵畝傍山の西南にあり。少しく隔て、鳥屋郷に宣化天皇の御陵あり。一行悉く到り拝し尚ほ孝元御陵を遙拝しぬ。御宮地には其余暇なきを以て尋ぬるに及ばず。暫らく道を小山の上に得て行くこと里許ならんとす、山つき川流れ葛城郡の野に出るを得たり。葛城は北、金剛山は南にして、南北相接して一行の前原野の窮まる処に崛起す。晴空なれば雲表に屹立するを見ずして只高く天の一方を限るの観あり。是より御所に至る迄行程殆二里、川西観音寺有馬村等其間にあり。御所に着して始めて休

憩し午食を畢る。御所は、此の地方の小都会にして葛城川その西方を流れ、附近かけて多少の旧跡あり。是等は其概要を休所の人々より聞きとり去り、尋でこゝを發足し、川の西岸に沿ひて進む。この間右方に三室村を望み孝昭天皇博多山御陵を遙拝す。又小流を伝ひのぼり橋梁を渡り左折右曲鎌田を経て森脇村に到れり。こゝに葛城の一言神社あり。葛城山の東麓に位す。往て一拝しこゝより一意金剛山に向ふ。教ふるもの曰く名柄に出で直進して道の易きに從ふ可しと。されど一行の名柄に到るや其地の人右折せしむ。こゝは間道にて人烟漸く稀に、地徐ろに高く道愈細し。一行只山顛を目標としてすゝむのみ。暫くにして山間二、三の在家あり、之を質せば関屋村といふ。こゝを出で、より阪路俄に急難となり毫も其度を弛することなく、其間顧盼遠望するに御所の小都会は二里の外にあれど、山麓に接近し来るが如く、南北一帯の黄田我脚地の高きに從ひて愈延長を増すかの観あり。始め森脇一言社内に於て一行は関屋道の最捷險路なるを耳にし尋で関屋に至りて人の只左せよと数ゆるに会せり。一行幸にして踏む所を誤らざりしかど其急峻なるは実に前人の踵後人の頭と接触すといふを誣なりとせず。加ふるに漸く登るに従ひて白沙路を埋めて攀躋極めて不便に、双脚猶痿せずと雖氣息已に窮迫するは真に壁立する斗なる斜面を知れりと云ふべし。而もこの時に於ける吾人の胸中には絶えず快味の往来するものあるなり、容易に絶巔を望み能はざるの時にも此の如く葛城の峯嶺暗に前途の近きを示すと見し時も全じ。かゝるは何が故ぞ、眺望愈広濶なるが故か、或は嶮山を攀ぢ他日人に誇言せん意あるに出づるか。予は一行の意皆是等のものに存せずして必ずや心に次の如き思念なるべきを信ずるなり。即夫の忠魂を我時代に癒せんが為に即其遺墟を数百年後に防尋して吊らはんが為に、今日あるは是れ多年の希望とせし所にして今日其希望はたすの快は是より大なるものあらざるなりと。蓋この道や笠置若くは吉野に迂曲潜隠して来往せしものならずんばあらざるべし。而して赤坂吉野の間道をして旧聞ある水越峠に至ては、一行之を踏むを得ずして、只右方に於て其一端を望見し

たるのみ。急難の阪路より山上の峠に移りて行くこと暫しなり。河内南和の野時に臨み見るべく、林間再阪路を得て、そを登り了れば則ち最終の山巔に達す。松杉茂生し、先づ御獵野の跡に接す。雄略天皇の御勇想見し奉る可し。右邱上に葛城神社祠の崩壊せるまゝなるものあり。尋で路頭の一奇石を見、少しく下つて数歩の平地に至り、一廢院一茅舎あるに遭遇せり。茅舎中人影あり、之を訪へば則ち曰く葛城神社々掌葛城真澄と。氏容貌魁偉一見常人をして敬意を起さしむる風を有し、又談論になる。知らず氏の名若干人の上に重きを荷ひ如何の事情に依て空しく四時を孤庵中に送るを。是等のことは如何にともあれ、一行は既に路傍に見來りし所のもの、其起原沿革並に今日に至る迄の關係事変延いては葛城金剛の名号等に就て地方存在の伝説事証を氏に叩き、又将に到らんとする千早城の所在、旧城^{（墨カ）}の区域等を予じめ氏よりきくことを得たり。就中金剛法寺衆中元弘の当时に両派を生したること、正成とこの寺衆との關係始來に就て其一派の末裔なる氏の説明をきくを得しは一行の利する所少からず。いたく感謝する所なり。なほ前途の通路をき、得て辞し去り、叢棘を分け下り眺望稍濶きを加ふるに至る處、則ち斷崖絶壁左右より薄り脅かし、横に二、三步を移せば其人や乍ち幾十丈下の壑底に横はる外なし。蓋金剛の両面は其趣に於て大に異なるものあり。一行の攀ぢ上れる方面は何処として樹林の鬱蒼たる觀あらしむるものあるなく、又前後左右に於て連峯重疊の姿勢を有せざるなり。西側面は然らずして是等を具有し山々峯々矗立屹居するもの数をらず又幾多の溪壑其間を隔離するを見るべし。二上葛城を経て金剛に及べる山脈は金剛を経過するや否や西方に向て屈曲し、久しからずして大和河内の分界線一変して河泉と紀伊との境界をば為すものたり。余はこの点を曲線体の内例外例に譬へ河内方面をば内例大和方面を外例となすの適切なを思為し、以て金剛附近は屈曲に依て内例面にこの皺状を呈せるものと言はんと欲す。急難なることは通路に於て両側大に差異あるを示さゞれど峻峻の感を与えるは殊に西面を著しとす。一行崖上の道を伝ひ居る間斜陽紅暉を放ちて程なく

河泉国界の一峯頭に落ちたり。この時に當て群峯簇立の中央、一行の直前に屹然たる小峯の見ゆるあり。即千早峯にして金剛山上より降下の道程半里余なるに立てり。こゝに達する少しく前に路傍輪塔を見るは是れ正儀の墓と云ふものにして塔礎に建立の年号を刻せり。一行僅にして之^{（そ）}の探知す。千早山巔は八町を登りて達すべく、こゝに一祠宇あり。幾階の石壇其正面に直立す。是等は現時の世楠氏在天の靈を招鎮して建造こゝに及べるものに過ぎず、傍はら往事の遺物として見るべきもの一も存せずとはいへ、山其もの、姿容形勢は実に数百年前余君家危急の時に當て数万の賊贍を摧破しける無二の堅^{（墨カ）}、遂に回天の時運を喚起せし蕞爾たる孤堡の名城たりしを示すに優なり。祠宇を安置せる山巔の平面は僅に二、三間四方に過ぎず、急直なる石壇を下りて始めて稍底き平處を有す。名城本營の跡即この處にして、今半ば樹林に蔽はれ半ばひらかれ、将来何物か建造せらる、模様を呈せり。二、三の城門趾等に至ては是より下陰阪の中途にあるなり。概するに後方金剛を扣へ他三面は所在壁立の状を示して急峻峻岨を極めずと云ふことなし。只傍側一二峯巒の較近なる位置に立つものあり。吾人をして一見敵の占有を恐れしむべしと雖、蓋之あるは我形勢業已に非に陥り孤城守なきに至て始めて克く見得べき所、加之是等峯巒の險絶なる人群をのすること甚怪しむべく且つ矢石の彈道遂に能く彼此の距離を満たすなきを看取し得んか。異時南風遂に競はざりしを見て千劍破の險と智將の明とを損はんとせば抑は大なる過誤なり。一行已に千早の險なるを見たり。全時に絶倫の忠臣が満腔の誠意と全身の智略とを以て事に従ひ、其族人が出づる所を全じうして一斉に尊長の指揮に順なるの状を想起し、而して回想転進爾後の時に及べば秋晩の晩感亦まさに勢を加へ來て慨露襟の境に到らんとするもの数次、乃ち左顧乃ち右盼、しばし平處を徘徊して後辛うじて意を決して進下するや、急阪廿余町、一行を駆逐して勞せず民家の間に着かしめたり。此地を千早村となす。村屋山腹に拠り急溪の兩岸に立ちて、一条の通路又川を縫ひ徐ろに斜なり。之を登れば左千早越を過ぎて五条に達すべく、一行の

前途はこの方面にあり。右に下れば河内の野に出づ。而して道程猶二里を下るなりと云ふ。金剛の高峻亦知るべきなり。千早村に着くや月あり猶薄し、最早行く可からず、乃ち客舎に投ぜるに激奔せる水声夜を徹して快哉を呼ば、れたり。長谷生の日の後半に主事たり。

九日、例刻より時をはやめて出発し、五条に向ひて登り行きぬ。昨の勇氣屈せざるの時に当路は溪間低処を通じ、急狭ならず。双脚軽きを覚えて側ら夫の隊なるものを見行く胸襟更に是なり。凡そ里半を進んで絶巔に達す。野草未だ旭陽に接せずして曉霜微白を呈し、天晴れ空濶くして紀和の連峯漸く眼界に入れり。この望將に急阪にかゝらんとする時最佳境に入り、烟霧低谷にたゞよひて吉野河川先づ一行を前へ紹くに会せり。この処即河内・大和の分界にして爾後亦樹林を見ざるは前に概言せるが如し。これより飛下里余なるに一村あり。尚徐ろに下ること里許にして五条に着せり。五条は吉野御所高野和歌山若くは十津川等の各地に通ずる街衢にして繁盛の状南和の最大市場たるに恥ぢず。一行には只かゝるを見て横に通過し、直に吉野川を渡り休憩少事にして賀名生に向へり。或は丹生河の辺或は村落田畑の間、路程凡一里半を行くや則ち和田村に入る。賀名生の地即是なり。一行初より邑の豪堀氏の名をきく。こは氏が幼時に於て吾學館の教授中沼氏の薫陶を受けしことあり。一行が中沼氏の書を齎して着後便宜を乞はんとする所氏に外ならざればなり。而も一行は五条以南に於て和田穴生を口にして里程を問へること他の時他の目的地を質すと一般に瀕々たりしがこの時に限りて人一人として渋滞し又は答へ能はざりしものなきのみならず。彼より一行を解して堀氏に至るべしとなすに会すること亦屢々なりき。嗚呼是れ何が故ぞ。堀氏其人の器其家の旧族たるにもよるべしと雖総ての原由は堀氏の邸即是南朝正位の座となりしものなるに存せずんばあらず。吉野高野金剛十津川の中央樞衝たる位置、四囲山岳を繞らして險要無二の地なりとは是れ當時に於て南朝諸臣がこの地に下せる地理

的觀察にして、かくて定まれる賀名生の行宮は即一行の今到り訪ひ地方人の知らざるなき堀氏の邸其ものなりしなり。行宮趾に至る処路は只一条あるのみにして山に抛り川に臨み俯仰險要の地なるを見るべく、道屈曲して下れば趾即其処にあり。門額の文字先づ向ふものをして衣襟を正しうせしむ。入て主人を訪ひしに、堀氏は職を以て吉野に出で近親青木氏守り住するに会す、乃ち青木氏の旁に依て三代の行在趾たる邸内を一覧するを得たり。はじめ青木氏も亦不在なり。一行之を待つ間午食を畢ふ。尋で本宅内に庫内に遺跡遺物のすべてを閲覧し、氏の説明をきけり。所謂御座所は本宅内にありて現見する所は当時の様なりと云ふ。庭上に南天樹あり、こは新株に属すれど其古きもの断幹となりて伝存せらる。遺宝には旌旗二品刀劍横笛天目等の後醍醐天皇御物と称し御賜と云はるゝものあり、正成に關する文書一通、正行の由緒を有する古鐘と云ふものも見ゆ。此他に珍品たる駅鈴あり。堀氏家伝は採て参考に供すべく尚ほ所縁うすき鎗類矢尻の類、戦国時代の文書一、降ては十津川変前後の事を窺ふべき品種等あり、是等遺宝中所謂南朝君臣に係はるものゝごときは詮議討覈を要するもの多少なしと言ふ可からず。されどこの三代旧跡を訪ひ地を踏み物を視て眼目新に知見開けし其利益や少々にあらず。邸の眺望亦甚佳なり。流に臨み山に対し、浮橋横はり寺鐘聞くべし。曩来は景の勝を以て称せられ文人墨客の詩歌筆蹟等家に存するもの亦頗多し。かゝる間時二時余に達し、尋ぬべき旧蹟附近に多けれど一々歩をめぐらす能はず。乃ちこの地の探究をこゝに止め、篤く謝して吉野に向ひぬ。邸側より直に左折、橋を渡りて進む、こは白銀峠を経て下市に出づる間道にして、路常に嶺上を伝ひ、賀名生を出づると全時に阪路にかゝれば爾後亦甚しき高低あるに接せず。迂曲迤邐徐ろは上下するのみ。白銀峯付近稍板んづ。一行一里半を進みて後こゝに達せり。この地古戦場にして堀氏の祖戦功をたてし所、今變じて鉞物採掘場たり。地方民は大抵周囲の山畑を耕作するを常業となすが如く、其住宅は或は山麓或は山腹時には山巔にあり。左右望む所は一方には金剛の凌霄聳立するを見、一

方には脚下低く沈淪して遠く漸く高く、一面の山波遂に天涯に蹶起せるの状あり。山上が嶽はじめ勢和の界国に立つ高峯皆望むべし。一行中脚力強健なる者あり、歩速遅緩なる者あり、風光の美を嗜むものあり、殊にこの間傍路出入して多索任意ならしめしかば、前むものあり後るものあり、而して前行者は矢筈を岐路に画きて走り、後れたるは梢上の紙片を目標として追ひ及ぶなり。かくして白銀以來里半の〇程を進み下市町に出づ。この時や落日後程を経て月色の路を照すに足るものあり。休憩を養へば勇更に加はり、軍歌の音師尋で一行を促し進めて直線路を東向せしむ。この路吉野河辺にあれば平滑坦々たり。不知識らず中一、二の村落を過ぎ二里距の六田宿に入りて、再山路につき樹影を踏むこと半時なるや吉野町に達せり。昨最険の山を超へ此日尤も長途を走りぬ。小野生、賀名生吉野の記事主任に当れり。

十日、天猶快晴なり。曉爽蓐を出で、客舎楼後の望を試みれど風物寂寥と云ふの外なく、一として心をとめしむるものなし。唯鎌倉以後の悲劇が何によることなく我胸間に再現し来るを見るのみ。朝食例の如くに畢り、案内を伴ひて出で、金峰山寺の本堂たる蔵王堂に到る。例の二力士猛然として大門の左右に立てるをきくに湛慶雲慶の作なりとぞいふ。この処南山の中心にして寺の創立は天平にありと雖現見の堂は康正の建造、天正の修繕を経たるものなり。固より是れ南北争乱の世の致す所ならずばあらず。事皆記録に出づ。堂内に入れば俗眼の集注する珍材異柱あり。堂の前庭に所謂四本桜を見るべし、蓋第何世なるものに属す。而して村上義光が大塔宮に代り奉りて奮闘戦死せりと云ふもの其子義隆が二度父と別離の涙を落せりと云ふものは是等の跡即この処とす。呐喊劔戟の声満山を震動し血痕伏屍所在散見しけん悲酸なる光景今亦見るが如き感あり。去て吉水神社に詣る。是れ吉水院として後醍醐天皇南巡の当初に御座あらせられし所、遡りては源予州降りては武将太閤に關はる遺跡を有し嘖々きこえ高きものなり。一行

通常人として到り拝覽を請ふに一小童案内指説し巡次各室に及べり。各室遺物を陳列し室其もの亦直に遺跡たり。此行や初より各時代の各事項に互りて各地に觀察せりと雖、地に依り処に従て自ら史上の出来事を分担し、之に對する吾人の注目点亦從て漸移を來せり。かくて金剛以後には主として元弘建武の至は正平時代に於ける各事項を其他存載の遺跡遺物の上に徴見し而して時代此にあるが為に見し所のものは多く一種感慨の念を傍起せしめたるものなり。就中皇居其者の、残影を見しは賀名生にありて後この処あり、かゝるとき胸間を來往する感懷は外ならず、之をして重雲深処と仮定せざるを得ざるかといふ是なり。宝物とせる所は全じく行宮趾なる廃寺実城院の所藏を併せれば頗る多し。南朝御三代殊に後醍醐天皇の色紙繪旨宸翰類并に御物として樂器文具什物書籍類多く、徵九古文書の収録せる吉水院坊領紛失証文は頼朝の消息義経所用の馬具甲冑類、外に後代の御宸翰等其重なるものにして、秀吉來遊の紀念は永徳の壁画其他の粧飾に見え且つ慥に修繕の上に現はる。乃ち歴史事實の稍精細なるものを窺ひ得てこゝを辭し、是より細逕に由り山腹を迂曲して人の知る如意輪寺に赴きぬ。寺門の面する低谷より寺門附近に至る迄一面に桜樹を見るべし。元と寂寞としてこの種の樹木が春時を賑はしからしめしことなりしを近時に至てこの植込ありたるなりとぞ、蓋皆延元御陵の近境なるに出でしなり。當時に近き頃ひ一度この類の挙ありしことは旧記載する所にして、今の時亦暖雪飛落するの候を期して大に慰め奉らんとする、其人の此主旨や吾人亦大に之を喜ぶ。所謂如意輪堂は寺門を入て直に向ふ処にあり。外様一見旧觀を呈すれども正平時代のものは之にあらず。之を聞くに旧位置は本寺の背後にして今空地となれりと云ふ。一行已に此境を踏めり。乃ち名画勅筆はた又小楠公の遺蹟として何人も知らざるはなき堂扉の如き、みな見んと欲するに切なりしかど、堂内に見得べからざるは明なれば、少時にして堂辺を去り寺防に向ふ。右方高邱に抱て御陵墓あり。この時一行の眼を遮りしかば先づ階段を昇り往て拝し奉れり。一は即塔尾御陵、一は世恭親王墓にして、再下れば小楠

公髻塚といふを右に覽るべし。塚碑は森田益の撰文具さに建碑の由来を述ぶ。傍に鉄石招魂碑あり。あはれ十津川の変は繼ぐ者今日の昭代なれば猶忍ぶべし、延元正平の今に在ては是遂に潜涙なからしむる能はざるものにして、余や只此時は於て其地を實見じたりといふの外今亦多くを言ふを欲せず。且つや一行皆此時に於て多くを言はざりしなり。蕭然歩を移して僧坊に至り、依て境内のことを質し又宝物一覽を請ひぬ。庫内在る所に夫の堂扉をはじめ御物御宸筆高僧名匠の画像仏軀あり其他古硯刀雜器等累々として陳列せられぬ。或は前に吉水院に見つるものと全じ由緒を有して形を異にする者あり。一行はこゝに特有なるもの数者を熟視し、やがてこゝを辞して門外に出でたり。行く／＼眸を山岳と低谷とに放ち、尋で山口神社の前に出で、静女飄舞の旧跡地たるをき、全時に一片懷古の情を輸致す。是より旅亭に復帰し徐ろにこの地出発の途に向ひぬ。蓋南山の旧跡を挙げて尋ねんとするには十数里を往還し少くとも二、三日をこの間に費さる可からず。此の如くにして実見を充全にし探究を深遠ならしむること始めて希ふべく、今一行の三、四時を費やせしもの、如きは只僅に尤著名なる又最も町々に接近せる区域のみに過ぎず。是れ必しも修学旅行として不足となすべきにはあらねども、昨霄通過せし部分の如きは通過の名ありて其実何等の伴なうものなかりしなり。今朝一行皆之を遺憾に思ひ且つ吉野宮に拝せんとの意ありしかば出発後復た昨夜の道を返しき。この間黒門大橋等の由緒ある建造、及七曲長峯寺の名区を見ることを得、又義光の墓と称する五輪の塔を路傍に看出しぬ。吉野宮に入ては社前の拝を卒へてより堀氏を訪ひ、談御宝物に及ぶに近來南朝歴代の遺物を蒐集し業已に千余点の多きに達せりとのことなり。されど掌鑑某氏病廢にありて來らず又一行の時日に吝なるとに依て御宝拝覽のことは遂に行はれずなり。氏の寓宅に招せられて座をかり食を畢へ、休憩中地方の伝を質し又書齋中に見ゆる古書類及額面をなせる曾我兄弟の遺書状になる者を閲し、其他氏の輯録せる学山記事稿を見るに及べり。氏快活洒灑にして其身腹痛を煩はれ妻氏また病臥せられたるに拘

はらず万般に閱して煩勞を敢てせられしは一行の永く忘れざる所にしてこゝに感謝の意を表するものなり。是より新道を下り飯貝に出で、上市に渡りて之を過ぐるや蕩々たる溪流の兩岸に所謂妹背山あるを知り、爾來一意に談武峯に向へり。行路始めは平にして暫し以後阪路にかゝり、後急阪をなせり。傍に小溪あり、或地に於て瀑布を成し峯嶽と共に好觀を呈せり。やがて龍泉寺村に達す。登ること猶半里ならんとすれば即ち阪の絶巔に着しぬ。是より左折して進み絶へず峠をつたふに夕陽遠く没せんとする西山、松杉の近く繁生する脚下の斜面、交々望み見るべし。嘗て一行の踏みしは今我眺望の向ふ処にして先に望みし処は今一行のしたしく踏み近く見る処となれり。僅々数十時以前のこと乍年余を経たるが如き感あるも亦妙なり。路の左側に當て距離二、三町程に一陵墓あるを見る。是は良助法親王冬野墓なり。談山の夕辺は紅葉方に錦を織るの秋に当りしかば、脚步俄に重を加えしが如き感ありしに、況んや仰ぎ見るべき石壇の数々、高く傍樹を抽んづる重塔、尋で眼中に入り来るべき殿舎廻廊の華美壯麗なるには、神社中稀に見らるゝものとして恐らくは皆歎感の言を繰返せしなるべし。社務所に就て聞かんと欲せし要目数項を尋ねしに禰宜某氏具さに語られ、且つ最早殆人顔を弁ずべからざる時、門限後二、三時を経しにも拘はらず、門扉を開らかしめて一行の内庭に入るを許し、以て古の元勳鎌足公の美を拝するを得せしめられたり。一行深く之を謝す。恨むらくはこの地に一泊し、以て高塔の天王式なるをはじめ、古刀文卷以下多くの宝物に接して多くの利を収むるの余暇なかりしを。かくてこゝを發するや、月色昨夜より明に、路漸下して行き易きに會し、爾後道程三里の間、下居河西等の郷邑を経て桜井町に達し旅亭に投じぬ。この地に至る迄河村生踏査は主任たり。

十一日、今朝始めて雨模様なり。馬車を命じ期刻桜井町を發して長谷寺に馳せ向へり。担任記者額賀生なり。車上傍見し宿々には黒崎あり出雲あり、大抵上古

の史跡を存載せる地にして古今共に磯城の区内なり。馬車馳せ行くこと一里半許なる時初瀬町の一端門趾ある処に至り、やがて町の中央にて下車し、直に名利観音に向ひぬ。泊瀬の名や都邑として古に高く、長谷寺あるに至ては文士巨紳が時々閑遊を試み又巡拝者の永く見遁し能はざる所となれり。蓋此地自然の種たると。崇拜の客体が独専の位置を占めて人心を繫泊せしむること多きによるか。往て見るに仁王門、長廊下、本堂、開山堂、僧坊をはじめとして、無数の建物境内の東西上下に薨を重ね棟を接して立ち、礼堂前の舞台より、又石壇の隅々庭園の隅々よりして長へに初瀬町の全景を瞰下し、曉雪暮雨、時に従ひて対峙せる高邱に峯の勝を覽るべし、所謂八景の勝亦この処に呼ばる。就中花には桜あり梅ありて近世又牡丹の名高く、而して梅を称するに即貫之の古里詠是なりとの評を以てす。彼れ今囑壇の屈折して空を作す処に立てり偶爾此の如きものを見て屢史書歌專中に接せる初瀬の地の如何なるやを知ることを得たり。寺の本尊たる仏鉢及礼堂内の古絵馬は技術家も捨てざる所にして又世人の知る所なり、長谷寺縁起に至ては筆蹟の点に於ても人の渌々する所、此類のことに於て僅の外知るを得ざりしは僧坊に就て問ふの余暇なく事止を得ざるに出づ。この時馬車発途の期刻迫まりしなり。乃ち蒼皇寺を下り、再乗車して暫く道を返へし、やがて別路をとりて三輪の地に向へり。三輪は大社大物主神の鎮所ある処、山直に其処なり。太古史を考究するもの又は考古家の見遁し能はざる地なること言ふを俟たず。乃ち先づ社内に入りて拝し、社務所に就て質せする所あり。但余暇少ければ其物其処に就て目を注ぐに至らず。この境にへ種静宋の地にして御山の風光に老杉の古雅なるなど太古以来の靈跡なるを語れり。こゝを去て後三輪停車場に到り、暫時にして烟揚がるを見れば久しからずして柳本に達せり。一行車中に在て御陵と覺しきものを望むこと屢々なり。柳本の地には崇神天皇山辺道勾岡上御陵あり、駅を去ること十町を出でず、又景行天皇山辺道上御陵あり、両者相去る亦遠しとすべからず。一行柳本に下車するや乃ち共に往て拝し、岐路々傍に於て前方後円繞らすに溝池を

以てせるもの、或は之なくして陵墓に近きもの二、三を見たり。蓋何人も見て以て然りと為すべきを信ず。およそ桜井以来一行の通路に当て奈良朝以前に於ける歴皇の宮址を見得べきもの其数多し。雄略天皇の朝倉宮址は黒崎に、武烈天皇列城宮は其隣邑出雲に、欽明天皇金刺宮及崇神天皇瑞籬宮址は金屋にありて、敏達天皇詔語田宮・景行天皇日代宮・垂仁天皇珠城宮址は三者共に纏向村にあり。されど車上疾駆し去りたれば其一をだも見るに至らずして過ぎぬ。已にして柳本を出で、北進直行十町許を経て大和神社々前に達す。是は倭の大国魂たる神威を敬祭せる所にして固より大社の列なり。されど入て拝せば社頭寂寞として人声拍手の音の他より出づるをきかず。而もまた境内幽邃を極め人をして自ら肅敬の念を起さしむる類にもあらず。外より望めば只曠野中の一小森林たるに過ぎざるが如し。夫の大伽藍の荒廢せるときよりも、吾人こゝに來り此の如きものを見て数層深き悽愴の思を生ずるに至れり。時恰降雨加はるを見愈旅行上の大難日來るを知りて、早卒こゝを去りて一意石上神宮に向ふ、是は大和神社より北々東の方向に当り殆一里半を隔つ。一行雨を冒して遂に至り予期をはたせり。靈劍の鎮まる処自ら他に異なる趣を有し殿社の構造必しも華麗となすべからず何処として燦然たる金彩を放つを見るはなしと雖この間嚴然たる趣を存して犯すべからざるの風を具へ、殊に境内の風致蒼然古色を帶ぶるに接せり。由來本邦尚武の風この社と大關係あり。此の如き觀あるもの偶然にあらずして又古來古色を以て称せられし所以今猶失はれざるを見るべし。是より丹波市町に出で同地の停車場に向ふ、この時後る、ものありし為め一行中半数発車の期に合して先づ奈良に帰着し、半数は午後の汽車を俟て其後を追ひたり。この最後の区域は四年生齋藤伝左衛門の担任して記すべき所、而してこの日の旅行これを以て終となせり。一は大敵たる雨の嘗て止まざるが故になり、一行総てが奈良の容舎に歸集せる時刻凡四時なりしが、顧みれば五日の間、西の京より始めて石上に至るまで、換言せば奈良を出で、奈良に入る間、地を踏むこと旧來の名を以てして添上下、平群、広瀬、葛上下、宇

智、吉野、十市、式上下、山辺等の十二郡并に河内の錦部郡に及び、道程を数ふれば通大路のみを以てするも数十里を下らざるべし。況んや傍徑に出入し迂回自から求めて以て見聞を多くし願はくは漏洩少なきを期せし以上頗長里程を一週せしこと、なるべし。之あるに就ては行歩注目並に精勤を以て当らざりしはなく、殊に記事に任ずるもの、如きは東奔西走一处に多くの歩を費やし毫も心身の休息を得ることなきなり。是れ一行自が一種の修業となす所、従て行脚悉く疲憊し氣力全く衰亡し去てまた尋求の意なきが如きは、金剛賀名生に於て亦今奈良に入るの時に於て、嘗て一行の知らざる所なり。されど到る所の地に新に入で尋求すべきものと、一度眼目を注し去つて一斑を知悉せるとは大に場合を異にす。之に従て吾人の脳裡に変状ある亦免れざる所なり。前場合に於ては既往を返繰して或は考察を加へ若しくは興味を感じるの余地なく、後者にあつては然らず、稍任意に是等を仕遂ぐることを得べし高岳や、嶮阪や、社殿や仏閣や、水溪なり野原なり、はた又荒村なり廃舎なり、地理沿革伝説器物凡そ奈良帰着以前に見知せし所のものが始めて能く再映せられ、困難の或時が漸く快楽を帯びて追憶され始めしは実に此日奈良に帰りし時なり。即一度見し奈良に帰らんとせし間にあり、況や△良の地已に故郷たるかの如き感あらしむ。この時見る奈良や真に寧楽の境たり。一種言ふ可からざるの快即この中に発生す。且つ帰着するや、早く列に離れたる小串生別に病勢の加はるなくして多少市内に於て見聞を積めるに会せり。是に於て一行完きを得快又加はる。右小串生の研究をつみしは若宮祭典儀の沿革を主とし、之に關して市中故実家又は藏書家のきこえある者を訪問せし間、博物館員辻氏より日を期し一行の爲め館内案内者たるべき好意の上口供を得たり。乃ち翌日午前中を以て博物館入覧の期に充てぬ。

十二日、修学旅行最終の日なり。九時開館に先つて博物館に行き、辻氏の同伴を得てやがて内に入れり。この種陳列場の長所は徒に物の多数なるにあらずし

て、或数が限ある場所内に秩序よく整列され、観る者をして一目の下は其物如何を知り得べからしめ、又彼此を対照比較して物の新古異同、作の種別巧拙をも窺ひ易からしめ得るに存す。されば館十部類の設けあり。本尊脇立以下の仏像、附属物鐘鼓經櫃の類、文書衣服文具百般の裝飾品又は甲冑刀劔以下の武具馬具雜什等在館せるもの、総ては、概ね類に従ひて室若くは場所を分たれ、所用者の名又は時代若しくは作者の名等を簡単に附記して多少觀者の便を計られあるが如し。故に一行は前回にも此時にも是等珍宝古の群中に入りて稍學問的觀察を為すを得ざりしにあらず。されど此時辻氏の同行に依て勞せずして其多くを為し、且つ仏林中時代の疑はしき者に就て氏の私見をきくを得たるは一行の觀察を助けし利益尠少にあらず。彼此諸点に就て感謝の意を氏に表するもの此の如し。之に拘はらず最一行の瞳底に映されし各種の一を取て挙げれば、巧妙の感を□さしめたるものには狛獅子の一種、建築の苦心巧妙を思はしめたるものには極樂院に伝存せる元興寺重塔の原梨、内部の仕組を知らしめ興味を与へたるものには仏牀敗余の露骨あり。大塔宮潜隱の經櫃は吾人の希望を満足せしめ、如意輪堂扉の模造品は模造の妙を思はしめ、時代を銘刻して疑あらしめざる天平の古鐘、義家鎧着用次第をうつせる義家の甲冑の附属図等は、或は精確の思ひ或は館の注意の程に思ひ至らしめたり。仏体中には四天王像をはじめ美術上の名作多く今其一々を述ぶる能はざるなり。かくて通覽を畢へたるとき十時ならんとするに至りしかば、辻氏に謝し別れ、尋で館を出づ。記念なかるべからざれば帰路猿沢池畔の写真師をして旅装のまゝを撮影せしめ、こゝに奈良に於ける一行の事全く了れり。乃ち直に旅宿を發し、三条駅に至て車中に入りしに市の光景宛がら別離を悲むが如し。尋で笠置に達す。依て車外に出で午食を喫して笠置山に向ひぬ。是れ予期して余す所の唯一なるもの、必行かんことを希ふに出づ。この地に主任たるは、斎藤生なり。山は木津川の左岸に屹立し、山麓笠置町より登ること八町にして絶巔に達す。絶巔を行在跡となす。今標柱立ちて人の蹂躪を禁ずるもの、如く某人私に神社造営

の企を為すといへり。曰弥勒石薬師石大鼓石、曰笠置石貝吹石動岩等大小許多の奇巖、絶頂の周囲地磬を構成を、上下の回路は常に是等岩石の横側に出で又は其上を通ずるものとす。蓋業に已に名山となすに足れり。山の一寺を鹿鷲山笠置寺といふ。天武天皇の御世の創立に係はり中世に至て名僧解脱こ、住しぬ。是は旧記載籍の吾人に教ゆる所ながら、今来て岩面の仏画岩上の柱跡を一見するや、他を要たずして優に往時盛なりし状況を知られ得る思ひ、又能く此の如き労を募り得し宗教の勢力を想はざるを得ざるなり。面して伽藍の全廃寺運の衰亡を今日に見るに至ては、即元弘の出来事其端を開くといふに思ひ及ばざるを得ず。この出来事に関して行在跡の外一行の見し所は、一の木戸二の木戸等の跡、賊の攀登せし谿等にして、何れも山腹にあり。貝吹石亦当時よりの名なりときけり。落城の際に於ける賊軍動作の状域中苦難の様共に微知し得べく、又賊軍を導きし一村を望みたり。このとき一行また案内者の便を求め伴なひ行けりしに、彼れ能く語るに慣れて細大余す所なし。就中該飛鳥の老嫗に及ぶや、一声高く一声低く、口を極めて数百年前の一婦人を罵倒し、全村の今日に追応報の殲ぶるなきを挙げ。一行具さに聞き畢て後肅然として語なし。知らず鷲峰山への通路を彼より聞き踏む所の陰否を即座に云々せしもの幾何の人ありしを、当時雨歇みて多少の晴間を空の一方に望みたりしかど、余愁多くは掃はれじして時々神を霑さんとするけはひなり。暫時多聞堂辺を徘徊して遂に山を下りぬ。語る者笠置の形三笠を積むに似たる注意す。蓋笠置の名義が鹿鷲の古車に因めるか、笠置の伝説に依るか、はた又山の形姿に出でたるかは俄に断ずる能はざる所なれど、笠置駅よりして笠置山を望む風景の佳なるは明に言ひ得べし。吾人の旅行は是に於て最後を告げたり。凡そ二時この地に上車し、六時間有余を経て山田に着下し、月夜旧山川の仰臨中無事帰館をとげたり。

別隊専科生の一行が四日前無事帰館したるは亦予期の如きなり。この一所は亀山に下車してより、先づ日本武尊能褒野の陵向に進むこと一里ならんとする頃其

地に達し、一全肅揖敬拝し卒りて、如何に尊御勇武に勝れ給ひしか、如何に邦家室威のため難險を踏み危難の数に遭遇し給るかを追憶し奉り、御勲業高き御身を以て遂に此地に薨去し給ひし所以を想及するに至て奉悼の念しばし禁ずる能はざるものあり。日の暮るゝに及んで僅に御前を退きぬ。此地鈴鹿郡川崎村字田村といふ処にして、御墓の右方に少し隔たりて社殿の建てられあるを見るべし。全夜亀山に帰宿す。翌六日亀山を発し白子に向ひ進む。白子は伊勢湾頭の名浦なり。而して亀山より白子に至るは三百年前徳川家康の遁路を求めしことを追憶せしむるもの、乃山川の地理を察し、白子に到り着いてよりは道を右に一転し参宮遣に由りて安濃津に向へり。途上には昔時参宮者の凸騎凹騎如何なりしかを思ひて都色の盛衰に着目し、津に到りては藤堂氏の城跡を一覧し、又近く結城神社の境域に到りて宗広公の精忠勇敵なるを追想し、遠く公の時に於て公の竭されし労働の多なるを奉謝し、全時に其志遂に満たずして空しく此境の土と化せられし境遇の非を追吊しまつりぬ。この地今公の公認墳墓地たり。されど学者間には之を是なりとする説と寧ろ山田停車場の傍にある君山道忠墓碑を採るものとあり。二者全体に於て其重を全じうしおるが故に、之に関しては今人々各自の意見あるを要すること、なれり。この時に際して、出でて其遠きものを一見しおかんは、是れ初学たると否とに關せず必要にして且つ利の少からざる所なり、乃ち一行は四辺の境土を察し、聊同地方人の所信伝説をき、得て還れり。この夜津に一泊す。翌日贅崎より発し、海路香良洲に向へり。舟中の望能く言辞の及ぶ所にあらず。到り着くや則ち社頭につきて拝し暫らくは信者群集の状況一般など観測して、やがて一転して岩内に向ひぬ。岩内は松阪町を去ること西北二里余の地にあり。この地の名利観音には近郡の士女時を以て来り礼拝するもの多く其境内なる庭池の勝景は四時遊客をこの僻地に導き、小景ながら真に好愛するに足る価値を有するものなり。一行こゝに着するや即此勝景に対して暫らく心を放眼目を偷ましめ、後こゝを去て松坂町に向へり。この夜同所の某客舎に宿泊し、明くれば最終日たる

八日の朝旦にこゝを出発して帰館の樂しかる路を進行し、時に採勝尋跡を試み、或処には往昔神宮御儀の慎嚴なるなど回想し、山田より宇治に着せし時即午後三時過に及べり。勤勉力行の点に於て此一行毫も他に劣るものあるを知らず。終始快晴の下にありし幸福は日数の少きと相補充すと云ふべし。

抑今回の旅行は單一の問題或部面に就ての考究財料を得んとせしにはあらず、一般既得の史的智識を確實ならしめ又は拡充せんがため、其地并に其地に存見する所の者を看取し、又偶然の所得に依ては精細なる眼を史上に顰注し、又将来の檢覈討究をして深遠ならしむるに至るを期せしもの、換言すれば作用の交互的なるを全時に所期し、意をおく所極めて多種多面に旅行法として頗經濟的なる又尤勤勉を要するものに属す。果して所期を達し得しや否やは一旦にして見る能はざる所なりと雖、兎に角較大の利を受納し、又永く享受すべきは断じて疑ふ可からず。かゝるは別に出づべき^{（苦）}苦くは各員の手に存する徵証具在の詳細なる記載に能く知らるゝ所、予は今七日経過し概略を記せるのみなり。記する所前後疎密の度を異にし、誤謬脱漏多く其中に潜在すべしと雖、本誌印刷の時逼りて再補訂正の暇を仮すに吝なるより、暫く記掲して一般の閱覽に供す。

本科探究録（明治三十三年十一月五日～十六日）

この事の始め

奥村奥右衛門

秀山嵯峨として千秋に高く霊水灑激として万古に湛ふ山水秀麗の境、秋を更きて自然の幽美を探り、民屋を叩きて偉人傑士の跡を尋ね、乃ち其幽魂を吊ひ我親想を逞うし、以て詩囊を富まし史的事実を究む。嗚呼旅行も亦快なる哉。殊に古今東西の史的現象は之を方冊中に探究するを得べしと雖、尚牢乎として抜くべからざる觀念の確實印象の疆固は、之を得るの道に於て其実地を踏査するに勝ることあらじ。且夫れ時として既知の事実の繆見妄説なるを悟り、未知の史料を収めて期せざる見聞に因らず思想界に貢獻することある等、是れ屢吾人の旅行者より耳にする処なり。本館旅行の挙ある亦是れに由る乎。茲に明治三十有三年天高く瀟氣爽然たる中秋養神の好時節を以て之が期とせられ、本科生十二名は監督員尾崎・清水兩教授の引率にて大阪湾周地方に旅行す。嗚呼此地方山水の風致に富み史料に豊かなる恐くは佗に見ざる処、吾人不才此風致史料を紙面たに躍如たらしむる能はず、以て山水英傑に負く事多しと雖も、茲に秃筆を呵し一は責を塞ぎ一は他日の参考に供せむ為敢て録する事左の如し。

因曰、此行恰も専科生諸氏の江濃地方に發途せらるゝと日を同じくし、且山室上山献桜の挙を兼ねるが故に期に先つ一日、即十一月五日を以て旅途に上るの第一日とす。

十一月五日、残夢点鐘に破られ蹶然枕を蹴て窓を推せば、四辺暗胆として宿雨未だ霽れず、点滴涓々として簷下に音あり。已にして布機整ひ輕装成り、笑顔一番広庭に整列し体伍^(隊カ)を区分する事二、以て桜樹を載せたる二輻の車に附随し、嚮導の一点灯を目標として校門を出で、茲に第七回修学旅行の途に上りぬ。時に午前三時を過ぐる数十分、車を推して歩の進むに任せ、雨を冒し闇を破りて宮川橋を過ぎ行くこと里許、雨漸く収り、東方山頭漸く白く、道路亦点灯の用なし。斎

宮を過ぎ櫛田を経馳て徳和に著きぬ。茲に列外軟脚の士を俟ち、乃ち列を整へて松坂の衢巷に入り左折して山室山に向ふ。尾崎教授并に数名は先發隊として茲に分離せられき。本隊尚左折して一小峠を過ぎ遙に前程を眺むれば山室山頭の紅葉已に連日の霜に飽き緑松其間を点綴し錦繡を洒せるの想あり。田圃の間をたどり行く事多時、一小村を過ぎて山下に至り、磴坂を攀ずること数十級、遂に妙楽寺に達す。時既に十一時乃ち茶を請ひて昼飯を喫し小憩去て山頭の墳塋に詣り、齎らす所の桜苗を植うる十数株。森嚴なる祭典と猷詠の披講とを了えて山麓に出で、三時を以て松坂駅内に集まるを約し隊伍を解きて帰路に就く。期に至りて復一人を洩さず乃ち列車に投ず。汽笛一声黒烟一抹列車は動き初めぬ。山走り河来り、談笑の間に幾多停車場を経過して黄昏龜山に着し、先發隊の幹旋によりて駅前の一旅舎に投ず。聞く先發の一隊は本隊は分れて僧安然^(金カ)の碑を大信寺に訪ひきと。されど隊員等は同寺境内に立てる重修記碑及刻下建立の企ある安全碑誌銘を記せる紙片を示し、同時に見聞せし諸点につきて報道せられたり。之を要するに当寺は現今高田派専修寺の末寺なれども、素と京師に在て花山寺、山城綴喜郡に移て大隊寺^(道カ)と名けたりしものにして、彼の安然^(金カ)も此大道寺に居を占めし事あるが故に、之に因みて寺庭に其碑を建てたるものなり。安全の事蹟は東鑑に見ゆ。而して安全の吟味は当寺の伝記中にあり。尚ほ覈討研究を積まば興味多かるべけれど、余り知られざる彼が為には先づ彼を紹介するの位置に立つを以て適當を信じ、この目的に協へる所謂碑誌銘抄節掲記して已まんとす曰、

北条義時專横暴恣^{中略} 建曆三年八月信濃土豪泉親衡為謀主会青栗時元為広等於諏訪祠前結盟謀討北条氏^{中略} 安全者青栗氏信濃氏幼剃髮入延暦寺^{云々} 夙憤北条氏之跋扈窃欲倒之遷居山城大道寺周旋公卿武人之間陰糾合同志至是直帰見親衡独趣鎌倉遊説甚力得在柄胤長和田義盛由利惟久和田成胤等数十人^{云々} 計全整発有日惟久成胤危懼不措誘安全縛之奪其秘書致之北条氏義時驚且怒下山城行村使金窪行等二人鞠之安全不屈罵不絶口既而得疾遂没於獄中

実建保元年八月十六日也 下略

此夜々五々相携へて亀山城趾に至る。月輪皎として中天にかゝり四隣寂として人籟を聞かず。閑静崇高の域に往三昔を忍ぶ事多時、遂に踵を旋して帰る。

正平の喊声

大林 完

鶏鳴声々遠近相和し、吾人が修学旅行第二日の晨を報じぬ。東天は漸く紅を孕み、雲霧の霏々たる処、遠嶺近嶽纔かに其姿を現はし、半眠の樹色は模糊として未だ醒めざるもの、如く、時に宿鴉の啼を去りて、点々微風に飄舞するを見る。我本科生の一行は、此昧暁を冒して備装を整へ、専科生と相別れて、時針七時を示さんと欲する頃、亀山駅より直ちに汽車に乗る。実地査察の端緒茲に開け、希望を前途の名勝古蹟に属し、一声の汽笛に送られて、意気昂然、山飛び河走るの境に放吟する身とはなりぬ。玻窓に倚り遙かに東天を顧みれば、朝暾は今や暉々として地平線上に現はれ、吾人一行の爲めに一段の清朗を加ふるもの、如く、胸襟更に輕快なるを覚ゆ。関駅を過ぐれば、彼の狩野元信に依りて其名稍世に知られたる筆捨山を右方に望み、加太村に入れば、地漸く山間となり、濃霧濛々として車外は殆んど咫尺を弁ぜず、左右の峯巒纔かに其頂を現はすのみ。路迂廻曲折して、或は奇巖絶壁の下を走り、或は溪流飛瀑の辺を通じ、越えて烏山の麓を遶れば、烟霧稍薄く、其石灰質を以て白皚たる、方に旭陽の直射するありて、亦奇絶なり。拓植を経佐那具に入り、上野を過ぎ鳥が原に至り、其間或は俳人芭蕉の生誕地、或は教国神社、或は聖武帝の由緒なりと云へる正月堂等の如き、皆所在を確むるに違あらずして通過し去り、大河原より木津川の上流に出て、水を渡りて其左畔を走る。古来泉川と称して屢歌人才子の口舌に上されたるは実に此河流にして、窓を排し眸を凝せば、朝霧は全く晴れて跡を止めず、河上一帯の風色拭ふが如く、水風徐ろに起りて漣波細やかに、白沙青松相映する処沿岸の山嶺逆しまに影を投じて、一段の趣を加へ、明美の光景更に明美なるを覚ゆ。一方は断崖

幾切、屏の如く壁の如く、直ちに車窓に接して仰視すべからず。是れ即ち彼の後醍醐帝蒙塵の地として、片時も吾人の胸臆を去らざる笠置山なりとす。匆忙の際感情湧くが如く、懷古の情軫た禁すべからず。笠置を過ぎ加茂駅に着き、汽車を更め、恭仁宮墟及び甕の原を右に見つゝ、鹿背山を遶る。鹿背山、甕の原、是等も泉川と同じく名勝の地として、古来人口の膾炙せる所、越えて再び泉川の沿岸を走り、新木津より祝園を過ぎ、柞の杜の所在を問ひて要領を得ず。はゝ。そ。の。と。は。う。ぞ。の。と、語音相近きを思へば、恐らく祝園の杜と称すべきもの、遂に転じて柞の杜と呼ばれる、に至りたるならん歟。田辺を経、稲田万項黄一色の間を走り、遙かに伏見の地方を目送し、長尾を越え、男山を指しつゝ、津田に向ふ。博士王仁の墳ありと聞けど、奈辺なるかを詳かにせず。津田駅を離れて稍進めば、倉治の桃林路傍に断続し、秋葉殆んど落尽して、将に寂寞の景ならんとす。桃林を隔て、左方突兀たる山岳の下、古松鬱然たる辺、源氏の滝と名くるものあり。是亦一瞬間の通過し、星田を越え四条畷に着す。亀山を去り此に至るまで、時を閲すること四、方に十時五十三分なり。

一行が此日踏査の目的として、最も重きを惜くもの実に四条畷に存す。正平決戦の蹟探るべく、孝子の墳、勇士の墓、亦吊すべし。乃ち汽車を棄て、先づ途を四条畷神社に取る。小春の天、日色麗かにして、一路の輕風袖に適し、巍峨たる飯盛の山畔、秋色方に酣にして、霜葉は真に二月の花よりも紅に、遊絲の繚乱たる処。時に告天子の喈々たるを聞く。宛然陽春の節なり。北に進み東に折れ、高野街道を横ぎる処華表なり。華表より一直線に歩むこと殆んど五町、石階に達す。其間の両側多く楓樹を植え、交ゆるに桜桃を以てせり。石階を拾ふこと一百段、是即ち四条畷神社にして明治二十二年の創建に懸り、楠正行及び其一族戦死者の霊を祀る。列せられて別格官幣社たり。後に飯盛山を負ひ、前に二十有五尺の石壁を築き、境内甚だ広濶なりと云ふべからずと雖、地高く風清く、桜樹蹣跚幾千株を移植し、以て賽者春時の遊覧に供せしめ、眺望亦頗る佳にして、近きは泉河

撰三州の平野を見、遠きは播丹の諸山及び淡島の青鬢、大坂湾万項の碧波を越えて遙かに其影を認むべく、一眸濶然真に画中の景なり。石壁に憑り築かれたるは絵馬堂にして、本社は其右方にあり、牆を以て之れを遶らし、拜殿前にありて其両側に石塔二基を据え、曰く忠勇、曰く孝烈、各二字を刻せり。一般の結構甚だ宏壯なりと為さずと雖、忠臣孝子の遺勲亦自ら顯はにして、人をして俯仰感慨措く能はざらしむ。既に賽し社務所に就き、要件二、三問ふ所あり。主典植村氏茶を供し菓を備へ、応接太た慇懃に説明亦極めて密なり。今其談る所を摘載すれば、正平の役正行の軍を此地に進めたるは、正に東南千早よりの方向にして、飯盛山に拠りてよりは、必ずしも一定の陣を張らず。此に起り彼に現はれ、縦横出没以て敵を悩ましたるもの、の如く、交戦の地は正に山下の平野にして、当時其中央に深野の池と名くるものあり、是れ兩軍の界なりしものにして、何れの代にか埋没せられ、一百七十町の耕田と化し、畦畷纔かに存して田間の径路となり、尚其池堤たりしことを認め得べし。又師直の進軍し来りたるは、正に北西よりの方向にして、平野の末今尚岡山と称する邱地あり、当時赤山と名けたるものにして、是其陣せし処なるが如しと。山上に古城趾及び池ありと聞けど、時既に午を越えたるに因りて登らず。古城趾は即ち所謂飯盛にして、建武年間僧正憲法の陣する所となり、楠正成攻めて之れを取り、正平年間高師直亦一時之れに居りたることあり。永祿年間三好長慶の拠る所となり、元龜年間遊佐信教の守る所となり、一方の險要として、当時屢重きを措かれたるもの、天正四年遂に織田氏の滅ぼす所となり、今や年所を経過して、雜樹雜草徒らに發生し、纔かに畧壁の跡を止むるのみなりと云ふ。池と名くるは杯水も尠ならざるものにして、唯一奇と称すべきは、三伏の炎天旱甚だしく、池沼一つとして涸れざるなきの候、独り淵然として緑水を湛え、清潔愈加はるにありとか。蓋し戦士の以て渴を医したるものなり。一行は弁備匆匆辞して社を出で、更に和田賢秀の墓を探る。賢秀は楠氏の一族にして、正平の役正行と共に此に殉死したるもの。植村氏為めに嚮導の勞を取る。

階を下り直進し、華表の下より高野街道に出で、北折して歩む。氏行々指し談りて曰く、看に西方樟樹あり。彼の処即ち正行が永眠の地にして、我本社よりすれば九町にして至るべし。深野池堤の痕は、樟樹より西南僅かに一町を隔てたるのみ、此地を名つけ四条畷と称するは、全く其畦畷を以ての故なり。四条とは東条西条及び南条北条の四邑を合したる称にして、東条西条南条は今何れも其称を異にし、東条は単に条と呼び、西条は曰く西之口、南条は曰く野崎、北条独り古称を存せり。我神社及び正行の墓地の如きは、即ち北条に属せるなり。又看よ北西に方りて緑樹蔚然たる小邱あらずや。彼則赤山と称せし地にして、悉く園林家宅となり、優に一村を形くれりと。或は説き或は示し、談尽きざるもの、如く、既にして墓に至る。神社を去ること凡そ五町なり。路辺松樹の磅空地を存し、中央に柵を設け土を盛り、地盤を高くしたること三尺可り、緑草萋々として其面を蓋ひ、墓石上に立ち、表面に和田源秀戦死墓の七字を刻し、背面に句あり。曰く

むかしとへばすゞき尾花のあらし吹 天保二年九月浪華永田友之誌

と記せり。表面七字の中、源字を刻せるは、源と賢と音相似たるを以て、恐らく賢字を誤認せしものならんと云ふ。先づ見る所寂として、絶えて香花を供したる跡なく、唯松籟の幾陣か耳朶を掠めて過ぐるあるのみ。意転た悽然たり。之れを聞くに、正平の戦後乱離歳久しく、方俗の暗愚なる、皆賢秀埋骨の蹟たるを知らず、一小石片を建て、之れを標し、之れを信ずれば以て齒の健なるを得べしと為し、齒神と称して纔かに賽し伝へたるが、右永田友之と云ふ者、屢々此地に来り之れを察し、為めに吊して墓碑を建てしより、始めて人に知らるゝに至れるなりと云ふ。之れを史に徴するに、賢秀死に臨むや、悲憤の余敵者の甲を噛み、死して尚離れざること七日、蓋し是れ所謂齒神様なる称を得たる所以にして、信仰の起る所奇と謂ふべく、英雄の蹟の世に伝へらるゝ、亦妙なりと謂ふべし。既にして一行は正行の墓を視んと欲す。時を檢すれば一時半に及べり。此日の予定たる前路尚遙かにして、探究を要すべきもの多く、再び二時二分発の汽車に乗り、大坂

に入らんと欲せるを以て、一刻も悠々たることを得ず。乃ち歩を早めて去り、故の途を取り、華表の下より謝して植村氏に別れ、彼の樟樹を目して一斉に急進す。直路窮する処即ち正行墓地の境域に入るなり。樟は稀世の大樹にして緑葉長へに繁茂し、影を地に投ずること方二十余間、幹は周回六人を以て遶らすべく、凡そ二十八尺なりと云ふ。其側らに碑あり、僧正三位楠正行朝臣之墓と刻せり。衝然として高く樟樹の枝葉に接し、其忠孝の節操と共に永く不朽ならんと欲す。周辺松樹多く、又碑石二、三あるを見る。何れも近時の建立に係かる。因て一行は一瞥を与へたる俛にて匆忙走り去り、停車場に至り汽車に乗る。飯盛城趾及び山上の池、其他見ること能はざりしものは、多少遺憾の念なき能はざるなり。

意ふに四条畷の地たる、一方は嶮峻なる山嶽を控え、他方は開けて曠漠なる平野となり、所謂守るに易く攻むるに難き処、正行の是れに抛りたる、豈此に見る所ありしに非ずとせんや。其後村上に告別せし奏辞を以てすれば、既に早く一死を定めたるもの、如しと雖、渠亦南朝股肱の臣を以て自ら任ずるもの、君家の危急且々に迫るを見、奚んぞ妄りに死をのみ希ふの愚をなさんや。深く渠が当時の成算を察するに、或は決戦奮闘必死力を極め、軍の利あるを俟ち、兵を近郷に派し、愈勤王の師を張り、進みて京師に及ばんと欲せしや亦知るべからず。吾人此地の形勢に因り、其然るを見るなり。嗚呼此地今や人烟遠く連なり、軍馬の嘶きし処甲士の伏したる辺、化して田園林圃となり、絶えて呐喊劍戟の声を聞くなしと雖、一々考査し来れば、五百有余年前の慘憺たりし悲劇、尚髣髴として吾人の眼前に現出し、飯盛の山畔霜葉の紅深きを見るにも、自ら当時の流血淋漓たりし光景を連想せられて、輕風の脈々たる、亦為めに腥氣を帯ぶるが如く、胸裡転々切なるを覚ゆるなり。

汽車は徐ろに進行を始めぬ。左右の風物又もや時毎に代謝して、吾人は再び応接匆忙の場裡に置かれたり。車中より遙かに野崎観音を拝し、行々顧眄を左右に転ずれば、生駒の峻嶺葛城の奇嶂は、蜿蜒として耕田万頃の末に連なり、暗峠瓢

箆山の諸峯其間を点綴し、金剛山其末に聳立し、峯平たる姿容は、曩に吾人が踏査したりし四条畷の遺跡と共に、永く楠氏一族の忠勤を示すものに似たり。佳道を経、石切平周等（マ）の神社所在の地を目索し、徳庵を過ぎ、彼の野崎観音参拝者の奇習を以て、世に其名を知られたる根屋川（根）を渡る。知らず此河畔、何れの時何れの人の因を為したるに依り、今尚老若男女の相罵倒しで忌むなきぞ。進みて放出に至る。放出ははなでんと訓す。徳庵と共に皆駅名、一行は書称の奇なるを以て、暫く談笑の資となす。既にして大坂に入り、綱島駅より汽車を下る。方に二時三十四分なり。

偉人の片影

藪 重吉

壮快なる汽車旅行も数時間の長きに亘りば、窓外山野の秋色半ば既に瞳底に沈みいで、幾分倦厭の念徐に漂ひ来り、沿道の名勝旧蹟徒に耳すること多くして見ぬを遺憾の思ひ漸く堪へ難きに至らんとす。この時軀を移して緩かに歩を大地に運び、全時に眼目を孫林黄圃より去て新に殷盛繁劇の街に曝さんとす。是れ当に感快誘起の一原由なるべきを、東洋屈指の商業地人口八十万に垂んとする大都会に入れる今一行が歓喜の桐只を呈したるや言はずして人之を知らん。されど本旅行の大坂市に於けるや期する所初より尠少なり。是れ堀江といひ、高津宮（脱カ）とひ、豊崎宮に大坂城に其他歴史地理上篤と踏見し置くべき研究資料は数多存在することと知らざるにあらず。一は此地の四通八達の街衢たるに因り、一はパストの流行今猶其跡を収めざるに因り、材料の多分を他日各自の研究に委して日程を此地に惜しみたるに出づ。されば一行がこゝに費すべき時間は僅々二時間余にして見んと欲せるものも綱島・梅田両駅間の通路に沿へるものゝみ。之を心して一行は先づ大坂城に向へり。

即ち綱島より備前橋を東に渡り尚ほ京橋を渡りて遂に大手門に至れり。此日恰も吊魂祭に当り老となく幼となく男女の群集夥だしく人馬の烟裡殆んど五里霧中

に在るが如し。而して式後吊魂会社員、赤十字社員に限りては城内縦覧を許さる、規定なりき。されど一行も旨を通し内許を得て入城したるは何等の幸何等の厚意ぞ。抑もこの地や素と石山寺として両宗の根拠地たりしものなり。而て大坂城そのものは天正中豊臣秀吉の経営に係り深塹高壘規模極めて宏壮偉麗なりしは誰か之を知らざらんや。然るが如きもの後年に兵燹雷火に罹り壤頽の余今は唯牙城を存するのみなり。初は北は淀川を以て限り、西は今の西区と東区の間を流る、横堀川を以て限り、南は遠く阿部野附近に至り、東は玉造より遙に東方に及べり。かの大坂夏の陣の時今の河内国に一番二番三番村などの残れるは蓋し其当時寄手の陣所なりしなるべく城地の広大なりし又知るべきなり。城内には下馬の井、千貫槽、胎衣松、太鼓槽、七本松、青屋口、伏見槽、筋鉄門、御蔵屋敷、詫介椿、極楽橋、菱槽、楠槽、難波梅、秘し曲輪、天主台、黄金水、金蔵、武庫、稻荷社、蓮如袈裟掛松、秀頼公生害松、銀水井、禿雪隠、不開の炉、等有りし由なれど今は其僅を存するのみにて、師団司令部、中部都督こゝに設置せらり、尚水道、金水など親しく一行の注目せし所なり。聞之金水は其名の示す如く水底に多くの金を沈めたるなりとぞ。又豊公時々千利休を招き茶を喫するや常に此水を用ひたりと云。尚伝ふ淀君は此井中に没したるなりと。之に關しては他日を俟て私判を試みる事あるべし。何れにしても水深くして底を知らず、悍天数月に渡るも常に水の絶ゆることなしとのことなり。一行遂に天主に登る。位置は御本丸中央御殿の後にあり、五層の天主は雷火の為に焼失す。高十七間台上方十間數十七間ありといふ。今は其台の跡に由りて當時を想像せらるべし。眺望又絶佳なり即摂河泉の郊野遠くは茅停^(マウ)の白帆、淡路島など皆掌中にあり、望瞰すれば大坂全市は雙眸に集り万戸薨を並べ阡陌縱横恰も碁面を見るが如く名山巨刹一々指点すべく之を見る吾人の神心や豁然たり。然れども直下十余丈の高台なれば足戰栗するの思ある等屢々なりき。参十分余にして門に出て衛兵に一揖して門外に至れば城南練兵場内の余興を見んとて観者甚だ多く殆んど立錐の地なし。一行は道を急ぐの故を

以て直に内本町に出て府立博物館に至る。位置は東横堀川の東岸にあり、館内數十区に分たれ万国古今の天產人工に属する金銀珠玉書画珍器珍禽奇獸等各其所に羅列せらる。就中一行の眼目を引きしものは先づ門戸を入ると全時に見らるべき一大鐘なりとす。其高^(タカ)す大凡五尺四寸回り一丈五尺余ありて元来上町釣鐘町にありしものとか。寛永十一年甲戌閏七月徳川家光公上洛の時大坂市中の地子を免除せらる。因て其恩を謝する為め三郷町中より此鐘を鑄造せしなり。銘は大仙寺住僧龍巖の撰にして其文鐘銘に曰く……(余云ふ傍△点の文字判然せず)

摂州大坂町中鐘銘

是歳甲戌之秋以源左大臣釣命被鐸当地市鄭永代歛租是天下寛裕之基也人皆扞野展喜悅眉故[△]依衆評使晁氏新鑄鳴鐘[△]矣曙雲横東嶺朝撞之祝延、皇帝万歳、皎月懸西山夕擊之祈誓、賢君子斯在亦慶余則勒金石銘彝鼎[△]而歛為大平道矣蓋夫無貴無賤聽鐘声者忽睡魔速破群疑也、

鎔金練王	不貴鉗鎚	華鯨形作	晨昏報之
將軍大樹	風不鳴枝	冢家父母	万民蒙慈
仁者有勇	大明無私	清平世界	永護丹墀
一有八声響	通天神地祇	却石有消日	洪音無尽時

寛永十一閏逢閏茂季秋吉日
願主町中結衆寺

野釈龍巖叟書

其より少し入れば、古き巨大の木船あり。記して曰く、明治十一年西成郡難波村颯川の時該鑿線と全村桜井徳兵衛所有地とに跨がれる土中より掘出せしものにして大木を刳て造りたるものと見ゆ。其形状全たからざれば何の代に造りしものか詳に考ふ能はず。然れども千年前後の者には疑ひなかるべし。木質は横須賀鎮守府に於て玉楠と鑑定す。或は然らん。又桑山櫻等の説有るも信じ難し。長六間横の広一間とあり由て以て古代の船体たるを察せらると吾人亦其他を言はんや。

次に動物の前を過ぎ美術館に入る。陳列せらるるものは楽器類装束甲冑図画等あり、則ち腰鼓（建久年代）、古代楽面（天平時代）、指鼓（古代の楽器和名スリツミ）、草鞋（但し伶人履）、貴徳装束（四天王寺什物）、大平楽装束（四天王寺什物）、八僊装束（四天王寺什物）、納曾利装束（四天王寺什物）、筆簾（東儀河内守兼陳吹科の管）、和琴、古代筆、平家琵琶、聖護院宮御筆龍、筆銘（伊藤斎庸）、花山院龍笛銘和歌石王面、採桑老之図（冷泉泰郷之筆）、関寺小町謡曲横卷、谷文晁翁之図、邯鄲之図、狛鋒装束（四天王寺什物）、唐織能楽装束、豊彦津和布刈之図など其主たるものなりき。この時正に三時十五分一行仍ち博物館を出で東横堀に沿ひ東に折きて天満天神筋を通り北に向ひて天神橋を渡る。橋の長百三十六間あり皆鉄桁鉄柱を用ひ構造頗る堅牢、蓋三大橋の一たるに恥ぢざるなり。其より進んで天満天神の社に詣る。こは府社にして末社には蛭子神、猿田彦、手力雄命、野見宿禰を祭らる。社殿壮大にして自ら神威の高を示せり。古老の伝ふ所に天神祭は実には大阪市

中の賑にして昔より水陸共に種々の飾物を作り、船中の人は鼓太鼓琴三弦に興じて夜のふくるを知らず、男女おしなべて風流の衣裳を粧ひ妓婦など加はり揃ひて前囃し後囃しに妙曲を奏せり。其美観は聞くよりも見るが百倍なりきとぞ。今も尚七月廿五日の夜は神輿を舟に載て淀川を下り松島の旅所に渡御あるとかや。九拝して辞し、一行は天神橋筋を通り菅原町より中の島の公園に至る。中の島の名は土佐堀川と堂島川との中間なるは故にしか名付けたるものなり。公園内には豊国神社、明治記念碑等あり吾人見物眼を以て此地に対する偉麗頗る遊観に宜しく亦吊魂祭の余興の是所にも演ぜらるゝを見たり。尚日本体育会支部あり、幾多の青年を鼓舞し大阪市民の柔弱を蟬脱せんとの計にや。大阪市に於ける一行の望は既に満されたり。於是中の島町を出で渡辺橋を通り直行して梅田駅に達せり。此時先着平部氏の見当らねば会合を西の宮に期して急ぎ列車に投ず。こは憂の一なり。偶々奥村氏の帽子駄夫の拾ふ所となる。こは当日の笑草の一にはありき。汽笛一声汽車飛鳥と争ひ空氣を突て進む。四時卅五分にして夕日既に西山に宿らん

とするを望み、時十一月の上旬なれば所謂小春の時季とて窓吹く風の暖きを思ふ。程なく神崎駅に達し、次いで武庫川を越ゆ。一面の田園に無数の小丘あり。今を去る五年前武庫川洪水の為に沙土の載積したるものとかや。青山広田の森は六甲山脈の麓に見ゆと思ふ程に遂に西の宮に着す。平部氏一行を待たず一行即氏の後れしを察して氏の駅舎に待つこと一時、この間一隊の友は旅舎を求むるに奔走せられき。やがて一同会し得て旅宿に投じぬ。夕食後直に尾崎・清水の両教授と共に神功皇后の船着せられし御前の浜に到る。年代の久しき其何れの辺に御舟を着け給ひしか知るに由なければ月夜波を友として二千年の旧蹟地に徘徊す。事と望と共に既に足れりと謂ふべし。尚この地の名称、広田神社の位置等に就ては翌日担当員の記中に見ゆれば略す。

忠臣たる赤松氏

葦津 洗造

七日快晴、朝来輝き渡る一閃の光線はやをら一行の発程を促しぬ。乃ち各自旅装急ぎ客舎を出で七時西の宮神社を拝す。境内広闊壯麗真に美観を呈し、神園の結構亦実に妙なり。広田神社遙拝所並に大国主・住吉・松尾・船玉・南宮等の末社を奉祠す。今社記の云ふ所に従へば、祭神は天照大御神の御兄に座る蛭子の神にして、何時の頃より西の宮に鎮座せしや知るによしなと云い、本朝通記^⑧の一句なる

推古天皇九年春三月、太子始^レ市使^下商家^一知^中壳買之術、^上当^レ此時^一誓^レ蛭児神^一為^二商家守護神^一、後世以^二惠美須^一崇^二福神^一自^レ是始焉、

を引証とし推論をなして曰く、之を以て考ふれば、蛭子神は早く此の地に鎮座せしを、聖徳太子普く商売に神徳を仰がしめん為め奉らしめ給ひしものと覚ゆ。現に同社の南に沿へる町名を市庭町と云へるは古昔市を為ししにより名づけたるなるべしと。兎に角蛭子神を祭り初めしは最も古き事なるが如し。蔵する所の宝物中、聖武天皇並に伏見院の御宸筆、其他三好長慶の裁判状、伴丹大和守親興の分

米表、荒木村重の書翰等の文書類は随分価値あるものなるべく、殊に現今圍繞せる境界土壁は古昔の俣を存し依然として其の位置を変せざるものなりとぞ。行手遙なる八里の行程到底完全なる觀察を遂るを得ず。乃ち東向広田神社に赴く。望み見る六甲の峯甲の山孰れ史的の資料ならざるはなく、豁たる一帯の沃野曉霧深く鎖して旭日微なり。一行はやがて広田村に着きぬ。神社は西の宮を去る十八町東山の中腹にあり。社殿莊大の觀なしと雖風光の閑雅なる一望人をして暢然たらしむるものあり。近く東山に對峙して小丘出す。之を西山と云ふ。聞説当社は往古二山の間に座せしが享保九年初めて現時の地に遷御座せしもの也。而して祭神は所謂天照大御神の荒魂なるが、世に広田五所と云ふは菅田別・諏訪・住吉・産靈の四神を後配せしものなりと。然るに今神祇志を閲すれば、後配八幡・住吉・松尾・八祖の四神となり、真偽果して孰れぞや。猶一考を要すべきなり。今又一説を耳にするあり。広田神社は、住吉・西の宮境内にありしもの、移転せしものにはあらざるか。何となれば歴史上当社海辺たるは明瞭なる事實なり。然るに今則ち此の如し。之れ疑ふ可きの一也。之に加ふるに西の宮が式内の神社たらざるに關せず、境内の莊大、彼が如きは實に當を得ざる所、而し尚ほ広田社の御統所西宮人民の船標となし居に至りては、最も怪むべき事實とす。此れ豈に前段の原由あるに存せずとせんやと。蓋書紀に

更還^三務古水門^二而卜之、於^レ是天照大神誨之曰、(中略)當^レ居^二御心広田国^一云々、

とは、広田神社の縁起する根本的事実の記載なり。而して今之を延喜式に驗するに、武庫郡に於て夷神社並に之に類似せるもの一として見出されず。されど反之菟原郡の条に大国主西神社とあるは、蓋し西宮を云ふにはあらざるか。吾人未だ図に就きて詳細に地理の変遷を確むる能はざれども、神祇誌科は明かに之を告げ居れり。猶ほ又神祇志に

大国主西神社(中略)蓋祀^三大己貴命^一、(中略)豈本社初又配^二祭蛭子^一、而後

人以^三其名特著^一遂誤、以^三蛭子^一為^二主神^一、号^二戎社^一、而大国主之名終隱歟、社伝云、中祀^三蛭子神^一、左右配^三祀大己貴命、事八十神^一、恐顛^三倒主客^一也云々、とあり。若し之をして事實ならしめば、西宮境内の広莊敢て怪むに足らざるが如し。且つ誌料に従へば、西宮は広田の末社なりとあれば西宮人民の船標亦何の疑かあらむ。兎に角歴史上場所柄の少しく遠隔に失する僻なしとせざれども、之を以て直ちに説をなすは未だ確たる根拠となすべからざるが如し。猶ほ西宮の名義に就きて考ふるに神社啓蒙、国家万葉記には西宮郷広田村とあり、又伊呂波字類抄には広田を世俗西宮と云ふとあり、去れど此等は所謂後世の事にして往古にはあらず。何となれば、倭名抄に広田郷を見る事を得れども未だ西宮郷を見るを得ざればなり。神祇志に大国主西神社は武庫郡西宮にあり、広田社の西なるを以て之を西宮と云ふとあり。然らば則ち西宮てふ名は大国主神を奉祀せしより広田社に對して起りし事明なり。彼の広田一名西宮と云ひ西宮郷広田村など云ふ如きは、現時の西宮が繁榮につれて其名広田に波及せしにはあらざる歟。猶ほ西宮の末社に南宮と云ふあり、是亦広田の南なるによるとあれば、豈に敢て一考の値は^三しとせんや^一。吾人は宮司中田正朔氏の懇篤なる説明ありしに附し、更に思考を逞ふること略此の如し。尚ほ氏の説明談話と懇懃なる待遇とは、不覺吾人をして時の過ぐるを知らざらしめ、一行をして感謝するに辞なきを患へしめたり。供せられたる茶菓各二個、一つは当社の御紋を画き、一つは宝物如意即ち劔珠を象出せり。乃ち恭しく之を頂戴し、午前九時辭して越水村を過ぐ。永正の昔細川高国の勇将瓦林対馬守政頼が立籠りたる越水城、跡だに消えて村役場の敷地となり、三好長慶が此の城を根拠として威を東西に振ひし残塁、今は牧牛の声微かにひそむもあはれなり。之より途を捷路に取り畔に傍ひ溝を越えて阿保山親王寺に向ふ。寺坊は打出村にあり。行きて刺を通せしに寺僧の不在を以て意を果さざりしは大に遺憾とする所なり。於是尾崎・清水の両教授は直ちに分れて墓守某を問はれ、他は則ち路を御陵に求めぬ。街道を右折して東すること二、三町、老松參

差たる一小丘あり。田夫に問へば金塚なりと答ふ。聞説往古黄金の瓦を造り之を此の丘に埋めて曰く、後世歳凶して人民の飢餓に迫るときあらむ、此時之を撥掘して救ふべしと。其如何なる人なりしや知るによしなし、亦奇談と云ふ可し。曩に墓守を訪ひたる両教授空しく此の所に来会せられぬ。行くこと二町許、松杉森々たる所謂前方後円の御陵を拝す。此即ち阿保親王の御廟なり。嗚呼親王は平城天皇第一の皇子にして御母は葛井藤子、性謙遜にして文武の道を兼ね膂力あり、且つ絃歌を善し玉ひとか。嵯峨帝の位を踐み給ふや四品に叙せられ給ひしが、弘仁の変に坐して太宰員外帥に貶せられ、承和七年彈正尹となり、九月上総太守を兼ね給ひしが、同年十月五十一歳を以て薨じ給ひぬ。橘逸勢等が謀反密奏の功に依り贈一品に叙せられ給ひき。在原業平は実に其の第四子なり。仁和三年二子行平が須磨に配流せられしとき、廟を此の地に遷したりしなり。十一時と云ふに去りて住吉に向ふ。永正六年瓦林政頼が細川澄元と決戦し赤松勢の横鎗に見事敗れし芦屋の城を打眺め、麿坂・忍熊が軍を起して打出しより名に負へりてふ打出の浜をも行き過ぎつ、中国街道をねり行き、保久良神社を山頂遙に拝し、やがて業平塚を求めて得ず、一行が住吉に着きしは実に正午の頃なりき。茶店に憩ひ行厨を喫し、直ちに社務所を訪ひしに、又も不在の宣告を受けしは吾人の殊に遺憾とする所なり。社殿は莊麗と云ふにはあらねど、境内広闊自から神佐備たる趣を存す。社格は郷社にして天照大神・底筒男・表筒男を祀り、後ち神功皇后を合せて四座となせり。創建の時代は確かに神功皇后摂政中とぞ聞く。社前の左右に御影松礫石てふ怪しきものあり。社後に釣竿の竹ありしかど、此亦見るに足らず。午后一時と云ふに、薮・神吉の両君先発隊として直ちに神戸に赴き、他は則ち摩耶山に向ふ。いそや吾人が待ち焦れたる摩耶の嶮は眼前に横はれり。鉄脚の運ばん限り息の根の続かん限り、唯一揉に踏破り呉れんと。やがて住吉を出で立つ。漸く歩を径路に取り、群家を経笹原を過ぎ、愈摩耶が麓に達し袖谷に沿ふて登る。羊腸たる山径容易に攀ぶ可からず、一步一息一喘一休碧澗に沿ふて進む。行く事

数町、坂路の峻嶮益甚だしく漸く足を嘔むを覚え行路の困難名状すべからず。回顧すれば身は既に雲上の人となり、千里一望の歴として両眼の中にあり。快哉一番勇を鼓し躍如として登る。悠忽にして老杉生ひ茂りて深く鎖し黯淡夜よりも暗き処、一条の径路僅かに通ずるを求め漸々にして山頂に達す。山門を過ぐれば鐘楼寺塔直上に聳え、石階幾百十高さ幾千尺、莊大の観人をして殆んど驚殺せしむ。石階の極まる処左右に観音堂夫人堂開山堂等あり。本堂は大化元年法道仙人の開基創建せしものにして十一面觀世音を安置し、仏母摩耶山切利天上寺と号し古義の真言あり。明治の初年祝融の災に罹りし由寺記に見ゆ。登ること数町にして奥院ありと云へど見ず。彼の赤松入道が用ひし巨大なる陳太鼓を一見し暫く画堂に憩ふ。瞳を放てば播州の山河渺茫として涯なく、茅渚海蕩漾として疎霧僅かに鎖し模糊たる淡州の翠壁は雲烟の間に横り、神兵両市の光景は正に脚下に踏むの感あり。歎賞時余、僅に愛を劃きて下る。数町にして右折又数町、地勢平坦蓬蒿密生する所、是れ即ち摩耶の城趾となす。あはれ正慶の昔、赤松入道円心が家族郎党卒き具して六波羅の大軍を打ち破り、血の雨を降らし骨の山を築きけん摩耶山上の遺礎、一の尾二の尾の古跡は今に其の形を存して吾人の胆を寒からしめ、呐喊剣戟の声満山を震動し血痕伏屍所在散見しけん慘憺たる光景、今亦見るが如き感あり。徘徊数次漸く去りて布引の滝に向ふ。之より直下幾千尋屈曲幾万丈、吾人の泉眼に眼を洗ふもの將に瞬時の間にあらんとす。

千古の芳流

額賀 大直

一行は今正慶の昔忠臣たりし時の赤松が名残しるき峻嶺、孝徳天皇の御宇天竺の名僧が仏母の像を安置して、布教を計りしてふ高峰を踏破し、其絶巔を極めて、東南方煙波漂渺の間には、紀泉の巒嶽霞の如く横はるを眺め、西南方に山陽南海の諸山游竜の蜿蜒たるが如きを望み、眼下には神戸市街の一团を初めとし、湾曲せる海岸線に沿ひて点在せる、大石、御影、西の宮等の諸町村を下瞰し、神自ら

快豁、予定の行程たる淡路の一島は既に已に吞みつくしたるの感あり。時計は四時を報ぜり。いで是より本日予定の宿泊地たる神戸に向はむ。

摩耶山天上寺よりは布引迄二十五町と云ふ。若し布引を経ずして神戸に出でむとせむか、道はさまでの嶮峻を覚えずと。然れども一行は元より布引を一見せむの予定なれば、道を西して小逕を這り布引に向ふ。此阪路予想せしよりは峻しからず、眺望また変化にとみ、路傍茶店などの設けありて休憩に便なり。若しそれ杖を止めて俯望せむか、山頂に一団の黒点たりし神戸市街は漸く大に其形を示し、区勢の概略雙眸の裡に収むるを得べし。見よ維新以前の神戸村、現今の新都會が、通商貿易の繁栄に関西屈指の地位に上り、旭日沖天の勢を以て其東隣の諸村を蠶食し、其区域を広めむとするの有様は、人家稀れなる田圃の地迄も井然区画を作りつゝ、あるに知らるべし。嗚呼碧海桑田の論吾人を欺かず、僅々三十年の変遷猶且かくの如し。況んや数百年の長日月の間に、此務古海湾の変遷りが如何計りなりしか。亦思ひ半に過ぎむ。地学上の研究の結果は、此沿岸の地数町は悉く沖積層なるを以て見れば、上古は其沖積層の地は、海面に属したるものなるべきことを説明せり。若し果して此研究が真を得て、而かも三韓征服の当時が沖積層成立以前にありたりとせむか、御船によりて渡り賜ひし神功皇后の祭らせ賜ふ所の住吉の神祠の所在は、一行が曩きに詣でし如く海岸に遠からずして、必ずや沖積層丈の近かさを増して、社頭に近く海水の波打ちしこと明かなり。又是と同時の關係を有せる広田の社頭亦然りしなるべし。若し如斯き論究を進めて、務古沿岸の旧物に就きて探究せば、意外の興味あらんことを信ず。然れども予は今さる余裕を有せず、只其行程に就て記さむのみ。

一行は羊腸たる山路を下りつくして、薄暮布引に着しぬ。滝は布引山の中腹斬崖峙つ所にあり。懸岩十五丈と称す。飛舞奔騰鳴音遠雷の如く、其白泡飛沫相連りて流落するの状白布の如し。以て名となすと。時は正にこれ晩秋、染めつくしたる紅葉其白布の週辺を彩り、此仙寰に津々たる詩味を湧出せしむ。あ、是れ果

して如何なる造物主の作為ぞ。

わけ入りて生田（ウツタ）の小野の柄もこゝにくたしやはてん布引の滝 季鷹

の詠は自然石に刻まれて壑側に建てられてあり、亦故なしとせむや。其南方約三町にして雌滝あり。其大さ風致共に是に垂く。然れども今は神戸市水道の水源たるを以て近づくを得ず。去つて神戸に向ふ。数町ならずして市街に出づ。實に是生田野、生田川と称するあたり、名所図絵著作時代に於ては一野村なりし所なりき。然るに今日の生田川の流域を改め、新生田川を其東に作り、今日の生田野は車馬喧騒の巷と化し去りしなり。

七時生田神社を拝す。彼の有名なる生田森は即ち此境内なり。社頭に叢の梅、梶原の井、敦盛の萩、弁慶竹、神功皇后釣竿の竹、八丁梅等の故蹟を存し、社には神功皇后、武内宿禰、赤松則祐等史乘に有名なる貴紳英傑十余名の遺物遺筆等を蔵すと聞けど、夜中一々是を觀覽するの暇なく、只社務所に就きて来意を陳べ、生田神社摘要一覽、と題する摺物一葉を恵与せられて割愛したり。去つて湊川神社に謁（ウツタ）づ。是に先發たりし、藪、神吉両氏に会す。両氏は曩日學館よりの紹介状も発しありしを以て、社務所に就きて来意を陳べて史学上裨益あらん宝物等の拝觀を求めしに、はや既に宝物も倉庫より出し置き猶一行の為に宿舍も定め置かれたりとの事なること以て、宝物等の拝觀は翌朝を期し置きたりと、是を以て一行は疲足を勞して宿舍に尋ぬるの煩なく、其指定によりて同社前の旅舎に投ずるを得たりき、是れ一行の今猶其厚意に対して深く感謝する所なり。あはれ吾人は楠公戦死の当時に対して、些の叙情語をも吐露せんとはせざるべし。何となればこゝに出づることの徒に傷心痛歎の劇を演ずるに等しく、又空しく貴重なる紙白を填むるものたるを知ればなり。只現時祠宇附近の繁華熱鬧を極むるに就て思ひし所をいはんに、神戸市の楠公祠か楠公祠の神戸かと、境内幾千の点燧は紅を空天に輝かし、車馬人声は深更に至るも猶絶えず吾人の枕辺を連射せしなり。されば一行中の多分は初更後に歩を街頭に境内に移し運べり。吾人は言はんとす、一

行の勇疲れて愈磨せずと。

翌八日約により同社務所に至り宝物の拝観を得たり。先づ禰宜岩田氏に面会す。氏は一行を客室に導き、茶菓を饗し一行を遇する頗る厚し。暫して出し置きし拾数点の宝物を陳列し、一々之が説明の労を取られぬ。元より同社は古社と云ふに非ず、従て伝来の宝器あるにあらず。只何れも献納或は同社の蒐集にかゝるものにて、信偽を保し難き点なしともあらざれども、観覧に供せられしは其内にも信を置くに足るものゝみを撰みたる物なりと云ふ。即ち

楠公自筆の旌旗（今軸とせるもの）

同神号（光圀卿自筆の神号と併せて軸とせるもの）

甲冑弓箭を帯して床几に凭れる楠公肖像の軸

同和歌二首（懷紙奉書の如き紙質）

鎮宅靈符神鉄板像（直径凡一寸五分位、表に鎮宅靈符神の像を鑄、裏に日天月天の画と其下右方に建武元年^{乙亥}正月と書し、中に鎮宅の二字のみ読み得られ下は磨滅せるものと、左方に楠正成祭との文字を鑄出しあり）

同鈴（直径凡一寸七八分位、上部には亀の形を鑄附け、表面に鎮宅靈符神と書し、之に輪廓をなし、裏に建武元年八月楠正成^{花押}と二行に書したり）

楠公所持の鉢破 二口（一口は銘に相洲正宗造之大垣住人兼氏摸之とあり）

楠公自筆の祈願書

等あり、其他小楠公の文書、諸兄公の和歌等あり。楠公自筆の祈願書は珍奇の思ひせらるれば左に是を録す。

某荀奉被一天之君元弘元年秋九月十有一日始而挙義兵全不為身計為君為民也奉納宝物於七所靈社誠為朝敵追散也

一 誉田八幡宮

二 水分大明神

三 田田尻大明神^{（マツ）}

四 千破屋赤坂鎮守

五 八古八幡宮

六 勸心寺蔵王権現

七 上宮太子

右七所相添宝物奉納者也

元弘元年九月十日

正成印

それより氏に就き種々叩く所ありしが氏は彼の水府公の建設にかゝる、嗚呼忠臣の碑下には公の首を納めたりと。而して胴骸の所在今知るに由なく、或は当時此附近の池中に投じたりと伝ふと。是蓋し此地に於ける伝説なるべし。明極行状といふもの伝て曰く、正成終人当寺^{（広巖寺ヲ指ス）}之無為庵、而昆季列坐自殺、殉死若干人禪師速入^三庵中^一函^二遺骸^一、避菴百弓許葬焉、とはによりてこれを見れば公の遺骸は正しく此地に止まりたるが如し。然れども今又太平記を閲するに公の首級は河内に伝はりしことを記し、而して又河内国観心寺内に公の首塚と云ふものありと聞く。是れに依れば又此地は唯に其戦死の地と云ふのみにして、公の遺骸は止まらざるが如し。予は不幸にして未だ之が判決を下し得べき程の史料に接し得ざると、予の浅学寡聞とにより後考を待つ^の止むを得ざるなり。然りと雖も其遺骸の所在は何処にまれ、在天の英霊は湊川流れ清きはとり、万民其英徳を仰ぐ所、湊川神社と静宮と常へに鎮まりますらむ。猶同社に於ては前宮司の頃より、楠公を中心として南北朝時代の歴史を編輯せん^{（備考）}の目的を以て、偏く其史料を天下に求めつゝありと云ふ。予輩は一日も早く、かゝる編述の世に公にせられんを希望して止まざるものなり。

午前九時同社を辞して広巖寺を訪ふ。湊川神社の北方約七町楠町にあり、医王山と号す。楠公自殺の所と云ひ、楠公以下の古遺牌ありと伝へ、明極行状の古写巻ありと云ふ。先づ是等に就きて見聞せんと其僧坊を音なへば、不幸にして住僧の不在に会し、一童僧の応答を得たるのみ。就きて問ふ所ありしも、隔靴の感を

なすのみ。只昔時当寺の住僧（何時代なりしか）楠公の墓上草深き裡に、忠臣楠子之墓と刻せる石標を建てたりしを、光圀卿、嗚呼、二字字を加へて今日の碑に改建せられたりと伝ふ、と云ふことを聞き得しのみ。寺庭に梅樹あり、もと楠公の墓側にありしを移栽せしものと云ふ。其側に碑あり一詩を刻す。

楠公墳上一株梅、元禄年間此処栽、精忠猶守當時節、歳々南枝向日開、

藤堂竜山

又庭の一隅に句碑あり。

撫子にかゝる涙や楠の露

芭蕉

と寺境を出て夢野、御所跡等の地を尋ぬ。夢野は方今小字に其名を存するを以て、容易く行人に教示せらるゝを得たれども御所跡即福原旧都は不幸にして、是れを識れる行人に会せず、只港山、祥福寺等を其問ひに対して指示せられたるのみ。

若し今日の行程と時間とに於てゆるすあらば、其筋に就きて訪ふべきも、行く手の急ぎは是をゆるさず、止むことを得ず西して夢野に向ふ。湊川を渡りて行くこと幾何ならずして、又河流あるに逢ふ。其名を問へば湊川と。之近年其流域を改めたるものなりと云ふ。行くこと数町にして夢野に達す。夢野元より夢野にして夢の如く漠たるもの、古跡の尋ぬべきなく、史料の求むべきなし。只田屋離々として丘阜池沼徒に秋色を遅くするのみ。一行亦故らに寄路せしにあらず、只道の序を以て訪ひしのみ。彼の鹿の故事の如きも、日本紀なる菟我野の故事と混じたるものなること名所図絵などに弁ずるが如し。嗚呼鴨越の関門は右方近く三、四町の距離にありとか聞けり。そも今日の史料採集に、一行中誰か判官の功を占むべき。畑山庄司は果して誰なる、須磨に將た一の谷に予は次の記者に是を問はむ。

笛声余韻

伊藤千可良

市をはなれて、監獄署の裏手を過ぎては、蟋蟀すだく夕、白露横はる暁。柿色の衣、鉄の鎖の罪の子等果して如何なる感をか、叫起すらむ。と想ひ来り。夢野

に出でては、遠く懐旧の情坐ろに湧き来るものから、里人を執へて、またも「御所跡は何処？」と重ね／＼尋ね来れども、皆々「知らぬ」の御挨拶に困じ果てつ。この果てざる憾をかむで、草鞋の紐を締め固め、長田神社に向ふ。

路は杣人が通ふなる、荊棘まじりの中を踏みしだき、池畔を走り、これより爪前上りの路となり、途にして前方を失ひ、路なきところを歩むて、漸山頂に達す。一行つかれしも興にまかせて、笑ひさゝめき、田畦を走り、山下にも息を止めずて、湊川の新床を亘り、右折して長田神社の階下に祝詞を捧げつ。

この社は原官幣小社なりしが、先年中社に進めりとは禰宜三沢の君の説話なり。後宝物記をも観覽せしめられつ。此の社裏老杉檜柏錯々枝を交へ、鬱勃蒼乎として迫らず、殿宇敢て大といはず而も高壮華麗に過ぎず、人をして自ら尊崇の意あらしむ。境内村上帝の御献納といふ石燈あり、今は欽壊して儼かに其の形画を存するのみ。試みにこの社の宝物を書き写さんかな。

古鏡

一面

裡面に大國主神顯国玉神大己貴神志国男神八千才神天国玉神天下泰平五穀成就国家納民福一切運力勸願淳和王御処神事空梅七日護摩焼

社司從二位中將中臣春榮弘仁庚寅天九月十一日

石燈籠

一基

村上天皇天歷年中勸願の砌御寄附

古額（長田大明神）

一面

村上天王応和年中雫御祈願の砌御寄附 但小野道風筆

古鏡

一面

裏面に建久壬子年武運長久 頼朝

同

一面

裡面に正中甲子年頼神鏡高氏武運長久

神輿

但装具一式

頼朝將軍寄附

衝立 神輿用四基

同断

刀 一口

刀 一口

銘に宝暦十年八月吉祥日伊賀守金道日本鍛冶宗匠

額 （撰津国本宮
長田大明神） 一面

寛政六年八月十五日二条右大臣御寄附 但添翰

明治十五年六月中盗難に罹り紛失即警察に告訴し受領の証を存す

古額 三面

太刀 二口

頼朝寄附

鬼仮面 七面

御旅所当区内野田村有之長柄浜書類 二十七 但絵図面五通添

往古祭典御幸書類 十五

天正十五年九月日旭殿より社領黒印 一

慶長十五年九月十五日青木主水社領黒印 一

元和四年十月十八日氏領黒印 一

寛永十二年十一月日青山大藏少輔黒印 一

不減貝

神功皇后御寄附

是等を以て、その主要なるものとす。この外、社の記簿にのする所、猶ほ多しと雖、そは何等の質言をも加へざりし所なれば略しつ。

斯くて、姑くこの境内をかりて、中食の包を開きぬ。山海の珍味あるにあらず、入るゝところのものは握飯三梅干の酢味あるなり。然りと雖も、眼前活地図を展

見して、想を遠き方に走する、実に握飯と共に甘味ありて、快余れりと云ふべし。

午後〇時半と云ふに、草鞋に水して長田神社を謝す。門前直行一町にして、左方十余坪芝生ひ幼杉雜り生ずるところあり、里人称して御舟芝といふ。これ昔神功皇后征韓の後陸上なし玉ひし処なりといへど、いまは田圃の一角となれり。

中国街道を東にとる。数町にして三叉路の池畔、半地中に埋れて立てる石碑、これ平知章打死のところとなす。今は漸く之字をよむべし、多く壊して他を見るべからず。こゝを東に去る一町老松蹲踞するところ、また一碑たてり。鹽物太郎が碑なり。木村の碑また池中の小丘に建てり。これ等の何ぞしかくこゝに建碑せられたる。之を史上に視るに、平氏一門都を落ち一の谷によるや、忽ちにして、また寿永三年二月七日落城の災を見るに至れり。此日生田の將軍知盛は最早戦ふに力なく、子息武藏守知章（鹽）、鹽物太郎頼賢と共に、落ち行く軍勢の後より汀に向つて落ちにき。爰に児玉党の兵共追窮甚だ迫る。頼賢もと養由李広が弓術あり、矢種を惜まず射て敵兵数多を斃す。敵屈せず党將谷まつて知盛に向ふ。知章危急を見直に前を遮りこれをたをす。生年十有七。敵童怒つて知章に組み遂にこれが首を落す。この間知盛逃走して船に赴き命を完ふす。頼賢憤怒敵童を斬り、奮戦遂に功なく戦没せり。木村は此時の童、知章を撃ちたるものなりしなり。吁、これ等の人々血を呑み恨を噛んで空しく黄土と化したりしを、今は唯一小石碑のこれを標榜するあるのみ。音静けき春雨の夕、微かにそよふ秋風の宵、また恨の焰は燃え立ち、霊魄はこのあたりを彷徨するなるべし。低回数時涙をはらつて去り逆路西に向ふ。

顧みれば後方、一行が今曉踏み来りし山は一段低くして其西北峙立せる絶崖、これぞ是冠者義経が逆落し、とふ鶴越の險、平家一門の恨こゝに刻まれしならむよ。瞑想すれば、このほとり三里の間寿永の昔一門の拠りし処、源家の兵と甲冑互に破れて揉み合ひし様、追ひつ追はれつ馬蹄の響など、髣髴として双眸に映じ来り、見るが如く聴くが如し。あゝ、この辺靈神今猶ほ存するある乎。其の処々

今は耕耘鋤耨せられて、田となり園となりはた丘となりて、往昔の様見むに由なく、唯牧牛の低吼遠き鶏犬の声を聞くのみ。盛者必衰は世の常理とはいへ、かく盛なりしこの一門あえなく壊れぬ。豈一掬の涙なからざらめや。

夫の源平盛衰記に言はずや

東は生田杜を城戸口とし、西は一の谷を城戸口とす。其間三里は須磨の板宿、福原、兵庫、明石、高砂隙なく続き、北は山麓、南は海の汀まで人馬の隙ありとも見えず、陸には此処彼所に堀をほり逆茂木を引き、二重三重に櫓を掻き、垣楯を構へたり。海上には数万艘の兵舟を浮べて、浦々津々に充満たり。吁如何に軍馬の嘶高かりけん。平家物語は乗せずや

一張の弓のいきほひは、半月の胸の前にかゝり、三尺の剣の光は、秋霜の腰の間に横へたり。高き所には赤旗多や打ち建てたれば、春風に吹かれて天に翻るは、唯火炎の燃えあがるに異ならず。

吁、如何に絳旗の照り亘りけむ。

瞑目多時漸く吾に帰り、後軀に韋駄天走り街道より右折三町須磨寺に入る。須磨寺一に福祥の精舎と称し大夫敦盛が遺物を蔵せり。本堂の右方剥皮裸身の枯松横はる。称して義経腰掛松となす。

抑この本堂は慶長七年豊臣秀頼臣片桐且元に命じて再建すとか。山門また古く、高く篇額す。古老伝ふる所あり、昔平家の一の谷城門に掲ぐるところのもの、形舟に模型し朱丹を以て濃彩す、一夕春風酣にして浦波高く騒ぐころ彩せる朱丹落剥す、一門大に畏驚恐駭してこれを凶兆とし放棄せしを義経取てこゝに掲げしと。果して信乎。

精舎を守るところのもの青僧ひとり、其語るや法語相雑へ、全然暗誦的勢流水の落つるが如く、又功みに人を笑はしむ。彼が云ふころの敦盛十六歳初着の鎧は小桜緘に鍬形打ちたる小金の冑、青葉の笛てふもの一行皆之を見たり。信不信は姑くおさまた普通のものとするが如し。而して其由来及他に伝来多きことも吾れ

こゝにいふは蛇足ならむを以て省きつ。この侘敦盛七歳の時写し、てふ和歌もあり。直実が画きし肖像、梅の制札などもあり、又敦盛十六歳の貌を直実自ら刻鐫せし木像あり、其形容状貌生けるが如く真に好個の妙少年。吁、須磨の浦ふく朝嵐いかに烈しう吹き荒びけむ、諸辺の稚桜あえなく散りはて、形見にのこる一条の青葉の笛、いまや須磨の浦回は波漣穩かに、遠き淡路洲のあたり沖行く船の片帆見え、浜の真砂は白う松吹く風を乗せて広がり、夕日に輝きて何処となく華暉たり。あはれ天地を掩ふ水山川岳、この浦のみはいかでかく世を踰へて長しへに恨を乗せ悲みを載すらむ。源家白旗思へばまた怨なきに非らざるなり。やがて涙を払ひ山畑伝ひ一の谷に赴く。到れば一小溪流水潺々両山の凹むところ兩岸聳峙し実に往昔の厳しき状を見えつ。安徳帝のこゝに拠り給ひしもまた宜なり。この閭里の老嫗懇ろに当時の状など説き出せるもかなしく、一里の邑にも此人ありと感謝せられぬ。再び老松数株枝相交り相錯し参差して茂る内裏趾を右に眺めしかど前程の急がる、まゝ往いて尋ねず。直行本街道に沿ふて、敦盛の首塚といふに至る。地上現はるゝところ、丈八尺ばかり苔青く蒸生し白露滑かに梵字の形また一層古めけり。塔下花香の絶えざるは里人志あるもの、手向くる所乎。附近一小茶亭あり所謂敦盛蕎麦を粥くところなり。一行こゝに一盤を味ふ。門前高く見るところ厳しげに且つは勿体めかして「もりはあつ盛味はよしつね千客万来」と扁額せりしは往昔を語るに滑稽めきていと面白く読れき。愈々西に向つて行を進むるに道は須磨の浦回の真砂に瀕して走れり。夕陽漸く西に奔らんとし血を流したるむ如き西山林余芒は引いて東海雲相交るところ、延びて淡路島上に及び、遠き西烟のたつほとり紅葉散るごとく、浦ふく風松葉を叩き、磯打つ波は真砂に咽び、坐る往昔のことを偲ばしむ。こゝに至りてわれ／＼一行こゝを去るに涙あるなり。此の垂ぎ／＼て来る名山勝趾担当するもの大林の君にあなれば、吾が初め譲受けし日記の帳并に鉛筆を渡しつ。時正に午後三時過ぐる比なめり。

絶吟生ずる処

大林 完

風光の絶美を以て、古来嘖々其名を喧伝せられたる、播州海浜の路や、吾人固より歩行の快なるを知らざるにあらず、又全く探るべき旧蹟を有せざるにあらず、然れども時の制限を加ふるあり。文人韻士の為す所に倣ひて、優遊観覧に耽り難きを奈何せむ、一行は乃ち汽車に乗じて速かに明石に至らむことに決し、塩屋より杖を捨て、快然車中に凝眸する人となりぬ、時に午後三時を過ぐる五分なり。磯打つ波の声は、列車の轟々たる響に紛れて、殆んど聞くべからずと雖、遠く碧一色の間より、或は高く或は低く、漸く近づき来りて白沙を洗ひ、噴味の生ずる処、霧の霏ぶが如く烟の起るが如く、復忽ちにして消散し去るを見る。幾片の帆影は饒かに軟風を孕みて、点々海上に来往し、隠然たる紀山淡島の翠黛は、東西遙かに相對して天際に横る、復何等の好景ぞ。垂水に入り海神社を過ぎ、彼の神功皇后三韓征服の後、皇子応神を擁し、京畿に入らむと欲せし際、二王麿坂・忍熊遮ざり拒ぎ、名を仲哀天皇の山陵に托し、之れを築きたりと云へる、五色塚を一瞥し、進みて舞子に至れば、老松陸續吾人を路傍に迎へ、其数幾千株なるを知らず、又幾星霜を経過せしものなるかを察すべからず、枝幹屈曲樹毎に特殊の雅致を存し、舞ふが如きもの踴るが如きもの、或は臥し或は横はり、猛虎の嘯くが如く蛟竜の蟠るが如く、縦横高低參差凸凹、一々名状すべからず。愈進めば愈加はり、緑葉翳勃として滴らむと欲する翠色は、白沙と相俟ちて愈濃に、漁舟風帆亦時に樹間に隱頭するを見る。此佳絶の境に入るも、蹇然たる列車は吾人の為めに一刻も踟躕せず。復須更にして通過し、更に風光波影の相映する間を走る。満眸の風物毎に新にして、去り復来り、曩に模糊として僅かに其姿を認められたりし淡島は、今や吾人の眼前に近づき、既に一行が明石の浦に達したるを知らしめぬ。乃ち駅に着き汽車を下れば、方に三時半に及べり。

此日一行は淡路に航せむと欲す。停車場裡番守の查公に就き便船を問へば、出帆一日三回にして、最終の出帆は刻凡そ五時。尚殆んど一時間半を余せり。因て

其閑を偷み、先づ明石城を見、次に人麿神社に詣せむことに決し、線路を横ぎり北に進む。停車場辺は凡て是れ旧城廓内に属せるもの、歩むこと未だ幾千ならずして、巍乎たる墨壁は既に吾人の前に起れり。此古城や、元和の頃小笠原忠恵の築く所となり、後に松平氏の八万石を領して此に居を占めたりしもの。堀を越え稍進み門趾に達す、両側の石壁屏風の如く、僅かに旧時の壯觀を止めたり。門趾を過ぐれば道乃ち左に転ず。右側池あり。長く路辺に涉り、之れを隔て、地の稍曠然たる処、雜草茂り雜木立ち、葉落ち色移り、秋風蕭颯として自ら廢林荒野の景なり。左側は松樹叢生し、森然枝を交へ、高館之れに次ぎ、門関路辺に嚴乎たり。札を読めば是れ即ち簡易農学校にして、館後遊戯の場樹間より纔かに其広袤を認めらる。坦路窮して坂路となり右に上る。両側古木数幹斜々として横はり、密篠と榛荊と其間を綴ち、殆んど一步を入るべからず。之を上ること数歩にして石壁前に当り路左に転ず。石壁に沿ひ右すれば四囲寂として絶えて人影を見ず。亭々たる老松左側に茂り榮え、緑葉鬱々石壁の高処と相接して、天日為めに光りを漏さず、樹蔭昼尚昏くして、蟋蟀の声落葉の堆裡より来る、復何等の荒涼ぞ。一行は此に至り、武門の威天下に赫々たりし当時を想起し、其変遷の甚だしきを觀じ、悵然悄然、歩漸く遅々たり。樹蔭を出づる処復一転して右に折れ、坂路の稍急なるを上る。左は則ち崖に臨み、小邱尺前に起り、之れを越えて群山遠く北天に連綿たるを見る。右は則ち石壁なり、之れを上ること少許にして上に出づ。松樹幾幹亭々蒼々、天を衝き雲を凌ぎ、牙然たる槽地（隅カ）の三隅に起り、東北の一隅之れを缺く。皆壁崩れ骨露はれ、殆んど見るに忍びず。之れに憑りて臨めば、石壁恰も削るが如く、叢林園池脚下に連り、眺望始めて曠闊に、瞭然として歴々指摘すべし。更に眸視を南方に放てば、明石海峡の波光は市街を隔て、碧染むるが如く、淡島の嵐色亦之れと掩映して翠愈濃に、白帆の点在せる漁舟の散出せる、更に一層の趣を加へ、曩の悽慘なりし思は全く忘却せられて、胸襟俄かに是なるを覺えたり。意ふに徳川氏の此に譜代の臣を封じたる、夫復故あるもの、如き歟。

今此地の形勢を察するに、南は纔かに一水を隔て、淡島の横はれるあり、北は連嶽の層疊起伏して控ゆるあり、正に是れ中国の一要所にして、西に芸州あり又薩州あり、島津氏の如き毛利氏の如き、其東上せんと欲するや、必ず通過せざるべからざるの処、之れに備へ之れを拒ぐに於て、此地最も等閑視すべからず。箱根山の関東に於けるが如く、鈴鹿峠の京師に於けるが如く然り、松平氏の所領たりし所以、豈偶然なりとなさむや。立つこと幾分ならずして途を東に取り、牆壁に沿ひ歩を進む。両側は凡て叢林、次ぎて左側に池あり、面広きこと幾十間、蓋し是れ往時城主の舟遊宴樂せし処。進み復進み、漸く寂寞の境を離れ、坂を下り復坂を上り、小祠あるを見る。額面明石神社と号せり。是藩祖直明の靈を祀れるもの。祠を過ぎ坂を下り、迂余逶邐して園畝の間を通じ、小邸に至り、路復坂となる。側らに墓碑參差たり、是れを上れば果然寺あり。門に至り額を仰げば人麿山と号せり。是れ人麿神社の別当月照寺にして、吾人一行は即ち其西門に來りしものなり。門を過ぎ庭に入る。庭甚だ広からず、中央に柵を設け古木一株を植え、標を建て、古八房の梅樹と名せり。又其由来を示せるあり、之れを読めば是れ赤穂の義士間瀬久太夫正明遺愛の樹にして、元禄の比其同志の士相集まり、主家の復讐を謀るや、大石良雄等と共に人麿神社に祈請し、信を致して献じたるもの、星霜を経ること今に百九十五年なりと誌せり。枝枯れ幹朽ち、高さ間余に過ぎず。一行の会中て此に賽せしものあり。時や方に三伏の候にして、炎威赫々日光の熾くが如き処、一々枝幹を積み、之れを曝したりと云ふ。因て之れを検すれば明らかに其痕跡を認めらる、抑々何等の兒戲ぞ。庭の東辺又門あり、是れ人麿神社の境域に入る処にして、伝ふる所に依れば、此社は元小笠原氏の明石城主たりし頃、城中に祀りしものにして、後此に移し月照寺を以て別当に為したるなりと云ふ。門を入れれば祠堂碑あり、高さ凡そ二丈、亀形の石上に立てり、是れ寛文四年藩主松平信之の建てたるものにして、銘は林道春の撰なり。碑の東数歩を離れて桜樹あり、名けて盲杖桜と称せり。昔時盲者あり、筑紫より來り、神に禱り歌を詠じ、

目忽ち明なるを得、欣然拝謝し、携ふる所の杖既に要するなきに因り、之れを地に挿みて去りぬ。杖や桜樹の枝を以て作りしもの、後に至り芽を生じ、遂に花を開くに至れるなりと云ふ。其歌に曰く

ほのくまことあかしの神ならば予にも見せよ人麿の塚

標記して之れを詳かにせり。之れ果して信乎、吾人は其妄誕なるを斷ずるに敢て躊躇せず、古八房の梅樹と共に自ら一笑に附せられたり。盲杖桜と祠堂碑との間、此に方りて巍然たるものは是れ即ち本社にして、中に人麿の像丈七寸なるものを安置し、之れを祀れりと云ふ。抑々此に之れを祀れる所以のものは何ぞ、其死処の如きは世既に定説あり、固より此地にあらざること明なり。彼の島隠れ行く舟の詠や、人麿の詠として古來人口に膾炙せる所、是れ之れを祀れる因乎、將他に因る所ありて然る乎。今此詠に就きて考ふるに、亦其疑はしき所あるを認めらる、曰く是れ人麿の詠にあらざるもの、如きを以てなり。夫れ人麿が長所とせる所は、風姿の雄健なるにあり。情意の真率なるにあり。情意真率ならむを欲し、風姿雄健ならむと欲すれば、随て詞華素朴、巧を弄すること能はず。故に其調節や自ら流麗を缺く。之れを以て人麿が詠ぜし所のもの、概ね佶屈なり、又驚牙なり。

天ざる鄙の長路ゆ漕ぎ來れば明石の戸より大和島見ゆ

と詠ぜるが如き、

灯火の明石の大門に入る日にや漕ぎ別れなむ家の辺り見で

と詠ぜるが如き、皆是れを証して尚余あり。然るに島隠れ行く舟の詠たる、之れに反して調節流麗に、詞華亦巧に、優婉なること平安朝の歌人が詠ぜしものに似て、情意稍真率なるが如しと雖、風姿甚だ雄健ならず、且つ夫れ古今集中此詠を載せて、作者不詳となせるを奈何せむ。又其ほのくの用語奈良朝時代のものならざるを奈何せむ。是れ吾人が此詠を以て人麿の詠にあらずとなす所以、契沖の如き真淵の如き、亦夙に是れを論ぜり。其詠にあらざるものに因み、其靈を祀るは是れ理なきなり。敢て問ふ如何の故ぞ。勿々賽し了り南の門を出づ、是れ正門

なり。門外碑あり芭蕉の句を刻せり、曰く

蛸しれやはかなき夢を夏の月

右に石階あり級数幾拾、是を下り華表を得、左側に泉の湧出せるを見る。是れ亀の井と称せるものにして、清澄鏡の如く、掬し試むれば心気自ら爽かなるを覚ゆ。曩に吾人が城内に入りしより此に至るまで、時凡そ一時間以上に及び、便船出帆の刻漸く迫らむと欲す。乃ち歩を早めて去り、南に進み西に転じ、街に沿ひ復街を横ぎり、曲折数回にして思案橋に出で船町に入る。是れ便船出帆の地なり。

吾人の一行に先だち、中学生一群の既に来れるあり、是れ姫路の中学生将に和歌山地方に航せむとせるもの、吾人一行に取りて亦好同伴なりと云ふべく、直ちに相混じて前後船に上る。船体や大ならずと雖、時既に夕陽にして、海上風収まり波穏かに、錨を抜き岸を離れ、漸く出づるも敢て動揺の苦を知らず、又潮流の急なる処たるを感じず。団々たる落暉の影は今や万項の波間に没せむと欲して、半ばを紅雲の飄颻たる裡に包まれ、余暉を波上に投じて恰も銀屑を布きたるが如く、既にして没し了るや、満眼蒼然として風物空しく、模糊たる遠汀曲浦は漸く霧裡に消え、東方森漫たる茅奴の海上、亦水天一色にして殆んど弁別し難からむと欲す。進みて淡路に近づけば、自皚然たる江崎の灯台、霧裡より纔かに其高さを現はし、松尾崎の叢林は既に陰々たる夜気に裹まれ、砲墩の所在を目索すれども得ず。松尾崎一帯の海浜は、即ち彼の定家卿が

来ぬ人を松帆の浦の夕なぎに焼くや藻塩の身も焦れつ、

と詠^(詠)ぜし処なりと云ふ。松帆と松尾と其称の異なるは、後に転呼せるもの乎、将全く其地を異にせる乎、暫く疑ひを存して識者を俟たむ。明石と松尾崎と其距離や海路二十町に充たざるもの、如く、彼の麿坂・忍熊の二王が、綱を海中に張りて神功皇后の舟師を遮ぎり、此間なりと伝へたり。吾人得て其蹟を確かむること能はずと雖、曩には車中より五色塚を一瞥し、今又此海上を越え、当時の謀略尚眼前にあるが如く、薄暮の感と共に転た悽愴の思を加へたり。既にして岩屋港に

着す。時方に五時半なり。中学生の一群は尚船の送るに任せて、遠く烟波の裡に其影を没し、吾人一行は陸に上り、直ちに宿を求めて海浜の一旅亭に投じぬ。半宵亭上に立ち、欄に倚り眸を放てば、渺茫たる海上夜色遠きより渉り、一天の浮雲絮々然として揺曳する処、長月十七夜の月華朦朧として光を漏らし、右方絵島の影烟霧の裏より纔かに現はれ、暗黙として色真に墨の如く、其名を偽らざるものに似たり。明石地方の湾浦は左に方り、又模糊として微かに其処を認めらる。知らず彼の湾浦、誰か此月に対して夜愁を惹かるしものぞ。

瓊予の雫^(雫)

伊東 増衛

日は九日と進み、一行は島国征旅の身となれり。暁に臨む海上の景仰ぎ瞻る崖頂の旭陽何れも新彩を放たぬはなく、吾等心気の晴快殆んどいはん方なし。例刻旅宿を出で、一行は先づ当岩屋の旧家井戸弥太郎氏の邸を訪ふ。是学者間或は礫馭廬島として目せらる、此地絵島に関して伝説旧記の存否を徴し之あらば遺憾なく聴聞し閲覧せんと欲せしに出づ。然るに主人不在にして待つ事時余なりしも猶その還るに会せず一行は前途の急がる、まゝ、その後を待つに及ばずして辞し去りたり。次で大社教布教師菊田氏の宿舎を叩き氏に尾従して始て絵島に向ふ。同氏は神戸の人職務上石屋に来る年に数回、能く当地の事情に通ず。一行の明石より此地に渡れる際舟中談笑の裡に知己となり、上陸後は宿止の労を煩はせしのみならず當日亦自ら任じて案内者となり、更に土民をして先導たらしめられし等は一同の感謝に堪えざる処なり。絵島に至るに先ちて石窟を尋ねぬ。此処は絵島より五十歩許りの海浜古城山の崖下にあり、浦の名ある実に此石窟あるによりてなり。往古は石窟甚だ広かりしに天正中菅の一族古城山に城づくに当り発窟せしより終に今日の狭隘に至らしめたりと云ふ。窟中に小祀あり、祀に向ひて右側に芭蕉の刻文建てり。浦人は呼びて石楠尊といふ。或伝ふ石窟は伊佐諾命の幽宮なりと。蓋し旧事記日本紀等に幽宮と、日之少宮とを別けて記せしより多賀を少宮とし幽

宮を以て石窟に擬したるなり。この外岩窟に関して吾人は明石の岩屋神社との関係、諸冊二尊の神續にかゝるもの等二、三の伝説を耳にし得たりと雖限あるの紙上させる要なしと見らるゝまゝ、省略しぬべし。凡て此一帯の海浜を称して石屋浦と云ふ。汀渚に立ち遙かに眸を放てば一葦を離て、烟霞杳靄の裡に、明石・須磨を望み翠黛語るが如く、風光掬すべく、古人探て以て詩歌の材料に供せしもの真に故なきにあらざるなり。近くは石窟に対して石磯あり之を鉾島、鵲島と云ふ。其南に隣るは即絵島なり。絵島の西南には大和島あり、其他弟島・棹島・鳥島・三対馬等、或は島にして或は名のみなるあり。何れも此地の景趣を多大ならしむるものにして伝説に依れば亦皆諸神の居給ふ処なりと云ふ。又此浦至る所に種々の砂石あるを見るなり世に岩屋礫の名ある即亦知るべきのみ。一行はやがて目的とする絵島に着せり。そのこゝに至る歩いて渡るべく島の絶頂亦攀て登るべし。全体高さ十間周回四十間余の崑石の波に洗はれたる洗処画文をなし黄色を帯びたる球形の石点々巖面に阻まれ出でたるは他に見る能はざるの奇観とす。巖島に老松二樹海風に嘯きて枝を垂れ、そが許に方形の石塔建てり。幾多の風露をしのぎけん唯一面に央ば磨滅せる梵字様を認むるあるのみ。或は神代字なりと伝ふるあれど先哲の確証存し吾人亦実見してその梵字なること毫も疑はず、且つや石塔の柱身に刻せられたりとせばこの点より云ふも後世のものたること自ら明かにして他に其類を採むる亦決して難からざる可し。但世間此の一事に係はりて絵島を自凝島にあらずとせば之れ速断の過に陥るものたらずんばあらず。何となれば絵島を自凝島といふの説たるこの石塔文字に由来せる新説にあらざればなり。古来自凝島に就きては諸説紛々未だ確説なきなり、又事実の徴証すべきものなければいかで己が浅漏なる学識を以て憶惻を逞ふするを得んや。今は唯是等諸説を照会せんか。忌部正通口訣に此島は在淡路西北隅小島也と。亦大神貫道は淡路の西北の隅に在て俗に胞島と呼ぶものはなりと。其論拠とする処絵島は胞島の義にして神代紀に以礪馭島為胞とあるを引証するにあり。釈紀に引たる私記には在淡路

島の西南角小島是なりと之今日の刈藻島にして或は大園とも云ふ。此島を古く遠の島と称するは正しく自凝島の異説なるべし。公望私記におのころ島とは自ら凝る義なり、今淡路島の西南に見在する小島にて俗尚其名を存せると云へるは符合せり、今大園と云へるも皆転語ならむとは此説を是認するもの、称ふる処なり。亦或説に今在淡路国東由良駅下と、これ沼島にして論者は旧記に自予未垂落之塩累積成矛盾とあれば沼島は沼子の島の義なるべしと。以上に反対して説を成す者は曰く、自凝島は世界根元の地にして諸冊二神其島に殿舎を作りて住み給ふとあれば絵島・沼島の如き叢爾の島にはあらざるべし。按ふに、釈紀に此島國中柱也即其矛盾為小山也とある小山処在の地たる三原一郡の地こそ太古の礪馭島なれ。三原は三柱の略言にして三原郡幡多村に先山と云へるあり、地形より云ふも瓊矛の化せる小山なる事明かなり。今日自凝島の名を存せざるに至りしは孝徳天皇の改制の時津名・三原の二郡を定め国造を以て郡司として三原郡に淡路国府を置かれしかば、終に自凝島の名は空しくなりて幡多の一小地なる小山縮約せられたるなりと。請ふ見ん亦取捨を輕しくせられざることを。当日亦当地の神職某菊田氏の紹介によりて来談せしが其説明の物足らぬ心地せられしは前路を急ぐ一行の心能く之を嚆味するの猶予なかりによるならんか。此処を辞せしは午前十一時にして実に当日行程三分の一時間を費したり。転じて岩屋神社に至る、当社は絵島の南に坐す郷社にして天地明神とも云、式内に列す、旧くは祈年国幣に預かれる由、全社の旧記めけるに見ゆ、この旧記の如きも菊田氏の手を経て帰館後徐々一読し得たるもの、之に依れば創立は崇神の御宇にして、当時此浦の岩屋の上に齋き祀りたるを、神功皇后三韓に御師を出させ給ふに当り、播磨より御船を此浦に向け三対山の頂に登り御祈誓あらせられたる後、風波の静まるを待ちて纜を解き給ひしが凱旋まし／＼ける時も再び登らせ給ひて御神を岩の上より三対山に移し奉養し給へりとか。後足利義植当国にありて三対山に城きしかば再び本社を還し奉りしが現今神社の地にして、社殿は寛年中国主蜂須賀家にて改造せしものなりと伝

ふ。旧記其他の宝物は源平の戦乱に凡て失ひ唯什器に古劍古鏡を蔵するのみ、祭神は国常立の尊に諸冊二神を配祀せりとも月読命とも又伊都之尾羽張神ならむとも云ひて確ならず。居る事暫し、其より海辺に沿へる一条の客路をたどりて急ぎ行けば板屋と云ふに出ぬ。時に零時二十分、未だ予期の半路だに踏まざれば或は前途の如何を氣遣ふ者あり、されど詮なしとて空腹を充たし、再び出発せし時は殆んど一時なりき。行く／＼風光の美を賛しつ、南する里余にして刈屋と云ふに達す。刈屋より志築間(志)は特に見る可き者を存せず、且つ今日の行程果して踏み得るや否やの疑念ありしかば、此処より船の便を借りて志築に出でんと欲し、一行先づ大坂商船会社支店を問ふに午後五時ならでは便なしと云ふ。転じて共立商船会社を尋ぬるに午後三時に定期の汽船ありと云ふ。終に此方を択びぬ。抜描(描)前未だ猶予ありたれば有志を募り疾走して妙勝寺に至る。寺は刈屋より二十四、五町西南に寄りたる釜口村の山腹にあり、法華宗にして淡路に於ける古刹なり。一見旧觀を呈すれど堂宇さして壮大なるにあらず、領内亦広しとなすべからず。所蔵の遺宝には古器物旧記の史料に資すべきもの頗る多しとき、しかば僧房に至り是が閱覽を請ひしも住寺不在何等の質す処もなかりき。伝へ云ふ建武三年足利尊氏西国に没落するの途次、船を此浦に泊むるや遙山上の灯火を瞻み俛みて問ひしに里人妙勝寺なりと答ふ、尊氏吉兆としていたくその名を悦び、則ち上陸して寺に詣り太刀一腰を寄附せり、後ち帰京してよりも彼れ屢々願文を籠し事ありしが其書何れも宝物として現存するよし、吾人只一見を遂げざりしを遺憾とす。やがて汽船抜描(描)の期刻迫まりたれば眺望を逞うするの暇もなく蒼皇坂を馳せ下り本路に出で海浜に会集す。是れ此浦にて共立会社より差遣の短艇に乗り以て本船に移らん誓約ありしが故なり。然るに待つ事久しうして黄昏近きにあらむとすれど短艇の影だに認めず、遠く刈屋の海港を望むも亦一汽船の其地に来りし氣はいなし。一行は大に困却し或は是より直進洲本に歩せんといきまぐものありしかど、已に切符を手にしたる後ちなれば其議も成立せず、殊に一行中刈屋に残るものもあり

たれば一行は痛足を運びて道を戻しぬ。刈屋にありし一隊も策の採るべきなく百方配慮しつ、あるの時なりき、恰も好し水天彷彿の間黒烟を吐きて急馳し来る船体を認めたり、就て問ふに大坂商船会社の汽船なり。先きに約せし会社も吾汽船遠からず来るならむなどいへど、已に営利的無責任の言にあらざるかの先入心一行の胸裡を支配したれど、衆議の向ふ処改めて商船会社の方を撰ぶに決したり。漸くにして汽船着港の頃報と共に短艇に送られて本船に移る時に夕陽西に落ち暮色蒼然として海面を閉せり、汽笛一声淡靄を破りて進行を始むるや、一時余にして一行は志築旭屋階上の客とはなりぬ。当日の行程僅々七里にして時を費すこと終日、而して予期の地に達せざりしは甚だ怨あるに似たりと雖ども容易に踏み能はざる、又得てきかざるものは吾人の耳目之に接して彼を補ふに優なり。志築(志)に着くや地理に暗く且つ夜中なりしを以て警察を煩はせしに、懇切なる警官の斡旋に由て止宿するを得たるは一行感謝の外なし。

幽宮靈跡

額賀 大直

畏しや皇大御祖の命が、修理固成の大御業の御手初めとして、営み坐せる淡路の国はしも、其形こそ小さけれ、山川の清くさやけく、廻の磯の妙に麗しく、眺望尽せぬ可憐国なることは一度播磨の海を船渡せし人の見知れる所なるべし。然る些少けきことのみにあらず、猶や此国はも我が大皇国の固めなりけり。見よ由良の崎は紀国の加太の崎と相向きて浪速の海の鎖を固め、南の方門崎は阿波の孫崎に臨みあひ鳴戸の瀬戸を作りて播磨の灘を守るに非ずや。実に近畿の要とも云ひつべきは此島になん。あはれ大皇祖の命の修理固成の御心しらひの奇しさ尊さは此小さき島にだも斯の如し。況むや我が大八洲の国内に普き大御功績は如何計りなるべき。尊しとも尊しや。己等は今此の島の東の磯辺を経廻りて志筑の港にあり。いで之より大皇祖の鎮り坐せる幽宮に詣でん。

十日夜をこめて騒しり合ひ、宿の主を呼び一の宮への道の旧跡など問ひ尋ねて、

午前四時といふに立出づ。立待の月西の山辺に影さえて四面の景色置く霜の色に似たるも朝風の膚寒きにはつき／＼し。此町には志筑神社とて式内の御社も在る由なるが訪ひ詣る事もえせで、ひた走りに一の宮への道を辿りぬ。町を出で、四、五町の程に、静の墓といふ物の在るを兼ねて聞きしかば尋訪ひぬ。墓は道の右手なる畔にさゝやかなる堂と○ふも名のみ小屋の内にあり。先づ扉を押開け、灯ともして視るに花崗石の如き石もて刻まれたる塔二基並び立てり。何れを静の墓と云ふにや。彫れる文字とては只梵字のみにて、見分くべき由も無し。思ふに此は何時の代よりか誤伝へたる物にて他人の墓なるべきか。然なくば静の遺物など持て来て埋めたるものか。將に供養にても営みけん跡か。然るにても二基并べて建つべき理なし。此の辺に詳き口碑(口碑)伝説も存らばと思ひしかど聞くに由なかりしは飽かぬ心地ぞせし。

此処を出で、二里が程は訪ふべき古跡なども無く、只山を越え川を渡り畔に伝ひて朝餉の頃河井(河合)といふ村に着きぬ。此処にはおのれ等の訪尋ねずてはえあるまじき、早良親王の御墓なるべしといふもの、ありけるなり。河井村の西北多賀に隣れる田圃の間に、小高き円山を為し、其上に古松もの古りて立ち、形ばかりの正倉を存する所、是即ち其御墓なるべしと云ふ処なり。到着きて其周囲を歩足以て測るに四、五十間も有りなんか。土質の砂の如く粘り無けんばにや。後部の方など土崩れたる所は松の根五、六尺も露はれ、頂きも年経しまゝに土の壊滅せし物と見え二、三尺は松の根の露はれしやう見受けられぬ。正倉は近き頃建てたるにやさまで古し共見え又故あるべくも思はれず、土俗之をハイタイ様と称ふ。慶帝の義か、將た廢太子の略か。兎まれ此のハイタイといふ事は是此塚の疑ひの出る所なり。

あれは一度は天が下の大政をも取統べ賜ひし桓武天皇の皇弟、然かも日繼の御位にも備はり坐すべき御身の、はかなき臣等の争ひより遂に御身の禍を招き賜ひ、此の孤島に敢無くならせ賜ひしは、今より忍び奉るも畏き限り取りけり(なり)。然れば

後に崇道天皇の御諡号を奉り大和の八島に改めて葬り奉りしも実に去ることなりけり。然はあれど其八島に葬り奉りし先の此の淡路なる御墓の所在の、今に世に明かならぬは飽かぬ心地ぞせらるゝ。今、日本紀略を按ずるに、

是日(延暦四年九月廿八日)皇太子自内裏歸東宮、即日戌時、出置乙訓寺、是後、太子不自飲食、積三十余日、遣内卿石川恒守等、駕船移送淡路、比至高瀬橋頭、已絶、載屍至淡路葬、云々、

又同書に、

庚子(延暦十一年六月十七日)、勅、去延暦九年、令淡路国死某親王(崇道天皇)、守冢一烟、兼随近郡司專当其事、而不存警衛、致令有崇、自今以後、冢下置陸、勿使濫穢、

とあるのみにて、淡路国の何処に葬奉りしや知る由も無く、水鏡にも何処といふことなければ、今は書に就きて考ふべき便りなし。只若し此の地にハイタイなど伝ふるを見れば、些かは拠所となるべき口碑(口碑)もあらんかと此所の人に尋ねしに、此地の医師松本竜庵てふ人は父祖の代より此の塚に就きて、貴人の奥墓にやとの疑ひもある由なれば、此人に尋ねよといふ。他の人々はこゝより多賀の御社に急ぐを、己と奥村ぬしとは二人して松本氏を訪ひぬ。先づ名刺を出して音なふに今不在の由に失望せしが、暫して氏は帰り来りぬ。年の頃は五十路計にや、半ば白髪なるが出迎へて茶など進め、快く己等の問ひに答へ呉れぬ。されど其の残れる確なる伝への無きには心落ちしぬ。其談るを聞くに氏の取れる所は、早良親王の御墓なるべしとはあらで、淳仁天皇の御陵なるべしといふなりけり。即ち次の如し。

此塚昔より由ありげの形せるが怪しくて、正徳の頃より調べなどもありしこと、我が父祖の口づから伝へらるゝ所なるが、其折の結果は如何なりけん知らず。然れど其後も我が父祖は、廢帝即ち淳仁天皇の御陵なるべしとの考へより、頻りに証たるべきものを求めたれど、はか／＼しきしるしも見出ず、

彼の中野安雄が常盤草作る時此の地に来りし折も、烈しく論ひ、中野氏の早良親王の御墓なるべしといふはいはれなし、何しに親王をばハイタイとは云ふべきぞ、とて中野氏に反対せし由なるが、一度常盤草の淳仁天皇の御陵は今の所在地即ち三原郡加集なることを伝へてより、洲本の人松花が著せる歴史日記も、又同じく洲本の人碧海が物せる淡国通記も、靡然として之にならひ此のハイタイの塚を、淳仁天皇の御陵なるべしと云ふ者無きに至れり。然れば文久三年に彼の地は淳仁天皇の御陵と定まり、此の地は何たることも無くて今日に至りぬ。

と。然れど今思ふに、親王をハイタイと云ふいはれ無しにては論ひ足らぬ心地ぞせらるゝ。中野氏の説の如く、よし親王たりとも後に諡号奉られてよりはハイタイとも申しつべし。今仮にハイタイを廢帝として、此の小さき島の内に、時こそ異なれ同じく流されさせ賜ひしやごとなき際の二人坐し、事なれば、或は後の世の人のまかひ合せて伝へたるも知るべからず、然らずて又ハイタイは廢太子の伝へひがめと見たらんには、親王の御墓といふ方近きには非じか。兎まれ角まれ怪しの名なりや。猶己は此の塚より掘出し、物など無きかと尋ねしに、二十余年前壺壺つ掘り出し事ありけるが、今如何にしたりけん失ひぬ、又五、六年前にもそれと同じ形せる壺掘出ししが、そも亦童べなどの持て失ひて今は残れるものなし。掘り出しものとはそれのみにて父祖の代より疑ひ晴すに由なく、証たるべき物なきを如何にせん。只今は此の村にて三人の此塚守る惣代を立て、己も其一人として後の考へを待ち居るのみと。此の塚今考ふるに由なき如何にともすべからざるものから、かゝる名のありて、かゝる形して存るは松本氏の考へのごと、若しは淳仁天皇の御陵なるべきか、將た早良親王の御墓か、さらずは又やごとなき他人の奥墓か、明かさまほしさの心残りぞせらるゝ。

松本氏に分れて畔道伝へに五、六町程して、此の国の一の宮、我が遠つ御祖の鎮まり坐せる多賀の御社に詣づ。老松こぶかくしみさびて、見るからに尊くそゝ

ろに御功德もぞ忍び出らる。先づ大前に額づき終へて社務所を訪ふ。前に到れる人々は社人に就きて何くれと問ひ、或は示されし書籍等より抜き出で、物に書きつくめり。出で、もてなし賜へるは禰宜藤田氏等にていと懇なり。其示されし書籍の内に多賀村味地草と題する小冊子あり。此は徳島藩の役人何某か調べ出でし物なる由、これに依れば、元此の地は多賀といひ来れるが、何時の代よりか神宅村と称へて徳川の初め頃迄はしかいへりしを、元和頃再び多賀に改めたり。されど猶万治中の古記には神宅と書し物も見え、今も神宅といふ畝号残りといふ。

そも此御社に斎奉れる大神の御功績は、誰しも知れる所にて国土経営の大御業は云ふも更なり、盤根木根立草の片葉に至る迄、其恩頼に依らざるは無く、蒼生の日に月に榮え行くも亦御恵の外ならんやは。然れば此洲に幽宮を構り寂然長隠坐しまし、より、世々の朝廷の崇敬もいと厚く、三代実録にも

貞元（寛元）年正月二十七日甲申奉授淡路国无品勲八等伊佐奈岐命一品、と見え、又延喜式には

淡路国津名郡淡路伊佐奈岐神社名神、大

とも見えたり。彼の味地草によれば、元和七年領主千松君より社領寄附のことも見え、其折の文書も今に妙教寺に伝はれりといふ。猶味地草に依れば、此の御社に属したるもの、撰社、天照大神月読尊二神相殿、楠御前祭神、子御前祭神、末社、荒神祠在乾、鹿島在本殿後祭、神武甕稻神、閔神祭神豊磐窓神等あり、今は此の外に竈神社、根神社、佳江神社、左右神社、など境内のあなた此方に祀れるが見ゆるは其折調べ漏らし、にや。又同書には鐘樓の存りしことをのせて、飛驒の匠の作と伝ふる由を云へれど、今然る物無きは火災にてもありしにや、また後に取毀ちしにや。藤田ぬしの言によれば、今の本殿の在所も明治に至りて城内（城カ）を広めん為、昔の在りかよりは十余間が程北の方に移したりといふ。然れば城内の建物など昔と変れる所あるは自らさることなるべし。又当社には元久二年四月の庁宣もある由なるが此も今は三原郡加集八幡護国にあればとて、見ることを得ざりしは残り惜しき

心地ぞせられし。

此の御社を去る南の方約三町ばかり、妙教寺と云ふに、戦国の代此地を領せし田村左馬頭の墓ありて、此地の人は坂上田村丸の墓と誤解し居る由、又此の寺には其田村の系図及び多賀の社領寄附の文書も存(在り)りと聞きて、行きて訪ひたくは思ひしかど、はや時も甚く移りたればとて行かず、此処を辞してひた走りに洲本に向ふ。其の道三里には余りたらんか、二里ばかりか程は見るものもなく、只一筋の山路を這りたりぬ。人々の内には歩みながら昼餉たうぶるもあめり、嗟声に軍歌うたふもあめり。斯くして大町、木曾などいふ村を過ぎて平安といふ所に出でぬ。此所は此国の東に向へる海辺の漁村なるが、此処よりは洲本迄一里半といふ。其の間の磯伝へ、松の井木道に添ひて面白く、打寄する波のさやけさ、汀の真砂の清らけさ、今まで山路のみ越え来し眼には一入をかしく、打ちわたす紀国の山々呼べば答へもしつべう横はるに、沖の白帆の影三つ四つ二つ行きかふは、眼もはろ／＼に心も広らなりや。彼のパノラマてふ物の暗き室を通して後、広き海山の景色を人の眼にひとときは鮮かに見せしむる理に同じく、己等の眼を如何に深く喜ばしたりけん、人々の口々に小舞子とも云ひつべしなど、の、しり会ひしも無下の強言にはあらじとぞ覚えし。磯辺に沿ひて洲本に急げば、行く手の景色愈をかしく、こゝしき巖角幾重時つ所、淡く濃く染め渡したる紅葉の照りあふに、岩に碎くる浪の華の白きなど、取り集めたる眺望なりや。行きゆきて洲本もはや十余町といふ程より、眺入たる町の景色又えり捨てん数かは、幾千本の老松は生垣のごと木深く茂りあひ、町より続き出たる蜃か屋のたゝまひに臨みあひたる様、画工みも筆を抛てや哭らん。此の地はもと蜂須賀の臣稲田氏の代々領せし所にして、人口の多き、町の繁栄、共に此の国の一位を占むべく、従ひて亦己等の求むべき歴史上の旧物古跡には乏しからじ。されど己等は今日福良迄との予定も棄て難うて、何一つ尋ねもえせず洲本の地には分れを告げぬ。

波のあなた

伊東 増衛

洲本より一行は二隊に分れ、一隊は腕車に鞭ちて前駆し、一隊は馬車を馳らせ後殿す。前者は未だ勇あるの決戦士にして尾崎教授之を率ひ、後者は已に起つ能はざるの負傷士にして清水教授之を率ひ給ひ、齊しく西する二里にして広田村に達す。時に三時半、此処にて乙隊は馬に秣ひ、間もなく直進福良に向ひしが、甲一隊は此処より馬車に乗替へむ計画なりしを以て止まる。此間天明義民の碑を吊ふ。碑は路の右方五町の山麓八幡宮の側大宮寺の境内小高き処に建てるなり。途に一老夫あり、就て問ひしに、鍬を抛ち涙を振ひて具さに当時の事歴を語る。其状悲然として同情を求むるが如く、亦哀訴するに似たり。黙聴たりし一行の胸中湧然佐倉の義民を想起し早卒老夫に謝し去り走りて八幡宮に一拝し、転じて丘上に至れば果して天明志士記念碑（正三位勲一等侯爵蜂須賀茂昭書^⑤）あり、其に隣りて横臥せる石碑あり。石工の刻文最中にして誌銘央は刻せられ央は紙面の俣なり。就て一見綴読すれば板垣退助伯の嘱せし処にして簡明に義拳の蹟を述べしものなり。初め蜂須賀氏其臣某を以て広田に宰たらしめしが天明の饑饉に際し餓卒野に満ち飢人地に倒るゝの悲惨なき能はざりき、然るに領主や豪遊放逸敢て之等を意に介せざるのみか倭人を嬖し終に縄税を課して人民を塗炭に苦む。此処に才藏、清左衛門、の二人は同村頭要の位地にありて徳望高く衆の属慕する処なりしが失政を黙視するに忍びず、身を以て領主に哀訴し、軽減を強請したりしかば、領主其無礼を責め更に蜂須賀氏に訴へて、二人は勿論之に与する百十七人の死を仰げり。蜂須賀家にては之が情実を探知し軽減の議ありしが、其旨未だ達せざるに際して領主は義民等を捕へ獄に下し終に死に至らしめたりと、是を義拳の概略とす。一行は以上を知り畢りて元きし路に復帰し馬車を待てども来らず、乃焦がしさの余り前進を始めしに、途にして乗車するを得、淳仁天皇の御陵に向ひぬ。己と額賀氏は車を駈て養宜村字土井に至り、細川氏の跡を訪ふ。己れ当日担当の任ありたれども脚気の余波ありて進退意に任せざりしにより、この際額賀氏の同

行を請ひ委曲見問^{（問）}の勞を氏に仰ぎたりしは重ねて此に謝する處なり。此土井は淡路細川氏が世々居城せし跡にして城跡に以久社、若宮の二祀あり、細川頼春を祀る側に庵あり、入りて問ふに老嫗ありて事弁ぜず唯だ之より東一里中条村鮎屋五瀬と云ふに細川氏累代つ墓所あり、土人踵を累ねて常に香花の絶ゆるを見ず、当地の二社も彼処より頼春公を分祀せしなりとの一事を聞き得たのみ。境内尚ほ昔日の築地庭園の老松所在散見せらるゝありて、転た追想の念禁^{（禁）}する能はざりき。已に黄昏人影稀なるの時なれば、転じて国分寺に馳せ向へり。廊門をくゞり正面の癡類せる本堂柱傾ける廻廊とを望みては、誰か盛衰常なきを追及せざるものあらむ。庭内落葉に任せて掃はざるもの、如く、青塚突々苔滑かにして其何人の眠れるか知るによしなく、老松独り晚霞にむせびて、昔日の榮を語れり。已にして暮色四隣を覆ひ吾人の前路を促す益々急なれば走りて寺背に廻はるに、僅に風露を凌ぐに足るの僧房を認む。案内を求めしに住僧不在にして借婦一人あり。問へど語らざれば由緒を慥むる能はず、恨みを残して去る。門外に出づれば車夫淋げに毛布を纏ひて立てり。飛び乗るや否や二基の車は風を切りてひた走りに走り出しぬ。炊烟稀なる孤村を幾度か縫ひて県道に出でし時は全く夜となりて月東山にかゝりぬ。其より右折順路に添ひて疾駆する一里、加集村にして下車すれば恰好し甲本隊の一群御陵参拝を了へて海道に出づるに会せり。御陵は村の左方数町の膝中にありて、南北七十間東西二百間高さ六間許の丘なり。樹木鬱蒼蔽寂たる處、真に崇敬の威あり、往時は丘上に牛頭天王の祠ありて土人天王の森と称し、樵夫も斧鉞を容るゝ事を許さゞりしが、元龜以降世の乱るゝに従ひて伐木荒廢あるに任せられ、明治の初年に及び朝廷にて守り奉る處となりしより古へにまさりて尊嚴を加ふるに至りたりと云ふ。帝の御陵に關して或は異説を成すものあれど此地の公認墳墓地たる世已に定論ありて誰人も疑はざる處なれば今論はず。さて又此處より七町許にして同村鍛冶屋組に天皇の御生母当麻夫人の御墓あること、又隣村下八田村には天皇の舎らせ給ひしと伝ふる旧家ありて代々蔵する記録巻軸等あ

ること、又た加集八幡宮は御陵の東宮山の山腹に坐す郷社にして什器には土御門天皇の院宣、行教法師の書けりと伝ふる神社の縁起、細川師氏の寄附したる上指の箭等を蔵すること、是等はおかねてより耳にせし所なれど、夜中行くべくもあらずして過観に附せしは返すくも残念なりき。只だ八幡宮は華表を望み遙拝するを得て其御前を退きたり。是より福良に向ひ着て乙隊と合せしは夜の八時半なりき。客舎を鳴門丸汽船宿に定めたる福良に就て見たる等はこの先着隊の行事に属せり。聞之福良港内にある煙島は周囲一町余、松樹鬱鬱たる中に宗像神社を祀り、其南に石の小祠ありて里人は敦盛の古墳なりといへり。其伝ふる處によれば、熊谷直真^{（実）}一の谷に敦盛を撃つや其遺体を父経盛の陣營に送りしに、経盛此島に於て茶毘の烟となし菩提所を営み摩尼山紅蓮寺と号したり、従ひて爾後煙島の名あるに至りしなりと。又刈藻島は周囲七町余の島にして、松樹生ひ茂り奇石怪岩多く、俗には沖の苧藻或は大園又た旧くは王園と云ひて、平家の一門一の谷に軍破れてより公卿の御船多く波路の洋によりて浮び給へりし中には安徳天皇を守護し奉る御船此島に泊り暫く此に宸襟を慰め給ひしかば此名ありとぞ。自凝島に説に關して前載せるものもこの島に外ならざるなり。

十一日夜來の雨に心を痛めつゝも睡顔朦朧の裡に行事は終はりぬ。いざ出船と云ふにぞ打連れて湾口に出づ。出づれば則艦艇は岸にあり、汽船は烟を吐きて已に客待ち顔なり。辛じて本船に移り一声の噴報と共に運転を初むるや、福良はいつしか雲霧の間に包まれぬ。甲板に立ちて遙に瞳を移せば、煙島は煙こめたる森の如くに、白砂長く松樹蒼々長鯨の浮べるが如きは洲崎なりと知られぬ。船体湾口をはなるゝに及びては何事ぞ汐風雨を伴ひて俄に烈しくなりまさり、外は激浪怒濤を見て内は毛骨寒慄するの思しげく、愈進めば愈凄しく、遙かに涌き返へる波頭は風を起し雨を呼びながら白竜の狂奔來襲するが如く、懸崖千尺の飛瀑逆天に憤流するかと見れば船体激触して怒吼の響あり、忽にして羽化虚空に昇り忽にして地下千丈の灘谷に漂ふ。航路五里の間、此日や迂曲して六里の長きに出て、

平時四十分斗の航海此時や一時余に渡りしなり。一行眩惑して顔色を失ひ、敢て一言を漏さず。一人嘔吐に苦しめば衆亦之に倣ひ、真に生死流転の苦界と云ふ可かりしが、煩悶憂苦の裡に漸くにして撫養に着く。此時甦生の思ひを成せりといはざりしもの幾人かありし、呵々。

廟跡と波濤

葦津 洗造

此日一行の厄は独り鳴門海峡怒濤の上のみにあらざりしなり。撫養街頭難又之に継ぎ迅雨瀟々として征衣を湿し、一行の窮困云ふべくもあらず。まして道路泥濘歩行も亦難し。乃ち問屋に就き紀州行きの便船を問ふにあらず、徳島に赴かんか紀州の便船愈難きを如何せん、空しく此の地に止まらむか。風雨果して何時か止む。煩悶苦心実に名状すべからず。十四人の一団は空しく軒頭に停立して久延毘右の如く、茫然自失するもの多時、十二時近き頃議一決して始めて此地一泊の布告は出たり。この厄難に就てのみ云つゝ。先づ翌十二日も亦此の如く全日風波猶ほ止まねば、この地を出立たず在る所に空しく白浪の狂ふを瞰みて海神の無情をかこち、飛鳥の縦横に翱翔するを羨みて繋げる舟の磯立つ波に躍るに屈し、御前會議は其暇あるとき典び開かれぬ。あはれ予讀の両国を跋涉し、屋島の跡をも弔ひて帰路を山陽の陸に取らむかなと怒鳴出づる壮士もあり。あるは之より徳島に出て汽船にて大阪に赴き、逆に紀州に推寄せなむと説き出づる予定好もあり。議論紛々容易に纏るべくもあらず。水夫揖取などの明日は愈天気となりなむ、船も出づべしと云ふに、去らばとて又も一夜を明すに決したるこそ會議の結末なりしか。

さてもいふせき旅宿に名籍を投じ、而も此の四九時中十四人の一団が外如何なる行動を取りたるか、否如何なる探求を為して情緒禁すべからざるの鬱を散せしか、乞ふ漸く序を追ふて之を略述せむ。

撫養は阿波屈指の都会にして先づ小良港なり、人烟稠密して市街稍整頓す、

三二日間淡路の島に流されし一行の眼には御江戸見物も、のかはの感ぜられき。市街の西端に妙見山と云ふあり、高さ二、三百尺、警報台石碑等の設けあり、所謂此土の公園とも称すべく、風光絶佳の丘陵たり。吾人の第一着に鞋を入れしは実に此所、而して此所より撫養町附近の塩田に富めるを看得して止宿地の将来侮るべからざるを知り、又一般の地勢を察して附近探求の便に供したりしなり。隔たること数町後方中腹の所、一樹の老松鬱々蒼々然たるあり。此れ即ち足利義植、細川高国と隙を生じ京を出で、堺を路を經脱れて此土に寄食し、間もなく大同三年と云ふに五十一歳を最後とし彼の世の人となり果てし片身にして、今に之をば將軍塚とぞ云ふめる。次に相去る五町余、里浦と云ふに八幡の森あり。彼の有名な男狭磯は即ち此の浦の蟹にして、其碑は実に此内に建られ、古井の叢棘に蔽はる、を見たり。伝説に依るに里の蟹此の地に住し、右井は則ち彼等が用ゐしものなりと嗟一介の賤夫、千歳の下歷々として正史に輝き灼然として異彩を放つを見る。忠魂義胆死して余榮ありと云ふべし。猶ほ南に去ること一町、俗に尼塚と云ふあり、高さ凡そ一丈の宝篋院塔にして、元禄年間の設立に係はる方二間の玉垣、今は除去せられて後方に羅列せらる。左右に尼寺あり、尼之に住む。塔を中心として百拾貳坪の地域は区画整然として殆んど正方形をなし、御墓の名附せらる地籍は官有地なりしが明治九年に民有地となり、今は太根蕪の養育場となれり。又尼塚は地方の土民之を眼の神と称し、古来尊信甚深く供養常に絶えず。殊に縁日の如きは各所の庶民絡繹として冠蓋相望む的の繁榮をなすと云ふ。或云ふ是れ清少納言の塚なりと。此時予、尾崎教授に伴はれ此地の村長村幸八氏を訪ひて質談数刻、遂に夜に入て氏及び其僕男三名に送られ旅宿に帰着したり。以上を前日見し所のものとなす。

明れば十二日、一行中の半数大麻比古神社に向ふ。予は調査の任あるを以て特に腕車を駆て此地に馳す。神社は撫養を去る二里、板野村板野山の麓なり。折しも風烈しく時雨さへをりおりに襲ひ来りて、四方の眺望認むるによしなし。馳す

ること殆んど時余、身は忽ち恐ろしき深林の裡に運ばれぬ。車夫の案内に従ひて神前にぬかずき、やがて頭を回せば雲に聳ゆる老杉古松森々として天空を凌ぎ、蕭然たる光景人をして覺えず悄然たらしむるものあり。土地高燥にして清潔、真に幽邃を極む。社殿広大ならずと雖、自から神佐備たるは深林幽谷の中にあればなるべし。土人の語に依れば板野山の頂に奥院ありと云へど至らず。社務所に就き問ひしも得る所なし。今志料に就き案ずるに、峯に奥の院とて祭れるは猿田彦の神なるべく、本社は即ち太玉の命の孫天日鷲命（鸞カ）を祭れるものと思はる。兎に角阿波の一の宮にして延喜の制名神大社に列れり。帰途土御門院の御廟を大石村に拝す。俗に池田の丸山御陵の名あり、周囲百十九間高さ一間余、二等辺三角の形状をなし幼松雜樹之に叶ふ。街道其の道傍を通貫し土地卑湿にして田圃之を繚繞せり。御廟を去る十五間許、土御門院火葬場附屬地の榜標を建てたる方四間の霊地あるを見る。如何なる由縁の存するにか年代久遠知るべくもあらず。あはれ承久の昔、聞くも畏き三帝遠流の大珍事、義時如何なれば此の惡逆をなす。大無道、大逆賊、思ふも悲憤の種となり見るも断腸の基ならぬはなし、草叢に鳴く蟋蟀、木枯に響く風の音、孰れ涙の種ならぬかは、瞑目停立稍久し。時しも曇る一朵の妖雲、吹き来る風にしぐれきて、烈風降雨頻りなり。乃ち復ひ車を軋らして帰途に上り、十一時宿舎に着す。喫午未だ半日の閑あり、鳴門探見を試みんと一同町を出づ、数町にして渡船を籍り辛うじて人の知る土佐泊に達す。鳴門はこゝを去る二里、乃ち東岸の平砂を北に走り大毛山の山路を上り、この道極まりて孫崎に達す。而して鳴門は即ち孫崎と淡路の門岬と相挟みてなるところにして其間僅かに貳拾町あるのみ。

波濤は高く立ちて白く砕けつ。砕けては高く上り高まりては砕け、実に万斛の白雪は一行の詩想を連叫するべう思はれたり。其間大小鳴門の称あり、大鳴門は吾が阿波孫崎に連り、小鳴門はこれに北方に次し門崎の瀬に及べり。其の北門崎の丘上夜叉の眼瞳の如きはこれ砲台なり。二口大にして遠く南西に向つて開けり、

いかに此のところ自由に走馳する夷艦あるか。遠く目を放てば淡路の諸山高からず低からず連置し、山の間烟霧また包めり。再び瞰睨すれば孫崎瀨岸高く白砂を囓むところ僅かにはなれて裸島は大鳴門白波青濤のしぶきを受けて禿岩礪土只に丹く滑かに真珠の玉もころげ落つべし。一行うかれて詩趣に恋々たるの時、恰もよし日は後方の山上松樹を離る、幾間の空に微影を残し、忽ちにして大空天神の技手になる偉大の紅橋は架せられぬ。只見る赤く青くまた紫に其紅其紫裸島の上に映じ下り大鳴門の白波また青に其間を蹴破り白帆風を充して走る走舟、吁天またこの好詩趣を作り好個の治水彩画を抽出せりしか。

紅は漸次淡くなりぬ。舟は見えずなりぬ。かつは日も漸く山に近づきたり。いでやと割愛して去り海瀨に及ぶに海人等打網謳ふ声喧し。之を右手に聞きながし山を上りてまた下り、これより逆路客舎に至る。時に午後五時半日の觀興夫の胸鬱を散せしめたり。

以上は吾人が阿波に於ける行動の略述なるが、丸山御陵と尼塚とに關しては聊か特に附言せざるべからざる必要あり。そは尼塚こそ所謂土御門院の火葬場にして丸山にはあらずとの一事なり。事件既に大且つ重、固より紀行文などの余白を窃み、幾百年間経過したる地形上の変遷より其の間に起り来りたる幾多の内容外包、論じ去り論じ来りて之を考証するは到底望む可からざる処、此の故に吾人は只茲に其の伏線を敷きて以て学者の脳裡に訴へんと欲するものなり。

今里浦に於て吾人が接したる書類中、明和・安永の文書二通と過去帳とは、一は尼塚の得分差配に關し、一は御廟所の跡たるを示すものにして、近古の諸書に里浦の廟跡とあるに符合し、其のもの四百年以降の者なる外は確かに価値ある物件なり。尚ほ古来土人が尼塚を以て御門様と称し百拾二坪の地を御墓と唱へ来りしこと及び十一日を以て縁日とし人民の尊崇今に深き事は、随分一考を要すべく、其他土人の話に依れば此地を去る十数町、大坪と云ふ所ありと。此れ或は御坪の義が転化したるものにして当時院の御所たりしを語るの名ならざるか、今又一歩

を進めて歴史の上より之を云はんか、院の御孝心深かりしは諸書に見る所なり。然るに此地は既に父院の愛賞ありし所なれば、当時院の御境遇并に御心情よりして聊か考ふべき所あるが如し。且つ男狭磯の事より里浦が名所として世間に発表せられ歌題などにも撰ばれたる事と、院の風流にして和歌を好ませ玉ひし事との関係、進んで院は嫡流と云ひながら情実上北条氏の待遇が、他の二院に異なりし事など、頗る熟慮すべき点なきにあらざるが如し。猶ほ聞く所に依れば明治の初年に而も此地が何故に御陵選定に漏れたるかは大に事情の存する事にして、外には丸山・柿田・吉田等各地に競争者として表はるゝあり。内には里浦土民の頑愚なると、云ふに忍びざる一つの事情とは、却て尼塚を以て御陵となすを喜ばざりし結果、遂に今日を見るに至れるなりと。若し此の説にして信すべくんば、丸山の御陵、尼塚両者の中、御陵必しも御陵ならず、塚必しも塚にあらずして、他清少納言に関する土民間の信説の如きは、里浦以外に逃散すべきものとなるなり。天下の学者以て如何となす。

明光輦に入る

関谷 猪助

六時五十分と云ふに撫養の港を発す。昨日とは異なり、天気いと朗かにして、風もなぎ波も小さく、思へば昨午后撫養警察署前の掲示場に颶風の憂ひあり、気圧七百四十三ミリメートル東北に向ひて進向せんとす、土佐沖にて起れてとの警報は、一行が板野郡池谷村なる土御門帝の御陵を拜せんとて、大毛山を右に見、土人の古城山とて長曾我部氏の城趾と云へる、妙見神社の鎮座せる高台を後にして出て行きし時目にせしものなるか、今や夢の如し。あ、前夜未だ風波止まで、磯の松が枝潮風に吠えて波浪いや高かりしかば、紀伊路まで和船にて渡るは難かるべしと皆人が訝かりし事も空なりき。然かも一葉の小船にて十六里余の海原も物かはとて悠々として船人に漕ぐを命じたる、是はそも福良より航海中舟酔せし人もある一行の為す所とすべきかやいかに。眼を放てば夫婦岩の景は妙にして、

そが上に立てる松の様あはれいとふかし。有名なる飛鳥は見えぬ、されど裸島は見えず、淡路の方を眺むれば、潮崎は彼方に離れ、押登岬は近く水波の中に瞭然たり。愈々進みて沼島の北方に出でぬ。舟人に問へば対岸なる淡路島灘枝の浜を距る二十四町の沖にて、この島の周囲凡二里余と答へぬ。見れば東西に短く南北に長きもの、如し。其の昔脇屋刑部卿義助が四国西国の大将を承りて下向のとき、紀伊熊野の人兵船を調べたて淡路の武島に送りしと云へるは即ちこの沼島にて、一名武島とも云ふとぞ。唯一帆の風に任す一葉の舟の道なれば、風のまに／＼人の身も揺々として軽く颺りあさながら羽化登仙のこゝちぞせられし。沼島のあたり、磯に雪降り浪の花咲き千鳥の間も聞えぬ。頃しも十二時なりければ、一行の人皆昼飯を喫したり。漸く紀伊路までの半分路と聞きたりし余が心は失望の淵に沈みぬ。やがて友が島に近寄りし時日はや夕陽波を彩色りて海原遠く打かすみ、たゞ槽声の近く咿軋として聞えけるのみ。友が島は土俗苦が島と伝へて神功皇后が三韓より凱旋ましましける時、忍熊王の謀反により御船を灘波に向け給ふに暴風の為め海路を失ひ給ひけるが、苦を海中に投じその漂ひ行くに随ひて進み遂に此島に着かれたり。後遂に忍熊王を誅し目出度都に還り給ひたるを以て此島に祭れる御神を深く崇敬し給ひけりとなん。紀伊路に近きを地島と称し其の間を加太海峡と云ひ、淡島に近きを沖の島と名け其間を由良海峡と云ふ。由良の戸を渡る舟人云々との言の葉も思はれたり。沖島の方大にして周囲二里数町と称す。加太港へ着きにしは午后六時あまりにして日全く暮れぬ。磯辺の古松海風に嘯きて物凄く、町の彼方の灯火暗を破りてほのかに見えぬ。加太港は紀伊海草郡にあり、和歌山市を距る北三里なり。紀伊国は往古木の国と云へり。日本紀神代巻に

素戔鳴之尊三子、号曰三五十猛命、妹大屋津姫命、次抓津姫命、凡此三神亦能分三布木種、即奉三渡於紀伊国也云々、

とあるより名に負へるなり。後人代となりて元明天皇の和銅六年に、勅して畿内七道、諸国郡名、着好字と命ぜられしより、木を紀に改め、紀の音の響を添へて

紀伊とは定められたるなり。而して郡名は以前名草郡、海辺郡なりしを明治二十九年二月合して一郡となし、両郡の一字を取りて海草郡とはせられしなり。上陸後加太神社を遙拝し、さて歩を和歌山市へと急ぎぬ。聞く所によれば加太神社は少彦名命、大己貴命、神功皇后を祀り、仁徳の朝友が島に属する淡島より今の地に遷奉せるにて、神宝に少彦名命の神璽なる曲玉、神功皇后の御太刀、韓国より得給ひたる綾及太鼓等ありと。空腹甚だしければ一茶亭により少時一喫して腹を満たし勇を鼓して進みぬ。知らぬ旅まして夜の路なるを月あらねば提灯のせまき光先だて、一心に覚束なくもふみ行きぬ。幾山里をや越えけん午後八時過ぐる頃と云ふに和歌山市の南野崎が里の茶店につきて問ふに、老嫗あり懇ろに語る。謝して出で先づ有名な紀の川を渡る。川原の風ひえくと吹き来り、旅情転た心細し。此川は大和伊勢の国界より発し国の北部を横断し、西流海に入る。実に国内第一の長流なり。和歌山市は近寄りぬ。されど今朝まだきより蒼波万里海上の客となり瀾濤五体を疲労せしめたれば、一行の或人はよろめけり。其の徳川頼宣五十五万五千石の城下として有名なる和歌山市へと着きにしは頓て九時に垂んとせり。本町を尋ね行くに流石は行人多く人家櫛比し巨商軒を並ぶ。あ、一行は漫々たる水烟より更に静閑なる一村落に出で、又繁華佳麗なる城下に来りしなり。此夜駿河町小林某方に泊しぬ。沐浴して食に就き、急ぎて寝に入り、魂を天外の故郷に飛ばしぬ。中夜寒威烈として夢結び難く、灯火油尽きて將に滅せんとするとき、起て窓戸を排せば、夜色沈々万籟寥々唯鼾声雷の如きを聞くのみなりき。

十四日六合朗曠爽然としていと快し。旅館の時辰儀七時を報ずるや我が一行は出発せり。先づ駿河町より本町に出で藪町、岡山町、片町など経て岡公園即ち弁山旧跡に出でぬ。登り行くに仙人の硯あり。不正五角形にして内に窪みたる奇形の文字あり。神代文字なりと伝へらる。こは平田篤胤翁が神字日文伝に載せたる所の日文の中の一にや。其形明かならざりしは遺憾なりき。嘗て聞く、西洋にて古学者間には①を地球とよめるより、先年華族島津家の徽章の②なるを見て或西

洋人地球と云ふ文字にやと疑ひしとなん。此の硯中の文字は所有者の徽章の類か。さて中坂に清爽なる一亭あり。眺望甚だ絶佳なり。山巔の巖上に佐賀熊本台湾西南の役に戦死したる者の記念碑ありて、有栖川宮熾仁親王の御筆なる記念碑の三大字刻せられたり。又征清記念碑あり、二十八年二月建立する所なり。碑下四望皆宜し。市街の薨は波の如く、西南和歌山城の三疊城楼半ば古松の間に見え、東北は田藤渺々として際なし。下りて和歌山八番地柴田と云ふにて我一行は撮影せり。終りて十時半和歌の浦へと向ふ。一隊は尾崎教授に率ゐられて和歌山中学を参観し和歌山城を見舞ひたり。先発隊は清水教授に導かれて和歌の浦へ急ぐ。此処の丘彼処の嶺など皆な紅錦を張り爛々燦然として雙眸を愕かしたり。松原越しに行き行けば、途次一大伽藍あり。これなむ五百羅漢寺にして数百の弥陀仏像に色彩を施したるがありけり。和歌の浦へ着き元標を見るに距和歌山市一里十七町十七間と記せり。東照宮に詣づ。元和七年徳川頼宣の营建する所にして慈眼大師の開山なり。社殿の彩色壯麗なり。山門の石段下に山菅橋あり、こは日光山の神橋即ち山菅の蛇橋に模せしと聞けど其結構は比すべくもあらず。石の華表あり、銘に曰く

東照掲日華表劉石、維明維堅万世垂跡

と。頼宣の孝心深き祭典に仏原を奏する制を加へしとかや。慶安二年母公養珠院のためにも和歌浦に宝塔を建つ。即ち妹背山にあるものはなり。先発隊と尾崎學士が導ける隊とは此隊にて合し、彼の寂蓮法師が和歌浦を松の葉こしに眺むれば梢によする蟹人のつり舟てふ風情をぬすみて松原こしにうるはしき景を眺めぬ。和歌浦は一名明光の浦にて、聖武天皇当国に幸し給ひし時、登り山望し海此間最好、不_レ勞_二遠行_一足_二以遊覽_一、故改_二弱浜名_一為_二明光之浦_一云々のことありし所、後若浦又和歌浦に作る。実に我國の勝地にして荆関の筆倪黄の手にあらざれば其景得て状す能はざるなり。而してこの画中の境に居る今の我等は想ふに櫻宮の人なるべきか。湾頭眼_(ママ)を眼を放てば雲も皆な波とぞ見ゆる海原に真帆片帆の遙か見ゆる

あり、波静かなるは白鷗の夢も思ひやられぬ。かくて一行は玉津島神社に詣て後ち望海樓の遺跡を尋ねぬ。玉津島神社は和歌浦の北にありて和歌浦の霊と衣通姫とを配せ祭ると云へど、何れの代に建立せられしやは不明なり。往古より国史に見えし神社なれど、中世社殿頽廢し恒例の祭式さへ断えたるを、徳川頼宣此地に封ぜられしより社殿を再造せしとぞ。和歌には宇津保物語にも

年を経て浪のよるてふ玉の緒にぬきと、めなん玉出つる島

と玉出づるよしをも詠み、古へより和歌の神として詠める歌は数いと多し。望海樓の遺跡は今の奠供山にして、山麓碑あり。読むに

聖武帝神龜之年詔曰登山望海此間最好不勞遠行足以遊覽春秋二時差遣官人奠

玉津島之神明光之靈必令奠供

と中段

三帝南巡去今千余年地變物變而赤人詠田鶴蓋亦此地矣

とあり。或説にはこの山の西方に千疊敷といふ所あり、こゝぞ望海樓の跡なりといひ、又は後山なる隴山こそ神護元年聖武帝が管弦を奏せしめ和歌浦の風景を賞し給ひし所なれといふ。何れの処か望海樓の跡なるか、年代経し事とて孰とも別ち難し。この地南は和歌浦を望み東は名草山に對す。妹背山はその間にあり。夫の頼宣公養珠院の爲め宝塔を宮建せしとき、海浜二個の石あり、其の一を此処に移さんとて曳かしむるに動かず。奉行の者聞きて俱に曳かしむるに移し得たり。雄石に養珠院の法号を刻み雌石には七字の梵語を刻みて立て、此の奇石によりて妹背山の名ありとかや。但し石を見ざるこゝこそ遺憾なれ。一時と云ふに此山を眺めつゝ下り、此地に散在せる塩田を見つゝ、途を紀三井寺に取る。

威稜の雄詰

秋山 鼎造

玉津島より一町許り東すれば朝日橋あり。頗る長橋なり。是れより三町許り進みて右に曲り左にとりて名草山下に達す。厳然たる二王門に戦慄し、聳然たる石

段に仰天し、勇を鼓舞して攀ぢ登る岩根に垂るる澗流の音いとも清々なるに、側を見遣れば碑銘数多併立す。中にも

見上くれば桜しまなて紀三井寺（芭蕉翁）

海辺紅葉 礪山の秋は錦と汐風にさらせて色はさめずも有かな（常朝）

など有るを読みつゝ、喘ぎ攀づれば程なく紀三井寺の本堂につきたり。此寺一に真言宗護国院と号す。紀三井寺の名あるは南二町許りにある楊柳水、表門の磴道の傍にある清祥水、本堂の北にある吉祥水、の三井有るに依る。創建光仁天皇の世。宝龜元年唐僧為光上人の開基に係れり。本尊は十一面觀世音菩薩とす。宝物は竜宮界の鈴錫杖、等を蔵すと伝ふ。本堂は宝曆三年の再築造宮にて前面高く救世殿（賜紫前光林東竜叟）の額あり。鐘樓六角堂等数多前庭に建ち並び、朱彩見る者を目醒するに足る。今少しく他書を参考して各堂の建設年月を示さむに、山門は宝龜八年の創立にして永祿四年及天明三年に大修繕を加へしものと云ふ。尚ほ如意輪堂の下には藻しほやく煙りも中に打ちなびきかすかに沈む春の海原

など古歌の碑石有り。又真言宗三十三番の一なれば四方よりの来賓夥しく経誦の音常に絶ゆる間なし。一行感に打たれしは眺望絶佳の点にして、絵馬堂より一望するに妹背山塩田を隔て、我方に對立し、眼下には和歌の浦を控へ、海波に漂ふ友ヶ島淡路島根も眸眉の間に現然たり。何等の佳景何等の宏闊ぞ。一行は此所に暫を費やし、さて本堂の左なる坂路を下り本道に打出づ。竈山に赴かんとすればなり。紅白紛に粧ひ染げに袖ふりはえて行く田舎娘たちを見るの面白く、間なく小路に入り込みて後野翁たちの鍬かつぎながら物珍らしく此方を見る様もいとおかし。辿り行く程に向ふ野中一小丘有るを見る。依りて稲刈る翁に尋ねれば彼即竈山の森なりと云ふ。健脚の士は先きを競ひて急ぎぬ。至れば則ち御陵あり。拝を卒へ廻りて神社に出づ。此地今海草郡三田村大字和田に属し、御森は周囲三百三十九間にして、緑杉鬱蒼青竹其の間を点綴し、柵中本居翁の詠みたる歌

おたけびの神代の御声思はへて嵐はげしき釜山の松

を刻める碑あり。神社創建の年月は確かならねど、再築したるは徳川頼宣の時なりと云ふ。明治十八年よりは人の知る如く官幣中社に列せり。あはれ五瀬之命は雄水門より此の所に至りて薨し給ひけるなり。日本書紀に記して曰く、紀伊国釜山に進みて而して五瀬命軍に薨ず、因て釜山に葬ると。此時一行は社務所に付き禰宜、主典の両氏に就きて往時の地理、地方の伝説をたゞけり。両氏其知る所を以て吾人に告げ参考に供せしむ。今其要を記せば、此の地より二、三町を距て、天皇の森と云ふ小丘あり。是は神武天皇の海中を測量せられたる所にして、又南僅かなる所に權の柴、一名三笠柴と云ひて神功皇后の御船寄せし所あり。尚北方二町程に暗戸ヶ鼻と云ふ所あり、こは神武天皇の御舟御着のところが伝へらる遺跡頗る多し。是等によりて之れを考るに、上古此地一帯は疑もなく海浜なりしなり。又東南一里を距て、隣村なる安原村大字松原の内柏原と云ふ松林の中に誕生の井なるものあり。武内宿禰の産浴としたる水なりとて、旧来国の守など子の産る、時はこの井の水を酌みて産湯として宿禰が長命にあやかるを欲したるなりと。書紀景行天皇紀に

三年八月庚寅、幸^三紀伊国^一、將^レ祭^三群神祇^二而不^レ吉、乃車駕止之、遣^三屋主忍男武雄心命^一祭、爰屋主忍男武雄心命詣之、居^三于阿備柏原^二而祭^三神祇^一、仍住九年、則娶^三紀直菟道産之女影媛^一生^三武内宿禰^一、

とある事實は即ちこの地に係はるものと云ふべし。一行は此処に得る所有りたるを謝して神社を出づるに、時既に二時を過ぎたり。行く先き遠き今日の旅路なれば、我一隊は早や出発と云ふ声諸共大道を避けて遙なる森林を目掛けて進めり。こは行手を彼処と思定めし事乍ら、岐巷多かる畦路とて行く々々道も失せて唯彼方此方の荊田をば踏み荒しつゝ、行くに、漸く小路に打ち出で、揃ふ馳足にやがて竜神街通^⑧には来りぬ。爰に官幣大社日前国懸の神宮境内総坪一万千九百四十坪と記示せる標柱に接せり。此の地を海部郡宮村大字秋月と云ふ。境内丘ならずと雖

も杉竹古樹鬱葱として茂生し、両宮の神殿神々しく又森嚴なり。抑も日前神宮は神鏡を御霊とし、石凝姥命、思兼命の二神其側に祀祭せらる。国懸神宮は天日矛を御霊代とし、鈿女命、玉の屋命等相殿たり。其他神楽殿と云ひ、天道根命の祠と云ひ、共に壯嚴を極む。尚天香山、月夜見等の八十八社を列祀す。本社二種の神宝は三種の神宝に添へる皇国第二の神宝にして、神武天皇御宇当国を天道根命に賜ひけるとき至尊のものとして斎き祭らしめ給ひたる事は書紀又は国造家伝に明なる所。初め毛見郡に鎮りたりしを垂仁天皇の御代此の所に移し、朝廷の崇敬常に厚かりしが、天正年間に至り、豊臣秀吉私怨に任せて賢くも社殿を破却し奉りければ、時の宮司紀忠雄御霊を奉して高野山中に通る。後返るを得て小祠を営みて僅に安んじ奉り、国の守徳川頼宣再築に力を致し神領を附してより神威再び旧に復するを得しなり。今や聖明なる明治の大御代に会し官幣大社に列せられ、道根命の遠裔今尚系統連綿宮司の職に有り。一行此の地にも亦社務所を訪ふ。但時既に四時にして吾人に会談せるものは宿直員某氏のみなりき。乃ち宝物中産五瀬の命の納められたる矢数本、允恭天皇御奉納鏡、古代御茶器、大化年間鈴、雄劔、琵琶、古文書五十六点、有るを聞きしのみにて見るに至らず只茶菓の饗応を辱ふし、後小松天皇参宮の際御車寄の旧地たる三つ井垣、又境外一町許りの処にある鳥羽院の熊野行幸の序で参宮せられたる際行宮を作りし跡あるを一見して大社を去れり。

雄の山越

神吉 道治

一行が名草両宮を、拝辞して、境外に出でし頃、時は已に、午后四時半を告ぐ。日は早く山の端に近かんとして、其光委微たり。而もよ此日の到着予定地は、遠く泉州信達にあるとなれば、一行は進行を初めざるに先ちて、地図を案じ、里程を測り、方向を誤らざらんことを期し、尚ほ之を土民に質し、又、彼等曰く、泉州への道路其数多けれど、雄山越に如くものなかるべし。若し夫れ井関越の如き

は稍近けれど、知らぬ旅客のまして夜行には却て遠きものとなるなき能はず。あはれ孰れにもせよ行人稀なる数里の行程、之を行く諸君や何事の急に逼まられてと云ふ。之を聞く或者は落胆せり、或者は勇氣勃々たり。而も予定の動かす可からざれば一時汽車行説も起るに至れり。されど此説は行はれずして止み、全時に本隊は雄山越徒行、分隊をして和歌山より車上信達に直行し本隊到着後の便宜を供せしむるに決せり。乃ち進行は初まりぬ。先発隊は西へ本隊は東へ一步毎に相互の間隔は遠かれり。本隊の員数兩教授とも凡て九人、先づ粉河道高野街道に抜け出でて進む。仰で雄山を望めば峯巒高く雲表に聳え嶮又嶮にして峨又峨なり。而も青葉茂れる山腹夕陽を染むところは何となく吾等を招くが如くに、蛭蟹たる峯頂の一段低きところはまた吾人の前途をそれとなく教ふるに似たり。やがて高野街道に出でぬ。右は田圃にして左には滔々たる紀の川の流れあり、行くこと頃刻にして川に下り尚ほ小石勝ちなる干潟を斜めに進行すること十四、五間にして初めて川を渡る。橋は板橋四枚あまり猿口に架け連ねられたり。渡り終るや一全例の幾何的志想を以て、本街道を進行するの不得策なるを認め、緑青々たる麦田に沿ひて細き畦道を行くこと須臾、乃ち永穂村に着するを得たり。白き黒き雜り毛のあやしき犬など集ひ来りて、あやしげに声高からかに叫ぶもをかし。此の村より山口村と云ふ処迄四十町有りとは我等の間に答へて語る所なり。其中間にあるを川辺村といふ、この時後方を顧みれば太陽方に西山に頂きに接吻せんとするを見るなり。彼は一步より一步其光を収め去り、我等が足は一步より二歩二歩より三歩漸く其の運転を鈍うし行くなり。再び勇を鼓して進むに咄烏見村雀など、三五群をなして峙とする左方鬱葱たる森の方にぞ飛去るめる。川辺に到るや日輪は全く陥落し去りぬ。賤の男は鋤鎌はた牛など具して帰り行くもをかし、家々には早や夕餉の用意を取り急ぎけむ。小暗き森の間より烟立ち登り折々は水など汲むらむ、はねつるべの音のぎしぎしときこゆる、腹立たしくは覺へたれど又いと興あり。川辺を過ぐれば待ちに待たれたる山口村も早や眼の前なり、此の村ぞ

雄山越の紀州方に於ける麓なりければいたり着くや一行は夕餉の代にとて、なにくれと各々志ざせるを、あさる。されど田舎のこととて得たるは只酢勝したる鮓の一皿、干勝ちたる蜜柑の十六個、鶏卵の八個と、駄菓子子の二箱とのみ。例の油としてはなく、黄黒き洪茶にて、強て腹を作り午后七時、再び勇氣を鼓舞して進行を初めぬ。今宵晦の夜なれば、月の神の御出現もなく、只衆星の光り幽に吾等が行く前をしるべせるのみ。一行は今山路にかゝれり。この雄の山は昔より躑躅の名所たりときけど秋のもなか殊に夜の旅なれば、残れる梢さへ得見ずて、雪の進軍、さては元寇の歌などを初めとし、そのほか勇ましげなる哥ども、歌ひつゝ、登り初めぬ。道は一步一步に急又急なり。鬱蒼たる樹林は星の光りさへ中断して漏すことなく、一行の前途は愈々暗黒となりまさりて、さながら幽境に入るかと思はれぬ。吾人は小学校時代に於て「虎さへうそぶく、荒ら山中に、暗路を辿れる、旅人あはれ、旅びとあはれ、命と頼むは、灯なれや、灯なれや」とうたひし昔を回想せり。而して灯なき山中暗路を辿る九人の進行法又妙なりしなり。前者躑けば之れを、後方に注意し一人泥に入れば亦高声に衆に注意す。嚮導は只底き道筋を失はざるを意とし後尾は遅れて群に離れざるをぞ心とす。数町を行く毎に番号を呼んで人員を検査す。この外は或は歌ひ、或は笑ひ、或は叫び、行くこと一里斗にて一方の頂に達せり。例の万歳は大声にて唱へられたり。人音と山彦と、雄の峯山中、百雷一時に落ちたらんかと怪まれたる可し。之れより道稍々下り峠に就く。行くこと半里余、漸くにして滝畑てふ村に達しぬ。民家は僅に七、八、九軒なる可し。之れよりは十数町行きて、一行始めて泉州の地に入れり。泉州の地何ぞ史的研究の材料にとなる、曰く国府の清水、曰、大鳥、曰、三の御陵、曰、何、曰、某は、吾人今其地に入るや、思ひ茲に至りて自ら快哉の感ありしかど如何せん、腹は空腹となり、眼は凹めり。声亦枯れかれにして、足またをもたげならざるもの稀に辛じて山中村に達し、とある茶店を得るに及んで、始めて一息の喜びに会し、稍夫の腹を満たして、蘇生の思をなすに至れり。かくて再び信達に

向て歩を起せり。数十町にして、岡中てふ処に達し、尚進むこと十余町、漸にして信達村に達しぬれば、則先発の諸氏、吾等を迎へて村の端にあり、乃ち其幹旋にて得たる旅宿に着きけるとき、時計は既に十時を過ぐること十二分なりしなり。

翌十五日一全又夙に起き出で、旅宿を發せり。先づ信達村を心にとむるに、其地や数年前迄は海道の一駅なりしが如く、旅館軒を列ねて町の両側に建てる跡明に見へ存し、今は只泉州木綿を織出すの舎に充てらるゝもの多しとす。是蓋し南海鐵道の開通に基因せる盛衰の変ならずんばあらず。吾人信達民の為に、其變の止むを得ざるに出でしを憂とす。又村には長慶寺てふ寺あり、此の寺は中古七伽藍の一つに数へられたる寺なりしが、栄枯盛衰の数の免れ難き、今は僅に村内右手の一小岳上に其影を存留するに過ぎず。余の之を見舞ふや、一僧出で来りて、具に其往時を語りぬ。曰く、「元來の位置は村を去る二町、海会宮の池あり、此の中央にありたり。其の當時周囲は堀なりしが、今は留水の為め全く池となれり。然るに元龜天正の頃、信長の為に焼亡せられて、長徳三年更に此の山上に移す。而して此の寺は行基菩薩の辛巳^{（みづみ）}元年創建せられ旧くは寺領も多かりし寺なれど、概ね没収せられて今は尠少なる寺領あるのみなり」と。此の寺の経歴詳しくは物に見へず。予聞き終て帰れば一行中既に、信達村の外に出でしものあり。

奇なる古事談

平部 直

十五日午前七時頃信達村を出で、道を北に取りて行くに西方に森ありて其内に一祠あり。素盞鳴男神を祭る。九間二間の拝殿と三間二間の神殿とあり、神殿は頗る美麗にして所々彫刻を加へ彩色を施せり。境内広くして老松繁茂し幽邃を極む。古の海会宮とは此祠ならむ。此地は一帶の丘陵にして行基草創の海会寺の蹟なり。此寺は宏大にして七堂伽藍散在したりしが、天正の兵火に罹りて泯滅したりしなり。当社の手水鉢は此寺の礎なりきと云ふ。高さ四尺長さ六尺巾三尺余あり。其外礎なりきと思はるゝ、大石歴然として散在し、昔日の盛祭するに余あり。

こゝを出で、桜井村を過りしに路傍に一基の碑あり。彫れる文字はあれど詳ならず、裏を廻りて見るに、其台に淡輪六郎重政の墳（中略）月日末孫山本孝七条之等と明に彫れり。即ち台の二段は後に作りしもの、総高六尺余あり。重政は淡輪右衛門五郎入道正円の苗裔にして代々泉南郡淡輪村に住せり。天正中淡輪大和守徹斎が女、関白秀次の妾なりしが、秀次退けらるるに及び徹斎も亦浪士となりぬ。重政は其次男にして、会々大阪の役あるや赴き籠り、当所夏陣の戦に之れに死したりしなり。又行くこと数町にして路傍に一基の碑あり。土人に尋ぬるに塙団右衛門直之の墓といふ。高さ七尺余の五輪の塔にして、一層毎に梵字を彫れり。直之は尾張人なり、始め織田信長に仕へ纔によりて逐はるゝや数々主を変へて仕へ、後薙髪して牛鉄と号したりしが、大阪夏陣の起るや大阪城に走り、大野主馬助に従ひて此の地に来り、紀州浅野長晟と戦ひ、遂に淡輪重政等と共に死にきとぞ。檻井^{（檻カ）}を出で、北して長滝村を過ぎ蟻通神社に至る。社は道街^{（街道カ）}の東側なる赤き鳥居を入りて林中を行くこと一町程の所にあり。東面にして前には二町程もありと覺ゆる馬場あり。両側には松を植う。白砂緑葉相連り田水に映ぜる景いはんかたなく美し。是をもて見れば今来りしは裏道なりしなり。社格は郷社にして三間四方の拝殿、間口八間奥行二間の割拝殿、二間四方の本殿、其他絵馬堂、末社等所々に散在す。本殿は彫刻を施し彩色を加へて甚だ美麗なり。境域甚だ広く、古木鬱幽として何となく神さびたり。祭神のことは一定せず、伴信友翁の蕃神考によれば河内の史等が帰化せしとき奉し来りし蕃神ならんといへり。或は枕草紙^{（枕カ）}にある如く某の中將の父を祭りたるにもあらむ。現に内務省へ届出でたるは大己貴命なれども信じがたし。抑も蟻通の古事の草紙^{（草カ）}に見ゆるをばかいつまみていはんに、昔何時の御代にかありけん、唐土より種々の難問を出して御国人の智を測らんとせしことありけり。其内にも七曲になして孔ある玉を我國に送り、絲を徹して返し給へと申し、を、宮中の人々千思万考すと雖どもせん術を知らず。さる程に某の中將となん申し、を、前にも此中將によりて種々の難問に答へ給ひしかば、こ

たびも遂に此中將に托せられしに、中將いつもの如く家に持ち帰りて老父に教を乞ひぬ。老父のいはく、蟻を捕へ来り腰に絲を結びて孔に追ひ入れ、他の方に蜜を塗り置くべし。されば蟻は蜜を慕ひて必ず孔をくぐり出で容易に絲を通すことを得べしと。中將之を試みしに果して其効を奏せり。帝其智のすぐれたるを愛で厚く父子を賞し給ひき。後此中將の父の神となりしならんぞ。此事正史にも雜史にも見えず中將等てふ官名のありし時ならば大化以後のことならん。然るにかゝるめでたき事の僅か三百年余が間にかくもおぼろけになりぬることやはある。まして外国との事にはあらずや。思ふにありしこと、も見えず。されば信友翁の説の出づるも尤もなり。然れども昔より奇しきことの数々あるはたゞ事にもあらず遠き世にかゝることもやありけん。そを近き世のことの如く云ひ伝へたるならむ。名所図絵に、寺僧が開化天皇の御代の草創と云へりしを、詳ならずとは書きたれども、これ誠にやありなむ。又聞くに允恭天皇の御代草創なりと古老の説けりと。何れにもせよ新しきことにはあらず。聊か愚考を物しつるになむ。なほ識者の説を待つ。

又元の道より街道に出で、北に行きしに、一町ばかりにして道の西側に周廻十間ばかりの小池あり、其内に一小島ありて松を生ず。其の下に小碑ありて紀貫之冠池と記せり。土人に問ひしに、昔貫之勅使として紀州玉津島の神へ御製を奉らせ給ひしに、帰途此処を過ぐる時俄に馬わづらひて進まず。土人貫之に告げて曰く、これはこゝに居ます神のしたまふならん。近年社もなく験もなければ、疑ふ勿れ此あたりに居ます。祈り給へと。貫之曰く、苟も勅を奉じて此処を過ぐ。何神ありてかく我を苦しむるぞといひて、強ひて馬を進めむとせしに、貫之遂に馬より落ちて此池に冠を飛ばしたりとぞ。貫之大に之を悔い手洗ひて謝して曰く、何の神おはしますぞ御名告げねと云ひしかば、蟻通の神といふに、

かきくもりあやめもしらぬおほそらにありとは思ふべしやは
とよみて拝伏したりしに、馬の病直に癒えたりきとぞ。此事貫之家集にも出でた

り。なほ北に行くに佐野より貝塚までは名所古蹟等もなしと聞ければ汽車の便によれり。貝塚には貝塚御坊とて名高き寺院もあれば行き見んとて尋ぬる程に、感田瓦神社といふがありて、間口五間奥行三間の拝殿と二間四方の神殿と間口四間奥行二間の楼門とあり。結構美ならずと雖も、社殿新しく剩へ掃除行届き、数株の松樹青翠したたらんとて甚だ清潔なり。社務所に暫く休息し居たりしに、神主らしき老人出で来りて我等に茶を饗して丁寧に待遇すめり。種々尋ねたれども社の創立年代等は詳ならず、祭神は皇太神宮正位にして左右に素盞鳴男神、菅原道真公を合祀し、社格は郷社なりとぞ。貝塚御坊は此社より一町ばかりの処にあり、此寺は本名金涼山願泉寺と称す。殿堂頗る宏大、寺域甚だ広し。本尊は阿弥陀仏にして行基の開基、和銅元年戊申の創建なり。後僧卜半此寺に住し、始めて願泉寺と号す。宗派は元真言宗なりしが天正年中卜半本願寺顕如上人に帰依し密宗を改めて真宗となし今に東西両本願寺に属せり。此事の由を述べんと欲すれども紙数許さざる故に今略す。名所図絵にも著しく見ゆれば須く見るべし。寺を出で岸和田街道を北に行くに、数町にして西側に天性寺といふあり。俗に鮎地蔵と称す。堂宇は貝塚御坊ほどには大ならず、本尊は地蔵尊なり。寺記に曰く、当寺の地蔵尊は建武年中鮎の脊に乗玉ひて海浜に出現し給ふ。其時節逆乱なれば人敢て信仰せず、城外の堀の中へ棄てにけり。天正年中松浦氏此城にこもられしとき、紀州根来雜賀の逆徒近隣を侵し、既に岸和田の城を陥さんとす。かゝるときに城中にひとりの大法師あり。劍術妙手を震ひ蝶鳥の如く戦ひければ、逆賊大に恐れ敗走す。大法師敵を追ひ散し忽然として見えす。人皆之を奇とす。軍散して後城主時々蛸の堀に浮むを見る。之れ奇怪なりとて多くの人をして堀水を探らしむるに、木像の地蔵尊を得たり。於是前に現したる大法師は此地蔵の変身ならむと知られ初めて信仰恭礼あり。なほも諸人に相瞻せさせ、仏智の結縁あらしめんとて当寺の住侶泰山和尚に授与し給ふ。因茲こゝに安置し、世俗之を蛸地蔵と称すと。岸和田城主岡部氏世々厚く信仰したり。寺記中の城とは岸和田城なり。寺を辞し

て北し貝塚町を出でて暫くして東へ行く道ありて側に一碑あり。「忠臣捕鳥部万墓是より三十町」と彫り、其下に細そく、「おくつきのしるべのみかは世の人の君につかへん道も知るべく」と彫れり。皆々讀みて歎慨す。ゆかしく思ひしかど当日は堺泊の予定にて行先いと遠ければ其まゝに打過ぎにたり。万は物部守屋大連の臣なり。大連馬子に亡ぼされしとき万難波の邸にありしが、有真香邑に走り官軍と戦ひ大に之をなやまし殺傷すか処多し。然れども遂に力屈し地に倒れながら大音声にて呼びて曰く、万天皇の楯となりて將に其勇を効さんとす。何ぞ故を問はずして窘迫こゝに至るやと云ひ、なほ射て数十人を殺して弓劔を川に殺じ、自ら刀を以て首をさして死す。万に忠狗あり、尸に侍し遂に餓死す。万が族人並べて之を葬る。書紀に万族雙起墓於有真香邑云云とあるは是ならん。已にして岸和田に着し、城趾を見んとて尋ね行く程に、郭内に大坂府第六中学校あり、其日旧藩主帰郷したりとて運動会を催したり。然れども余等は先づ天守台に登りて昼飯を喫したり。抑も岸和田は元岸村と称したり。即ち海浜の義なるべし。さるを楠氏の一族和田高家城きて之に居りし以来地名を岸和田といふ。是即ち今の岸和田城跡なり。永禄年中に三好の家族籠城し、天正中には中村氏此城を守り、元和中には小出氏此城にありて戦功あり、岡部氏に至りて終に藩を廢せらる。城跡は町の東端にありて外濠石墨歴然たり。やがて又中学校に至りしに、清水教生^{（校主）}の知人にしてこゝに奉職せる黒岩勝橘氏^{（氏名）}に校内を案内したり。本校は明治三十一年摂河泉大演習の際 今上陛下の行在所となりしを、当日が其二周期に当れば旧藩主の帰り来りしを幸とし当時の装飾を其まゝ、写して公衆に縦覧を許したり。一天万乗の天皇陛下にして遠く都をはなれ親しく大演習に臨御ましまして武事を奨励し給ふは賢しとも言はんかたなく見るもの誰か感慨にたへざらん。

怪説異聞

奥村奥右衛門

一行茲に岸和田中学を辞して堺市に向ふ。行路二条あり、一は沿岸よりし、一

は府中大鳥等を経て行くものはなり。史料の豊富なるは寧後者にありと雖も、沿岸の地亦尠しとせず。乃ち尾崎教授、葦津氏は枝隊となりて道を左に採りて沿岸よりし、本隊は右に進みて先づ久米田に向ふ。相別るゝに臨みて約すらく、共に大鳥祠に会せんと。即ち田圃の間に行くこと里許、額原を経て久米田に達す。途一農夫の久米田に帰るものに遇ひ、具さに其知る所を述べしめ、茲に橘諸兄公の墳塋と称する一小邱に至る。松樹參差枝を交ふ。邱上一平坦の地に五輪石塔一基あり。是れ即ち公の墓と伝ふる処、就て仔細に觀察するに、基底石即ち地と称するものは風剥雨蝕所々缺損して苔厚きこと五分、実に探古の客をして楽しましむるに足るがごとしと雖も、風火二石に至りては即ち然らず。加ふるに最上の一石空を失す。曩に農夫語りて曰く、其部邱下の一小池畔に横はると。乃ち探り得て檢するに「橘諸兄公之墓」と刻せり。然れども是れ彼の塔上の空たるべきものとも覺えず。恐らくは旅行者の葉として路頭に建てたるものならん乎。嘗て聴く此碑尚「橘」の一字を見るを得と。今之を探るに字状を呈するものなく、且基底深く土中に埋没して其を確むる能はず。窃に以て遺憾とす。伝云、此墳墓は行基の建てしものにして、公は即ち行基の大檀那なりしが故なりと。然れども之を史に徴するに、公は天平宝字元年正月に薨去し、行基の入寂は是に先づ九年即ち天平勝宝元年二月なりと云へば、此説の非なること明かなり。然れども其墳塋の狀態より又古色蒼然たる基底によりて觀るに、尚墳の西部屢々古代の甕瓶を發掘することありと語る処によりて察するに、仮令公の墳墓ならざるも必ずや然るべき中古人のものならんか。去て行くこと町余、久米田寺に入る。行基の開祖四十九院の一にして、又隆池院と称す。本堂不動堂觀音堂等の数字ありて古色蒼然たり。乃ち華嚴光明の二院に刺を通じ、寺僧に叩く処あらんとせしも在らず。去て城内の三石塔を見る。伝云聖武天皇光明皇后の御陵并龜山禪定の墳墓なりと。按ずるに非也。既に帝并に皇后の二陵は大和添上郡佐保山にありて史証確然動かすべからざるものあり。但皇后の生誕地は久米田を距る遠からず（国分村）と云へば、恐

くは相混じたるにあらざる乎。辞して樓門を出ずれば、一望豁然脚下深碧を湛えて激瀨たる久米田池あり。当時の縁起にして行基の真筆なりとて和泉名所図絵所載のものを見るに、

上略 一天の聖主勅語(詔)を降して行幸を遂、万乗の文武官符を捧ぐ命地に臨む、内大臣の某殊に功を致し光明皇后勝れて力を加ふ、遂に去る神亀二年乙丑二月始(正月)て宝池を堀天平十年戊寅孟秋を以て功を成願を満畢ぬ(云々)、帰源の浄業怠らず、故に水田三百町山林千町、こゝを以て宝池に修理を加へよ下略、

と。蓋し行基の灌漑に供せんとて開鑿せしものなること疑なし。池の周り千六万五千余歩面積方八町なりといふ。試に池畔に立てば、長汀の枯柳人を招きて秋懷嫋々たり、以て旅情を慰するに足る。乃ち径路を取りて西大路に出で、尚行くこと二十余町にして府中に入る。唯是れ僻遠の寒村に過ぎずと雖も、往古国司の館のありし処にして、名所図絵に

古代国司館(の館)にして国府と云ひ又府中といふ、和泉式部が夫橘道貞、源順、紀貫之、菅原定義等、和泉守に任せられてみな此府中に居す(云々)

とあり。悵然時代の盛衰を感じつ、式内泉井上神社に詣る。札を掲げて曰く、「祭神神功皇后、皇后征韓御凱旋の時行宮を作り給ふ御旧跡にして勲功の神四十八神を合祀す、」と。行宮は即ち小竹宮にして、又旧府と云ふ。盥嗽一拝去て杜宇の後側に至れば一小池あり。清水混々として湧出し清冽掬すべし。伝へ云ふ、皇后御凱旋の時一夜に湧出す。皇后嘆称し給ひて和泉と宣ふ。蓋し和泉国号の起因なりと。按ずるに此時は尚和泉郡と称し河内国に属せしが、後元正帝の時和泉国に属せしなり。続日本紀靈龜二年四月の条に「甲子、割大鳥和泉日根三郡一始置和泉監焉」と見へ、国造本紀考又具さに之をいへり。抑此清水清冽にして甘味を帯び茶の湯に適し酒を醸すに佳なるが故に、天正年中豊太閤命じて大坂城裡に汲み運ばしめしと云ふ。池汀に一小石祠あり。里人伝へて皇后御矛を埋めさせ給ひし所なりとなす。かくて踵を回らして行くこと十数町南王子に出づ。是れ

前年摂河泉大機動演習の時、畏くも聖上の御駐蹕遊ばしたる処にして、里人石を建てて玉座の処を表すときけど、一行既に疲し加ふるに前途尚程遠ければ、拝観するを止めて信太森に急ぐ。王子を経て一、二寒村を過ぎ、左折すれば路傍旧府神社あり。延喜式神名帳に「和泉国和泉郡旧府神社」(欽)とあるものこれ、拝して信太森に詣る。彼の枕草紙に「もりはしのだの森」、又紀氏古今六帖に

いづみなるしのだの杜の楠の木(の)の千枝にわかれて物をこそおもへ
又後拾遺集に

夜だにあれば尋ねてきかんほとゝぎすしのだの杜のかたになくらむ

以下匡房、赤染衛門、和泉式部等の歌々を見るも此社が今を距る千載の往古已に人口に膾炙せしものなるを知るべし。然れども現封境は極めて狭隘なり。彼の有名な楠大樹は信太森神社の左側にありて、樹幹長大枝葉天を掩ひて恰も一森林の觀あり。社伝に彼の阿倍晴明が母は信太森の狐なりと云ひ、又社後に晴明札押石等あれども、其説く号荒唐無稽にして論ずるに足らず。時に暮色蒼然として至り、炊烟天に騰る処晚雲湿て飛ばず、村火依微として前途尚遠き吾人を疲労に驅ること切なり。然れども彼の沿岸の枝隊の鶴首して吾等を待たる、あるを知るが故に、叱咤勇を鼓して捷路を取り、遂に大鳥祠に詣る。衆稍蘇生の想をなす。是より先き本隊健脚の士の先ちて往きたるものあり。則枝隊と合して俟たる、ならんを予期して社務所に至るに、某茶を勧め語て曰く、枝隊の士は数時の前に来り俟たれしも、卿等の来る遅きが故に仁德帝の御陵に俟たんとして発足せられぬ。次に訪はれし数人は已に黄昏なるを以て堺市に入りて俟たんとして是亦已に発せられきと。衆聴きて茫然たり。已にして大鳥祠関する二、三の説話を叩き、辞して再び華表を出ずれば、一天朦朧として天將に雨らむとし、只鳥羽玉の闇夜にして一步の前も弁ずるに難く、加ふるにこの不知案内の前程尚里許なりといふ。試に歩を前方に移せば恰も踉蹌たる醉漢の如く、一指尚之を斃すに難からざるべし。然れどもかくて止むべきにあらねむば畢世の勇を鼓して行くに、前方遠からず天明

なるを認む。衆口を齊しくして曰く、市街遠からじと。是より意氣漸く昂り、辛ふじて堺に達し、漸く彼の健脚隊に合すを得たり。然れども彼の枝隊の二氏の来らざるに嫌焉たり。乃ち御陵よりして市に出ずる一衢巷に俟つこと多時、尚来らず。是に於て市街を徘徊し、遂に菅原神社に詣る。時恰も縁日に際し、男女老幼の域内に集るもの其数を知らず。喧擾熱鬧の間を排して社外に出でたり。健脚の士旅舎多き地を質して枝隊を探られしも在らず。因て決然旅舎に投ぜんとせしも曩に二氏の宿舎を定めらるゝあらむの慮あり。巡逡久しくして後警察署に到りて御陵順路の旅舎指示を請ひ、尚二氏の来り訪はゞ該宿舎に在るを告げられん事を委托して遂に意を決してやまが屋に投宿す。時に午後十時、乃ち草鞋を解き室内に蹲踞するの時、葦津氏忽焉として来り、尾崎教授ついで着かる。衆歡喜始めて愁眉を開き、其憂慮と疲労とを語りつゝ、遂に晚餐を了へ其経路を問ふ。答て曰く彼の岸和田に分袂するや、海岸に沿へる大津井に浜寺公園を一見し、五時の頃迄俟ちて大鳥祠にあり。されど本隊の来るべき様なし。乃ち道を迂回して御陵に謁し途上久しく待ちしも猶来らず。乃ち去て市街に来りしも亦如何にして卿等を此大市に求むるを得ん。遂に警察署に至り卿等の此に投宿せるを知りて来りぬと。次に大鳥祠につき彼の社務所につきて叩きたる処を伝えて曰く、該神社は官幣大社にして祭神は日本武尊なり。神宝と称すべきは唯今上陛下巡幸の途宝剣二振を寄贈遊ばされし外二、三の者あるに止まる。又域内に行在所ありと雖も是亦村内某所にありしを、志士其畝囂の聞なるを畏しとし社内に移せるものなり。又額堂は元堺宿院町にありし当神社の旅所なりしが是又域内に移したるものなりと。尚其堂内に大釜ありと雖も、是亦現時の祭器にして史料と為すべきものなしと。抑も此社の祭神は古来伝説と学説と頗る其見を異にし、或は日本武尊なりと云ひ、或は天兒屋根尊なりと云ひ、学説紛々たりと、雖も、天兒屋根尊を奉祀せるものなりとの説に帰着するが如し。今試に古今の書籍を徴するに、和漢三才図絵に「大鳥神社在大鳥村祭神五座大鳥大明神^{正一位勲八等日本武尊}」、大日本国一宮記に「大

鳥神社^{日本武尊也}」とあり、又和泉志に大鳥大明神縁起帳云と題して「夫当社者景行天皇皇子日本武尊也^{云々}」と記し、尚彼の白鳥の事柄を記して、「白鳥更飛至河内国古市郡亦其処作陵然造宮於同国大野里^{今大鳥也}鎮座以為八尋白知鳥化迹奉号大鳥大明神^{云々}」と云へるを載せ、又大鳥社流記と題して、「大鳥大明神宮五社正一位勲八等大鳥大明神」とあるを記したり。即ち是等は祭神を日本武尊と称するの説なり。然るに彼の井上頼圀翁著^{己亥}叢説中に引ける大鳥神社考贅弁には、そは石橋直之が撰べる泉州志（元禄庚辰刻六冊、寛政丙辰再刻して四冊とす）に、大鳥神社^{云々}余按昔大鳥大明神禰宜神主皆大鳥氏也、神鳳寺縁起帳云天古屋根命十一世孫大野臣從筑紫来往（一作住）觀之則○大鳥里齋大鳥神自称大鳥^{（大鳥来貳）}姓奉祖祚耶神鳳寺大鳥神宮寺也と見えたるにて知るべきなり。中略而して神鳳寺縁起に、大野と云ふ人名あるによりて、大野里など云ふ地名を捏造したるものなるべし。本社祭神の事に就きて、彼の偽縁起中、一も取るべきものなし。云々

と。尚翁は田中頼庸、大沢清臣二氏の説と同じく天兒屋根命にあるを挙げ、翁自身も之に賛せられたり。栗田翁は神祇志中にも大鳥連祖命なるを説き、又翁の著新撰姓氏録考証に、

大鳥は、和名抄に和泉国大鳥（於保止利）郡大鳥（於保止利）郷とある地名を負へり。この氏は、聖武紀（天平十八年四月癸卯）正六位大鳥連大馬呂、延喜二十二年大鳥神社流記の連署に、職事大鳥^{花押}大鳥^{花押}大鳥^{花押}禰宜大鳥^{花押}神主大鳥^{花押}と見えて、名は記さざれども、此社に事ふる神官、多くは天兒屋命の裔にて大鳥連なること知るべし。然れば神名式大鳥郡大鳥ノ神社（名神大、月次、新嘗）とある御社の神も同神にますこと著く泉州志に（前の井上頼圀翁の処にあると同じ）と云へるも、古伝のまゝ、に聞ゆるを、この後に成れる和泉志には、大鳥明神縁起帳といふを引きて日本武尊の白鳥に附会したる説を拏たるは誤なるを、今に至りては、其説世に弘まりて泉州志をと

り見るものもなければ、大鳥神社の天児屋命を祭れりとも知らざるはいと歎かしきことなり。されど古書をよく見たらむには、其惑は忽ち開けぬべし。といふ。実に此二翁の説は快刀乱麻を断ちたるものなりと云ふべく、尚之に關しては材料尠なからずと雖も煩しければ省きぬ。此夜相語り相談じ、愉々快々の裡幕につく。時已に十一時を過ぐるこゝ数十分、長途の旅行日を余すこと僅に一日。

神境の松濤

樋口 長次

明くれば十六日、昨日に引きかへて雨蕭々たり。長途の旅行も今日を限りと思へば何となく心細きに、空天の涙落ちそはりたるは又なくさびし。処の名の堺たるも亦あはれなる哉。蓋しこの地は摂河泉三州の堺なるを以て其俣この名を負へりと云ふ。此地の史上に現はれたるは南北朝以後にあり。足利義満のとき山名氏清を以て守護とし、氏清此の津に城きて泉府と称す。其後明徳年間大内義弘之に代はりしが、応永年中義弘宗師に反してこの地に戦死す。其後細川満元の領する所となり、爾來細川氏の有に帰せしが、晴元の時家臣三好長基をしてこゝに守護たらしめぬ。此頃諸国の船舶四時輻輳し来りて、已に近畿無二の互市場たりしなり。長基の死するや子長慶、晴元に反して此処に寄りしが、永祿の末に及んで、織田信長、三好一族を降して国庁を此地南の莊に置き、豊臣秀吉の時、庁を北の莊に移して小西行長をして守護たらしめたり。当時堺市の繁盛は其極点に達し、富家豪商軒を連ね薨を並べ、内外の往来一に此地を次で中心とす。逢て徳川氏の代、町奉行を置きて政庁となしたりしが、此地の豪商等漸く大坂江戸に集められたると、港湾の形状巨船を容るゝに便ならざるにより、其繁榮漸く大坂に移り、市況稍や衰頽に帰せしも猶全然旧時の盛態を棄てたりといふべからず。其產生せる人物には、小西行長あり、僧呂利新左衛門あり、千利休あり、及び牡丹花肖柏あり、以下尚多しとす。この故に往て訪ふべきもの固より尠きにあらねど、此日帰館せざる可からざるの事情は吾人をして優に所見あらしむるの暇を給せず。乃

只二、三の寺院を一見するに決し、尾崎学士、額賀、葦津二氏及び余、一行を代表して市中にとゞまり。清水教授以下他の諸氏は御陵を拝せんとして市外に出立す。余等の一行は雨のそぼふる中をたどりて先づ祥雲寺に至れり。寺は寛永二年沢庵和尚の開基する所、寺内に老松あり、蒼々たる枝葉左右に拡ること六、七間、高さは一丈五尺に達するのみ。密然たる翠蓋総て八団に分れ、或ものは蜿々として空中に蟠り、其狀臥竜の如し。故に臥竜の名あり。松の種類は姫子松なり。此松旧く豊公の寵愛する所たりしが、公之を此地の紳商谷正安に賜ふと云ふ。後此寺の開基あるや、僧之を商家にうけて庭中に植ゑ、以て四百年後の今日に至れりと云ふ。一行実には其美を賞すること多時、漸く辞して去て南せんとせしに、前方に一寺堂の見ゆるあり。之を聞けば顯本寺なりと答ふ。乃喜で至るに本堂開山堂等並び立てり。宗派は日蓮宗に属す。史に称す、享祿年間三好長基入道海雲の一向門徒と争ふや、遂に其攻むる処となりて又起つ能はず。遂に日來信ずる日蓮宗顯本寺に楯籠りて思の俣腹切らんと待ち構ふ所へ、敵寄せ来りて四方を取りまきたり。海雲は本堂に端座して腹十文字に揆き切り、腹(腹)ち繰り出して天井に投じて死す。殉死するもの七十余人、腸を投げ着けし迹近世迄ありしか。事は続応仁記に見え、寺僧又之を口にす。然れども当時顯本寺は今の開口神社の近傍にあり、其後此所に遷せしものなりと云ふ。海雲法名を善室南宗寺と号す。面(面)して此寺の一小僧余等を本堂の裏なる彼の墓に導けり。碑は御影石を以て造り、高さ二尺余にして、表に帰本海雲善室大居士と九字を彫り、裏に天文二癸巳六月二十日と記るせり。余等之を吊ひて後顯本寺を去り、材木町なる妙園寺に至る。別隊中の三氏亦来てこゝに我等と会せり。此寺は法華宗にして僧日珙上人の開基する所たり。三好之康寺地を寄附すと云ふ。有名なる蘇鉄は内庭にありて、見料を納めざれば見るを得ず。実に人口に膾炙する程ありて、大枝二十三本、高さ二丈余、延長二十尺余あり。樹下に古針を投じ以て營養となす。其狀恰も枯松葉を集めたるが如し。又一奇觀なり。此処を立ち出づれば菊一文字とやら文殊四郎とや称して

刀物売る店多し。因記、段通は此地の名産とす。道を急ぎて高野鉄道堺停車場に至りしに、こゝに清水教授の一行四氏と合併せり。この一行は旅宿を出で、より東に向ひ、先づ大坂府第二中学校の附近なる反正天皇の陵を拝す。この御陵は周囲二百三十間あり、楯井陵といふ。楯井陵の南八町にして仁徳天皇の陵あり、大仙陵と申して日本有数の大陵となす。陵の周囲は七百六十三間、外堤の延長は千三百八十三間あり。陵の近傍に五、六の塚あり、其の何の塚たるを知らず。或は

武内宿禰の墓などありと伝ふ。履中天皇の陵は堺より小栗街道を南に行くこと十町余にして神石村大字石津の東北に在り。耳原南の御陵と申す。濠渠ありて堤の延長八百八十三間、陵の周囲は六百三十六間なりとす。以上を他一行の所見とす。これより一同汽車に投じ住吉に向ふ。遙に西を眺むれば、嘗て近よりし六甲、武庫、摩耶の諸山は遠く連り立ちて、淡路島は睡れる如く横たはり、浪平けく海霞みておだやかなる景色そゞろに吾人をして思の半ばに過ぎしめたり。やがて住吉に着きぬ。住吉は万葉時代よりの歌名所にて、恋わすれ貝、人わすれ草、浜の松風、磯波の音など様々に云ひはやされ詠みなされたる所なるが、四社明神の鳥居前は松樹むらだちて四時婦女子の遊園地となり、海水浴は今至る所の浦々に行はるれど、此地には早くひらかれて海士が児の様を学ぶもの久しくぞ来り通ふ。むかしは毎年六月十四日に限り近き所の人々此地の潮水に身を浸して病を治し、よゝ恙なきを祈りたりし由聞き及べり。さて鳥居を入れれば一条の賽路は遠く杜前に通じて、遂に太鼓橋あり、蓮池あり、境内には大小各種の石燈籠の奉納に係るもの多く、四棟の社殿は自ら厳かにして神威の高きを示す。抑も此明神に神功皇后の御代十一年の創造にして、底筒男命、中筒男命、表筒男命を祭りたりしを、後の世神功皇后を併せ祀りたり。中にも底筒男命の社殿は壮大構麗（マツ）にして、四座中正面に第一位に安ぜらる。尾崎、清水の両教授は社務所に就て聞きし処あり。之を聞くに当社には住吉神代記なるものあり。綿の如き紙質にて造りありて、旧くは四部あり、一は宮司之を蔵し、一は社殿に納め、一は官に奉じ、一は氏子中

に之を授けたり。代選りて今は社殿に納まれるもの、外何所に行きたるか分明ならずと。この時一同は其写本を一見するを得たり。こは住吉社にとりて唯一の縁起書たるものなるべきも、祭神の序次に就ては現在の序と異なるを見たり。かくて一同は再高野鉄道住吉駅に向ふ。

安倍野懷古。をはり

藪 重吉

帰館の日の午前十時許に住吉を出で汽車を駆りて東成郡勝間駅に下車し、東すること二町余にして阿部野神社に達す。乃ち二の鳥居より入り参拝後、直に社務所に詣る。此日の急忙はいふ迄もなし、彼に一分を失へば山田に到着せざることあるべく、此の一秒を失へば見聞の量を減ずるの恐れあり。是れ吾人が雨を冒し泥路を走りて四方に注意を怠らざる所以、応対質談の間も心裡寸毫の余暇を感じるなき所以なり。かくてこゝに見し宝物中には親房朱書の指もの及び顕家卿の和歌并に顕家の系図等あり。顕家書の藤原清衡願文は世に有る摺ものと一般なり。旗は方二尺余にして中央に紫色を以たる円を画き、右に「疾如風徐如林」、左には「侵掠如火不動如山」と書かれたり。この孫子の語即親房卿の朱書なりといふ。次に巻物あり。一は和歌を、一は応答文の如きもの二種を一巻になりたるものなり。即「（追言五）号令進上候可入見参賜候以上」とあり、和歌は、「春暁月」といふ題にて「立渡る霞にこめて春の夜もまた明やらぬ山の端の月」御披露顕家、とあり、尤も珍しきは、山口県周防大島郡屋代村の人村上兼助氏の奉納に係る系図にして、之を信なりとせば北畠の嫡派顕家卿の後嗣は今に伝はれりといふべきなり。今略系を掲げんに、北畠血統略系、「北畠親房、顕家、顕成（村上師清と改む）、義顕、雅房、隆勝、義益、武吉、元吉、元武、就武、広親、元敬、広武、就顕、親章、房顕、元顕、兼助」、是れ元と当社が普く北畠親房家の系図を求めし時に、此村上兼助なる人より直接奉納に接したるものなりとか。而して同社の社人某氏の如きは深く其系譜を信じて伊勢北畠系図其他の諸系に勝れりとなせ

り。休憩すること凡そ二時間、食後暫くにして神前を退く。抑も阿部野の地は天王寺の南、住吉の北なる一帯の総名にして、今は東成郡中にありて住吉に到る道に当り、古への南海道なり。而して南北朝の時、北畠顕家、賊将高師直と戦ひこゝに戦死せりとは太平記の伝ふる所、正統記には曰く、顕家卿伊賀、伊勢をへて大和に入り、奈良の京になん着にけり。其より所々の合戦あまた度々互に勝負侍りしに、全五日和泉の国にてのたゝかひに、時やいたらざりけん、忠孝の道こゝに枉りはべりにきと。是より生ぜる説には阿部野にあらずして堺の東にある石津なりといふ。一行は又石津に行きて研究せん心算なりしが、実験の数多有るを以て遂に行くを果さざりしが故に、其に就て何等の云々することを得ず。こは他日を待たん。其より阿部野の東方に有る小松塚、俗に大名塚といふ所の顕家卿の墓に詣づ。高六尺余にして、傍に小松五、六本あり。裏面に文字なくして、表面に「別当鎮守府大將軍(つゝ)從一位權中納言兼右衛門守陸奥守源朝臣顕家卿之墓」とあり。乃参拝して一行は本道を通り、天下茶屋の公園めきたる所に至る。尾崎教授と伊東氏は所謂天下茶屋に至られしが、今門鎖されて内部には入るべき様なしとのことなり。其より一行は天王寺停車場に至る。時に二時頃なりき。修学旅行の目的も是にて達せられたり。是に於て午後二時卅五分発の汽車にて天王寺駅を出て無事帰館したり。時に宛も午後十時なりき。抑も此旅行たるや得る所少なからず。此報告書只要領を摘みしのみなれども、併も史料の豊なる詩財の富なる未だ嘗て見ざるを齎したり。併のみならず山水秀美風光明媚を以て積日苦学の鬱を散し神心を爽快ならしめ、山路險悪を激する怒濤は以て能く困難にたへ身体を健康ならしめたり。嗚呼将来有為の志を抱く、吾人青年の旅行は斯の如くならざるべからず。豈身を飾り財を費し脚を車馬に委ね妓を伴ふ等の紳士旅行と日を同じくして語るべけんや。

附記

旬余に亘る旅行期間には、山海の外に馳騁解航して、征夫漁郎も及ばざるが如き苦酸に遭遇し、尋で来し二週の冬期休業中は、人事を内にしつゝ、学窓を開いてぞこの探究録の成稿に潜心す。諸子や、前後に於て、克く研鑽に忠実なる旨を発揚せりと謂ふべし。いま稿を閲するに、或人は甲の点に疎にして、或人は乙の点に精しく、彼なる部分は恰も花卉の如くに、此なる部分は宛ら果実なるかの觀あり。さるは、当時見聞の実状に種々なる庭徑あり。探查地区に従ひて注意点の必至的相異あるに起因し、之を以て諸子が熱心の度を甄別軽重するに足るなきは、親しく諸子の行動に就て知る予の言明する所にして、又概して遺憾なき編録なりと云ひ得るを信ず。なほ只望蜀の念を前途に投ぜんか、そは、平素層一層に学的根底の修養に力め、次年度に於ける探究旅行の際、進歩せる効験を挙ぐるの点にあり。一読感ぜる所を録後に附記す。

明治辛丑の如月

尾崎八束識

曩に吾部は、雑誌紙数の都合上、諸氏探究の結果にして論証過多に亘る部分は、探究録以外に於て、特に本誌に向けて寄稿せられんことを請求したり。本掲掲載の今こゝにこの事ありしを明かにし、又諸氏の齎らせられたる玉吟二百首の如きは今回余白なきを以て他日の紙上に載すること、せり。諸氏之を諒とせよ。

雑誌部員

探究余瀝

○四条畷

おち葉して血色まはらの畷には今よりとしもきた風のふくち、の実のと、めし種は飯盛の山のかひある名にそ残りし北風によしちりぬとも若さくらにほひはたかし飯もりの山今も猶畷の風のなまくさく身にしてみてこそしのはれにけれあな高や建てしさいさは飯盛の山よりも高や其いさをしはあつさ弓ひきかへさしといとみけん跡なほのこる楠の一本北風に君みまかりし跡とへはなはての松にゆふ日か、れり北かせにちりし昔をしのふにもなはてのさくら影の淋しきさくら井のち、の言の葉つちかひて畷の花と君やちりけんなき数に在る名と、めし言の葉の世に香くはしき楠の一本千代までもくちぬほまれを止め置きて若木の桜風に散にき秋風にちるもみち葉を見ても猶あかき心のむかししのはる手をあらひ口す、きして奥つきに額つき居れば松風さわくおほけなき身にも昔の梓ゆみひきかへしつ、しのはる、哉

○大阪城

唐こしの津にも移して見るへくは名に大阪の跡しのふへきあはれこの大城の堀しうもれすは世に徳川は流れさりけん栄ゆへきひさこの蔓はかれしかと形見に残るこれの石すゑ津の国のなにはともあれ見てゆかな世にも稀なる城の岩垣うみの子の八十網続きうけひけん千引の巖なとうこきけむひと度は虎ふす野さへさわかし、跡ともみえぬ跡の哀れさ

とよとみの人にまされるを、しさは石みてもしれ大阪の城なりいてしひさは遠き昔にてかため床しくのこるいは垣奴より大内山にのほりにしひとのかたみとのこるかこの城唐野まで其手伸し、ましらなれば築きし城も人まねならず武士かしのきけつりし跡とへはいまもさひしき松かせの声とよとみの高きいさをは此城の石すゑにても知られける哉もの、ふの魂はいつこを迷ふらむ風なまくさき大阪のしろ力世をおほひけむ人のあと所を、しくもありはかなくも有

○摩耶山

ふみ破るまやか山路は赤松のふる根をたにも頼まる、かな一度はくも井に音をもそへにけむ摩耶の山風名残さむしも一本の松にあはれをと、めつ、まやの高根に紅葉散りしくまやの山のほらぬ我も名をきけはありし昔のしのはる、哉心あらはふきちらさん山おろしふもとおほろの浦の烟を登りこしうさもつかれも忘れてなかも嬉しきまやの山寺登りつ、数へしほとも高からてくたりはちかき摩耶の山道心なく北にかはりしうらみさへそひて身にしむまやの山風摩耶山のなかめはをかしちぬの海も唯足本に池のこと見ゆ十坪あまり芝おふところ古への城あとなりとさと人かたるはる／＼と摩耶の高根をゆきゆけは浮世の塵は遠さかり晁まやの山天雲ちかくのほりても都は見えずみちとほみかも今もなほうらみや残るまやの山はらわたさむし峯のまつ風北風にくもらさりせば摩耶の山高きを今もあふきてましを

八 東
大 直
洗 造
重 吉
直
鼎 造

尾崎 八束
額賀 大直
葦津 洗造
藪 重吉
平部 直
秋山 鼎造
神吉 道治
大林 完
樋口 長次
伊藤 千可良
関谷 猪助
奥村 奥右衛門
伊東 増衛
清水 保臣

道 治
完 次
長 次
千可良
猪 助
奥右衛門
増 衛
保 臣

○布引滝

織り出てし綾とそ見ゆる布ひきにちりてはかゝる峯の紅葉もみち葉の錦のあやもおりそへて秋ははえある布ひきの滝くれなゐにそめし紅葉をぬきにして錦おりかく布引のたき布引の名にはたてとも秋くればくれなゐふかき滝の色々な事ならぬきの一筋たひねかし進るたまをぬきてゆかましくりかへしかへしてをみん山姫のたえすさらせる布引の滝布引とたか名つけてか世の人の口に長くもかゝりそめけむまそてにもかけてや見まし布引の滝の白糸いとまありせは山姫かくりいたす糸と思はれて岩根にかゝる布ひきのたき夕やけの雲の峯なすもみちはの中よりおつる布ひきのたき雲井よりにしきとみえておちくるは紅葉のうつる布引の滝幾千ひろつゝける布を昔より幾千代かけてかくはさらせるさにつらふ岸の紅葉をぬきにして錦おりなすぬの引のたきしら絲をたか織りはへていつよりかく引懸る布ひきの滝

○湊川

まうて来つ涙はかりの港かは渡らんとせはまたやせかるゝみなと川君につかふる例には幾代ひかるゝなかなるらむささまれし石よりもなほ楠木のかくはしき名ぞ千代匂ふ覧湊川よしやなかれは絶えぬとも楠のしつくの匂ひあせめや水戸には波さかまけと瀬を早み水さりけなく流れぬるかも其かみの心をくめはみなと川かけぬ波にもそてはぬれつゝ君かためつくしゝいさを常しへに流れてつきぬみなと川哉みなと川世々になかれてそのかみの真心かをる菊のした水

八 東 大 直 洗 造 重 吉 直 鼎 造 道 治 完

みなと川むかしの川瀬かはれともかはらすかをる菊の下水君かためきみかつくしゝ真心は嗚呼忠臣とぬかつくひさし湊川きくのした水今もななかれて世々にかくはしきかなくに民のかゝみとなりて湊川千代に八千代にすみ渡るらん湊川みつこそたゆれかくはしき匂ひはつきし世々に流れて時代へて水こそあせめ湊川むかしくみ見ぬひとやあるへき

○須磨

風を無み梢にかゝる白帆にも須磨もる人や立ちさわきむ緋威のよろひのちしほ今もなほ紅葉にのこる須磨のふる寺つれもなく若木の桜ちらしけん名残身にしむすまのうら風すまの浦や汐ひきされは諸共に松の影さへとほさかりゆく須磨の浦や並木の間より眺むれば青葉にかゝる海士の釣舟秋寒きひよとりこゑのおろしにも昔を見ゆるすまのうら波須磨のうらむかしを忍ふ旅ひとの袖にもひゝく黄昏のかね秋風に若木のはなの跡とへは葉さへみたるゝすまのふる寺月花にしらへし笛はむかしにて音あはれなり須磨のうら波須磨の浦や水泡ときえし武士の昔おもへはかせも身にしむ秋ふかくそまの上野を我ゆけは尾花かすゑに風そよくなりそのむかししのひゆく手に立返るすまの浦わの波の淋しさすま寺の鐘のひゝきにしくれきてぬるゝ袂に紅葉ちりしくむかしへをおもひかへせは旅人の袖にもかゝる須磨の浦波

○明石

明石かた入日裾ひく波のうへを見つゝ分けつゝ行く船路哉

長 次 千 可 良 猪 助 奥 右 衛 門 増 衛 保 臣 大 直 洗 造 重 吉 直 鼎 造 道 治 完 長 次 千 可 良 猪 助 奥 右 衛 門 増 衛 保 臣 八 東

今もなほかたはなけれど芦田豆の鳴音きこえぬわか浦哉
これこそと思ひさすへき島山もなけれどさすかわかの浦哉
大御代のひかりもそひて玉津島昔にかへる和歌のうらなみ
名にし負和歌の浦には来しかとも歌も得詠ます我如何せん
玉津島見まくのほしきなめより名にも立けむ和歌の浦波
和歌の浦や瀉をなみとの言のはを我にもみする芦田豆も哉
瀉はいかに芦へは何処和歌の浦汐満くれど田鶴は来なかつ
和田の原よせくる波のしく／＼に見巻もほしき和歌の浦哉
心あらはたつの一群なき渡れかたをなみとの跡もとめむ
心ある海士のしわさか藻塩やく烟にむせふわかうらまつ
瀉をなみ幾代へにけん和歌の浦むかしの鶴の影たにも無し

○阿倍野

血にそみし阿への、露を見てしより幾年かこつ算なるらん
はらわたをたてとてなれは鳴かさらん阿倍野か原の鴨の声
あへ野なる風をたてにとめかねて草葉の露ときえし君かな
石ふみの御前の松は此君のたかきいさをのしるしなりけり
君かためうせし阿倍野の跡とへは物淋しくも村さめそふる
武士の魂のゆくへも迷ふらんさむき阿倍野の雨のよな／＼
紅葉ちるあへのか原の木枯は君かうらみのなこりなるらむ
矢さけひの声の名残の松風もしめる阿倍野のむらさめの空
矢さけひの昔しのひで見返れは血汐染めなす紅葉ちるなり
苔おふる墓のお前にまゐる来れは小松動きてあめふりいてぬ
いにしへの阿倍野の原の跡とひてしのふ心は神もしるらむ
奥つきにかゝる涙や雨となりてあへ野の空は打しくるらむ

重吉 朝霧をはらふ阿倍野の秋風にいまもきこゆる矢さけひの声
直 わか桜こゝに枯れすは吉野山のとけき春も見てましものを
保 臣

○住吉

つゝみ打つ岸波近しすみのえは松の葉琴の音にあはせつゝ、
住のえの浦波とほくしくれつゝ雲にきえゆく淡路しまやま
昔よりみいつとほとき宮はしらみ国を守れいく代へぬとも
宮柱ふとしくたてゝしつまる神のみいつそ尊とかりける
よる波のまた立ち帰り来て住まむ名も住のえの姫松がもと
住のえのみぬ世かたりもとひてまし物いひかはせ手枕の松
すみの江の松の梢の千代かけて仰きまつらむ神のめくみを
住のえの岸による波立返りまたこそとはめたまくらのみつ
たひころもいさぬきすてゝ見てゆかむ松風きよし住吉の浦
住よしの松のみとりの千代かけて鎮まりませる神の尊とさ
住吉の松のみとりの千代かけて神も守らむきみかおほ御代
こし方の旅のつかれもわすれ草つみてやこゝに住よしの里
おほる月の松にかゝれる春やいかに紅葉匂へる秋も住よし
わすれかひよし拾ふともすみよしの神の稜威を人な忘れそ
保 臣

八束 千可良
大直 猪助
洗濯 奥右衛門
重吉 増衛
直 保臣
鼎造
道治
完 教授・大平和典氏によるもので、同氏が在職中の令和元年度に本紀要原稿として投稿されたものである。

〔付記〕本資料の翻刻・校正は、これまで館史編纂業務を担当していた元当センター准教授・大平和典氏によるもので、同氏が在職中の令和元年度に本紀要原稿として投稿されたものである。

千可良 (研究開発推進センター記)
猪助
奥右衛門

